

玉名市内遺跡調査報告書IX

— 平成24・25年度の調査 —

平成29年（2017）3月

玉名市教育委員会

玉名市文化財調査報告 第33集

玉名市内遺跡調査報告書IX

— 平成24・25年度の調査 —

平成29年（2017）3月

玉名市教育委員会

序 文

玉名市は、熊本県北西部に位置しており、古くから小岱山や菊池川、有明海の恩恵を受け、豊かな自然や歴史的資源に恵まれた地域です。旧石器時代から今日に至るまで長い歴史を持ち、県内の中でも遺跡の数が多く、装飾古墳をはじめ、旧干拓堤防施設など各時代の国指定史跡も多く所在しております。

九州新幹線も開通して5年目を迎え、県北部における政治経済、教育文化、観光の中心都市としてさらなる発展を遂げようとしています。このような中で、玉名市教育委員会では、公共及び民間の様々な事業に対応しながら調整を図り、事前調査から発掘調査等を行っております。また、市内に所在する文化財の状況把握にも常に取り組み、埋蔵文化財行政の改善、充実に努力しています。

本書は、平成24・25年度に実施した各種開発に伴う試掘確認調査・測量調査などの成果をまとめたものです。本書が市民の方々の埋蔵文化財に対する理解の一助となり、広く教育、文化の発展に寄与できれば幸いに存じます。

平成29年3月17日

玉名市教育委員会
教育長 池田 誠一

例 言

1. 本書は、玉名市教育委員会が平成24・25年度に国庫補助を受けて実施した、玉名市内遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、玉名市教育委員会文化課田中康雄、末永崇、齋父雅史が担当した。
3. 本書掲載遺構及びトレンチ等の実測図は、各調査担当者が作成した。
4. 遺物の実測は、古閑敬士、大倉千寿、江見恵留が行い、デジタルトレースを江見が担当した。
5. 調査時の写真撮影は、各調査担当者が行い、遺物写真撮影は齋父が行った。
6. 掘図に使用している座標は、玉名市役所税務課の地籍図等から転記した。座標値は世界測地系の第2座標系に基づいており、方位は特に記載がない限り座標北を示す。
7. 同一年度に同遺跡の調査を複数行っている場合には、アルファベットによる調査地点名を付している。
8. 遺跡名称は、基本的に調査時の名称で統一し、その後名称変更したものについては、本文内で変更後の名称を付している。
9. 調査地の地番については、原則として文化財保護法に基づく届出・通知の際の地番を表示している。いくつかの調査地点については、分筆等により、新たな地番が付されている場合がある。
10. トレンチの表記は本文中を除きと省略している。
11. 出土遺物の整理作業は、齋父が担当し、玉名市文化財整理室で行った。
12. 本書の執筆、編集は、各担当者が調査後に作成した報文をもとに、齋父が行った。

本文目次

序文

例言

本文目次

挿図目次

写真目次

表目次

I 調査の概要

1	調査の体制	1
2	調査の方法	1
3	調査総括	1
4	活用	3

II 平成 24 年度の調査

1	年の神遺跡（A 地点）	9
2	木船西遺跡（岱明玉名線建設予定地 A 地点）	11
3	大原遺跡（岱明玉名線建設予定地 B 地点）	12
4	築地館跡（A 地点）	13
5	築地館跡（B 地点）	17
6	築地館跡（C 地点）	20
7	吉丸前遺跡	24
8	亀甲遺跡	28
9	春出遺跡	41
10	高潮船着場跡（第 1 次調査）	42
11	南出遺跡	45
12	大原遺跡（岱明玉名線建設予定地 C 地点）	46
13	溝上地区の古墳群（分布調査）	47
13-1	宮の後古墳	48
13-2	赤禿古墳	51
13-3	前田古墳	52
13-4	真福寺東古墳	54
13-5	阿弥陀塚古墳	56
14	山田地区の古墳・窯跡	57
14-1	糠峯古墳	58
14-2	高岡いっちょう畑古墳	58
14-3	保多地古墳群	59
14-4	保多地窯跡群	62
15	塙原古墳	63

III 平成 25 年度の調査

1	伊倉宮の後遺跡	67
2	年の神遺跡（B 地点）	69
3	今泉遺跡	82
4	桜原遺跡	83
5	池田遺跡群	84
6	布毛遺跡（玉名平野遺跡群 A 地点）	85
7	六反田遺跡（玉名平野遺跡群 B 地点）	86
8	高瀬船着場跡（第 2 次調査）	87
9	備中原遺跡	89
10	尾崎遺跡	90
11	内添遺跡（玉名平野遺跡群 C 地点）	91

報告書抄録

奥付

挿図目次

第 1 図	平成 24 年度調査地位置図	4
第 2 図	平成 25 年度調査地位置図	5
第 3 図	年の神遺跡（A 地点）調査地位置図	9
第 4 図	年の神遺跡（A 地点）トレーンチ配置図	9
第 5 図	年の神遺跡（A 地点）トレーンチ土層断面図	10
第 6 図	木船西遺跡調査地位置図	11
第 7 図	木船西遺跡トレーンチ配置図	11
第 8 図	木船西遺跡トレーンチ土層柱状図	11
第 9 図	大原遺跡調査地位置図	12
第 10 図	大原遺跡トレーンチ配置図	12
第 11 図	大原遺跡トレーンチ土層柱状図	12
第 12 図	築地館跡（A 地点）調査地位置図	13
第 13 図	築地館跡（A 地点）トレーンチ配置図	13
第 14 図	築地館跡（A 地点）遺構実測図	14
第 15 図	築地館跡（A 地点）S01 出土遺物実測図	15
第 16 図	築地館跡（B 地点）調査地位置図	17
第 17 図	築地館跡（B 地点）トレーンチ位置図	17
第 18 図	築地館跡（B 地点）出土遺物実測図	17
第 19 図	築地館跡（B 地点）遺構実測図	18
第 20 図	築地館跡（C 地点）調査地位置図	20
第 21 図	築地館跡（C 地点）調査区分別図	20
第 22 図	築地館跡（C 地点）遺構配置図	21
第 23 図	築地館跡（C 地点）遺構実測図	22
第 24 図	吉丸前遺跡調査地位置図	24
第 25 図	吉丸前遺跡トレーンチ配置図	24
第 26 図	吉丸前遺跡出土遺物実測図	24
第 27 図	吉丸前遺跡遺構配置図	25
第 28 図	吉丸前遺跡遺構実測図	26
第 29 図	吉丸前遺跡トレーンチ土層断面図および柱状図	27
第 30 図	亀甲遺跡調査地位置図	28
第 31 図	亀甲遺跡トレーンチ配置図	28
第 32 図	亀甲遺跡主要遺構配置図	29
第 33 図	亀甲遺跡遺構平面図 1 およびトレーンチ土層柱状図	30
第 34 図	亀甲遺跡遺構平面図 2	31
第 35 図	亀甲遺跡遺構平面図 3	31
第 36 図	亀甲遺跡遺構平面図	32
第 37 図	亀甲遺跡トレーンチ土層柱状図	33
第 38 図	亀甲遺跡トレーンチ実測図 1	34
第 39 図	亀甲遺跡トレーンチ実測図 2	35
第 40 図	亀甲遺跡トレーンチ実測図 3	36
第 41 図	亀甲遺跡トレーンチ実測図 4	37
第 42 図	亀甲遺跡出土遺物実測図	37
第 43 図	存出遺跡調査地位置図	41
第 44 図	存出遺跡トレーンチ配置図	41
第 45 図	存出遺跡トレーンチ柱状図	41
第 46 図	高瀬船着場跡平成 24 年度調査地位置図	42
第 47 図	高瀬船着場跡トレーンチ配置図	42
第 48 図	南出遺跡調査地位置図	45
第 49 図	南出遺跡トレーンチ配置図	45
第 50 図	南出遺跡トレーンチ土層断面図	45
第 51 図	岱明玉名線建設予定地（C 地点）調査地位置図	46
第 52 図	岱明玉名線建設予定地（C 地点）トレーンチ配置図	46
第 53 図	岱明玉名線建設予定地（C 地点）トレーンチ土層柱状図	46
第 54 図	溝上地区的古墳群分布図	47
第 55 図	宮の後古墳石棺実測図	49
第 56 図	赤堀古墳実測図	51
第 57 図	前田古墳石棺実測図	52
第 58 図	真福寺古墳石棺実測図	54
第 59 図	山田地区的古墳分布図 1	57
第 60 図	山田地区的古墳・窯跡群分布図 2	59
第 61 図	保多地 1 号墳採集遺物実測図、2 号墳石棺実測図	60
第 62 図	塚原古墳調査地位置図	63
第 63 図	伊倉宮の後遺跡調査地位置図	67
第 64 図	伊倉宮の後遺跡トレーンチ配置図	67
第 65 図	伊倉宮の後遺跡トレーンチ土層断面図および出土遺物実測図	68
第 66 図	年の神遺跡（B 地点）位置図	69
第 67 図	年の神遺跡（B 地点）トレーンチ配置図	69
第 68 図	年の神遺跡（B 地点）遺構配置図	70
第 69 図	年の神遺跡（B 地点）トレーンチ実測図 1	71
第 70 図	年の神遺跡（B 地点）トレーンチ実測図 2	72
第 71 図	年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 1 (S01)	73
第 72 図	年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 2 (S02,S03,S05,S06,S49,S70)	74
第 73 図	年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 3 (包含解)	75
第 74 図	年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 4 (包含解)	76
第 75 図	年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 5 (包含解)	77
第 76 図	年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 6 (包含解)	78
第 77 図	年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 7 (包含解)	79
第 78 図	今泉遺跡調査地位置図	82
第 79 図	今泉遺跡トレーンチ配置図	82
第 80 図	今泉遺跡トレーンチ土層柱状図	82
第 81 図	桜原遺跡調査地位置図	83
第 82 図	桜原遺跡トレーンチ配置図	83
第 83 図	桜原遺跡トレーンチ土層柱状図	83
第 84 図	池田遺跡群調査地位置図	84
第 85 図	池田遺跡群トレーンチ配置図	84
第 86 図	池田遺跡群トレーンチ土層柱状図	84
第 87 図	布毛遺跡調査地位置図	85
第 88 図	布毛遺跡トレーンチ配置図	85
第 89 図	布毛遺跡トレーンチ柱状図	85
第 90 図	六反田遺跡調査地位置図	86
第 91 図	六反田遺跡トレーンチ配置図	86
第 92 図	六反田遺跡トレーンチ土層柱状図	86
第 93 図	高瀬船着場跡平成 25 年度調査地位置図	87

第 94 図	高瀬船着場跡平成 25 年度調査地トレンチ配置図	87
第 95 図	高瀬船着場跡 1 ドレンチ実測図	88
第 96 図	備中原遺跡調査地位置図	89
第 97 図	備中原遺跡調査地位置図	89
第 98 図	尾崎遺跡調査地位置図	90
第 99 図	尾崎遺跡トレンチ配置図	90
第 100 図	尾崎遺跡トレンチ土層柱状図	90
第 101 図	内添遺跡調査地位置図	91
第 102 図	内添遺跡トレンチ配置図	91
第 103 図	内添遺跡トレンチ土層柱状図	91

写真目次

写真 1	トレンチ掘削状況	2
写真 2	確認調査状況	2
写真 3	発掘速報履歴状況	3
写真 4	築地跡調査立柱建物跡（柱復元状況）	3
写真 5	年の神遺跡（A 地点）調査状況	9
写真 6	年の神遺跡支石墓	10
写真 7	木船西遺跡 1 トレンチ調査状況	11
写真 8	大原遺跡調査状況	12
写真 9	築地跡調査（A 地点）調査前状況	13
写真 10	築地跡調査（A 地点）調査状況	16
写真 11	築地跡調査（B 地点）調査地	17
写真 12	築地跡調査（B 地点）調査状況	19
写真 13	築地跡調査 C 地点調査地（北から）	20
写真 14	築地跡調査（C 地点）調査状況	23
写真 15	吉丸前遺跡調査前状況	24
写真 16	吉丸前遺跡調査前状況	27
写真 17	亀甲遺跡 調査状況（南西から）	28
写真 18	亀甲遺跡 S01 出土遺物	38
写真 19	亀甲遺跡 調査状況	39
写真 20	亀甲遺跡の掘立柱建物跡	40
写真 21	春出遺跡調査前状況	41
写真 22	高瀬船着場跡（新渡頭の俵転がし）	42
写真 23	高瀬船着場跡（旧渡頭）土砂除去後	43
写真 24	高瀬船着場跡調査状況	44
写真 25	南出遺跡調査地	45
写真 26	大原遺跡調査前状況	46
写真 27	溝上の古墳群遠景	47
写真 28	宮の後古墳	48
写真 29	宮の後古墳調査状況	50
写真 30	赤堀古墳の現状	51
写真 31	赤堀古墳の箱式石棺	51
写真 32	前田古墳の舟形石棺から菊池川を望む	52
写真 33	前田古墳の舟形石棺	53
写真 34	真福寺東古墳	55
写真 35	阿勞陀塚古墳現況	56

写真 36	高岡古墳現況	57
写真 37	糠峯古墳現況	58
写真 38	高圓いっちょう 烟古墳現況	58
写真 39	高圓いっちょう 烟古墳現況	58
写真 40	保多地古墳群	61
写真 41	保多地窓跡群	62
写真 42	塚原古墳（1）	63
写真 43	塚原古墳（2）	64
写真 44	伊倉宮の後遺跡調査状況	67
写真 45	年の神遺跡調査地遠景	69
写真 46	年の神遺跡 B 地点	80
写真 47	年の神遺跡 B 地点	81
写真 48	今泉遺跡調査地遠景（東から）	82
写真 49	桜原遺跡調査地遠景	83
写真 50	池田遺跡群調査状況	84
写真 51	布毛遺跡調査状況	85
写真 52	六反田遺跡調査地	86
写真 53	高瀬船着場跡調査地遠景	87
写真 54	備中原遺跡調査状況	89
写真 55	尾崎遺跡調査地遠景	90
写真 56	内添遺跡調査状況	91

表目次

第 1 表	届出・通知・調査件数の推移	3
第 2 表	平成 24・25 年度試掘確認調査一覧	6
第 3 表	平成 24・25 年度出土遺物観察表（土器類）	92
第 4 表	平成 24・25 年度出土遺物観察表 (石器類、金属器類)	95

I 調査の概要

整理作業員 坂崎郷子、藤井めい子

1 調査の体制

調査及び報告書の作成は、下記の体制により実施している。職員の所属等は、当時のものである。

平成 24 年度

調査主体 玉名市教育委員会
 調査責任 教育長 森 義臣
 調査総括 教育次長 西田美徳
 文化課長 小山正義
 庶務担当 文化財係長 植原孝信
 主事 西田言道
 調査担当 技術主任 末永 崇
 技術主任 蟹父雅史
 発掘作業員 岩井 由、塚本廣二、松村利男

平成 25 年度

調査主体 玉名市教育委員会
 調査責任 教育長 森 義臣
 調査総括 教育次長 西田美徳
 文化課長 小山正義
 庶務担当 文化財係長兼課長補佐 境 順一
 主任 伊藤登志也
 調査担当 参事 田中康雄
 技術主任 末永 崇
 技術主任 蟹父雅史
 発掘作業員 岩井 由、塚本廣二、松村利男

平成 28 年度（報告書作成）

調査主体 玉名市教育委員会
 調査責任 教育長 池田誠一
 調査総括 教育部長 伊子裕幸
 文化課長 竹田宏司
 庶務担当 文化財係長 田中康雄
 参事 西嵩涼子
 報告書担当 技術主任 蟹父雅史
 整理調査員 古閑敬士、大倉千寿、江見恵留

2 調査の方法

試掘確認調査については、重機掘削により幅 0.7 ~ 1 m 程度のトレンチを設定しており、おおむね重機で掘削し、包含層や、遺構の一部については人力掘削を行っている。対象面積に対する掘削面積等については特に基準を定めていないが、開発の内容、予想される遺跡の内容、地形等を勘案して適宜設定している。

実測図は、1/20 スケールを基本として、平面・断面図を作成している。トレンチの配置図等については、基本的に開発に伴う測量図及び字図等に記入する形をとっている。遺構配置図等が必要な場合には、平板及びトータルステーションを使用して、1/100 スケール等で作成している。

写真は、一眼レフデジタルカメラを用いており、重要な遺構などが確認された場合は 35mm モノクロ及びリバーサルフィルムによる撮影を行っている。

3 調査総括

玉名市では、平成 11 年度から、国・県の補助を受け、開発行為等に伴い各種調査を実施している。

平成 24 年度の届出件数等の統計は、文化財保護法第 93 条による届出 83 件、94 条による通知 9 件がなされ、うち確認調査 12 件、工事立会 11 件を実施した。

平成 25 年度は、第 93 条による届出 82 件、94 条による通知 19 件がなされ、うち確認調査 11 件を実施した。

工事立会については、大半が専用住宅の合併浄化槽設置等に伴う小規模なものであり、それらを除き、大規模なものを 3 件実施した。

第 1 表は、平成 20 年度から平成 25 年度までの届出及び通知と試掘・確認調査等件数の推移を表したグラフである。

届出等の件数は平成 23 年度にかけて減少傾向にあったが、平成 24 年度以降やや増加気味になっている。この時期は、国政の動向としても消費税率 8%

ヘアアップの兆しがあり、これに起因して市内において住宅工事等が増加したこととも考えられる。

内容に関しても規模の大小を問わず、調査件数の約7割が民間事業に起因するものであった。この2年分の調査成果を事業別、地域別等にまとめてみることとする。

公共事業としては、市道俗明玉名線建設工事に伴う調査が主で、2遺跡3地点において確認調査を行った。学校施設としては、玉南中学校、専修大学玉名高校内の2件、菊池川の河川護岸整備事業に伴う調査を「高瀬船着場跡」において2回実施した。

河川の洪水等で土砂が堆積していたが、トレンチ調査の結果、船着場の遺構として渡頭の護岸石組が検出された。

民間開発で大規模なものとしては大型店舗が1件、太陽光発電施設に伴うものが1件あった。また、福祉施設が近年増加傾向にあり、3件確認調査した結果、年の神遺跡においては、遺構等が確認され基礎掘削が深い部分については継続して調査を行った。

その結果、土坑など多数の遺構と共に、弥生時代中期の土器が多く出土したが、ほとんどは開田と呼ばれる、水田造成時において攪乱をうけた層に含まれるものであった。

亀甲遺跡は、店舗建設に伴い調査した結果、弥生時代中期から後期を中心とした集落遺跡と考えられ、敷地全体が大幅な攪乱を受けていたものの、住居跡が4基、掘立柱建物跡1棟などが確認された。

この掘立柱建物跡は、2間×3間の12本柱であり、倉庫的な建物と想定される。市内でこのような弥生時代の明確な掘立柱建物跡は初めて確認された。

築地館跡は、中世の居館跡と考えられているが、近年、宅地造成が進んでおり、今回3地点を調査した。弥生時代の住居跡と共に中世の掘立柱建物跡及び柵列が確認された。この建物跡は、2間×2間の9本柱で居館に伴う倉庫的建物と想定される。調査地は館跡の中でも中心部（主郭）と考えられており、今回、建物跡が初めて確認された。

市内の遺跡分布の中で不明確な部分、所在の再確

認が必要と考えられる遺跡・古墳等については数件の踏査を実施した。

その中で、新たに実測図を作成し、実測されているものについては、再トレースして、現状写真と合せて掲載している。また、過去の調査例がある場合は、併せて報告している。

今回は主に、月瀬地区にある古墳群の現状確認、山田地区の古墳・窯跡群の踏査を実施した。

いずれも所在は確認されたが、数年前の状況に比べ、石棺の崩壊が進んでいる古墳などが明らかになつた。いずれもあまり開発が行われない区域であるが、今後の保存についても検討が必要である。

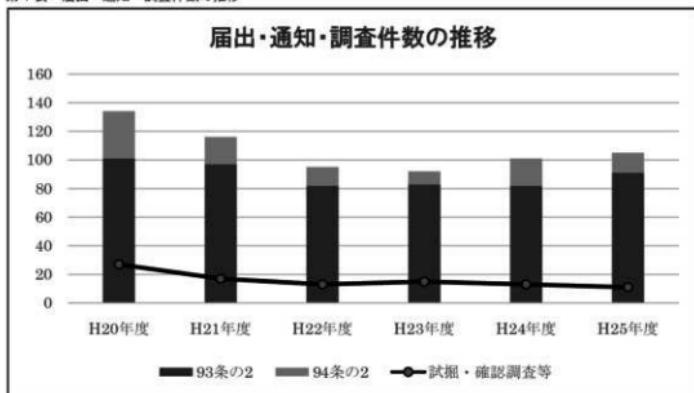


写真1 トレンチ掘削状況



写真2 確認調査状況

第1表 届出・通知・調査件数の推移



4 活用

玉名市では、開発行為に伴う試掘・確認調査等の結果を年度ごとに報告書として刊行しているが、その調査成果は市の博物館において展示公開を約2年に1回の割合で定期的に行っている。

平成24年度は企画展として「土の中からコンニチワ」と題した発掘速報展を開催した。主に平成21年度以降に行った確認調査等及び、塚原遺跡の発掘調査の成果を中心に、縄文時代から近世までの出土品約120点を展示了した。また、実際に土器に触れたり、貝製腕輪レプリカを装着する体験もできるようにした。市内における玉名の歴史を発掘調査

等の結果によって探ろうというもので、時代別や遺跡別に展示し、なるべくわかりやすい解説を心かけ、イラストや写真を多く使用したパネル等で説明している。

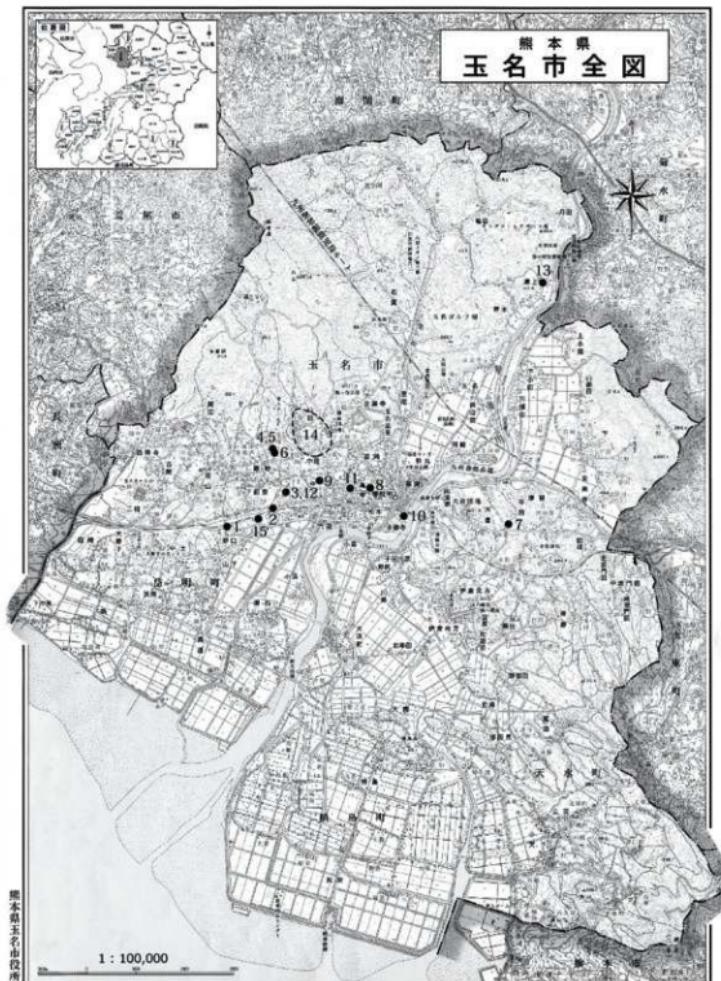
この展示期間の入館者は、約1500人であり、そのうち地元の小学校などの社会科見学が約500人あった。また、発掘調査時には、なるべく現地説明会を行うようにし、地元住民などの見学を受け入れたりしている。今回、築地館跡の調査で掘立柱建物跡が検出されたが、柱穴跡に柱の再現を試みた。短期間ではあったが、地元小学生等の見学があった。



写真3 発掘速報展展示状況

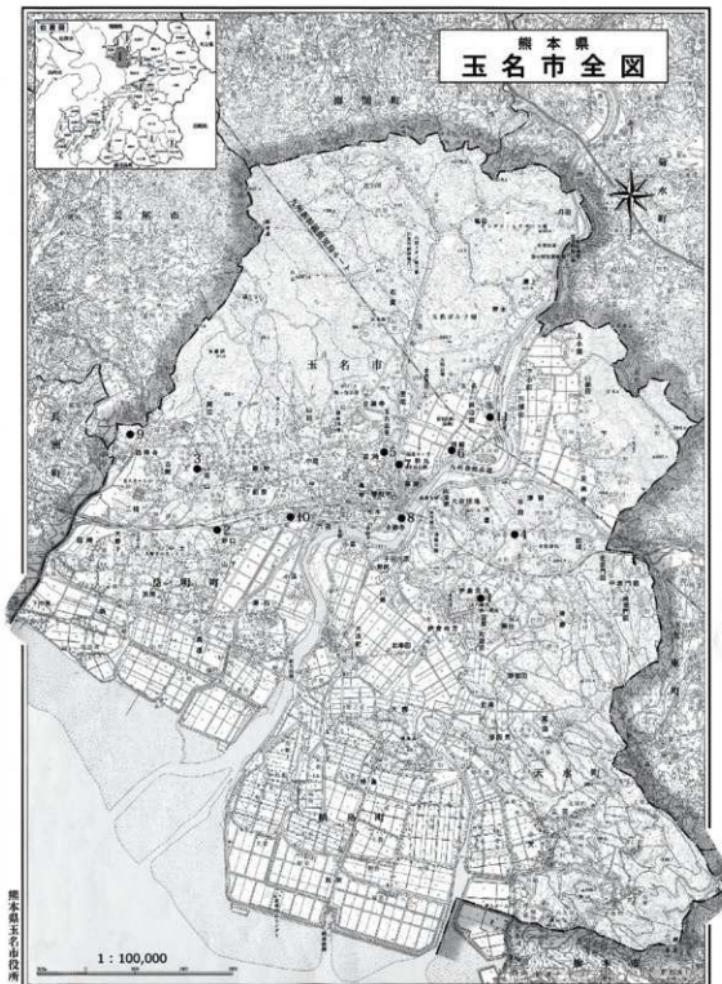


写真4 築地館跡掘立柱建物跡（柱復元状況）



- | | | |
|-------------------------|-------------|--------------------------|
| 1 年の神遺跡（A地点） | 5 築地館跡（B地点） | 11 南出遺跡 |
| 2 木船西遺跡 | 6 築地館跡（C地点） | 12 大原遺跡
(岱明玉名線予定地C地点) |
| （岱明玉名線予定地A地点） | 7 吉丸前遺跡 | 13 溝上地区の古墳群 |
| 3 大原遺跡
(岱明玉名線予定地B地点) | 8 亀甲遺跡群 | 14 山田地区の古墳・窯跡 |
| 4 築地館跡（A地点） | 9 春出遺跡 | 15 塚原古墳 |
| | 10 高瀬舶着場跡 | |

第1図 平成24年度調査地位置図



第2図 平成25年度調査地位置図

第2表 平成24・25年度試験認調査一覧

平成24年度		調査地		検出面積		種別		調査期間		担当者		結果	
No.	通路名	No.	調査地	面積	単位	確認	確認	日付	日付	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
1	1年の冲縄路(A 地点)	1	佐野町野口1丁目周辺2750.3番地	111m ²	m ²	確認済	確認済	平成24年5月24日	平成24年5月24日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
2	木内道路(佐野市玉名郷平野B地点)	2	佐野町野口1丁目周辺B地点	—	m ²	確認済	確認済	平成24年5月31日	平成24年5月31日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
3	大原道路(佐野市玉名郷平野B地点)	3	佐野町野口1丁目周辺B地点	—	m ²	確認済	確認済	平成24年5月31日	平成24年5月31日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
4	菟原道路(A 地点)	4	菟原町八反1798.3	542.17m ²	m ²	確認済	確認済	平成24年9月18日	—	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
5	菟原道路(B 地点)	5	菟原町八反1798.3	1011.93m ²	m ²	確認済	確認済	平成24年10月24日	—	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
6	菟原道路(C 地点)	6	菟原町八反2404.1 ~ 32405.2406番地	1,901.62m ²	m ²	確認済	確認済	平成24年11月12日	~ 11月15日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
7	古久前道路	7	寺谷古丸前1345番地	19,851.62m ²	m ²	確認済	確認済	平成24年12月3日	~ 平成25年1月29日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
8	中字道路	8	兔谷字前218番、長瀬134番	1,200.14m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年1月11日	—	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
9	春出道路	9	中字猪丸1468番地	約6000m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年3月4日	—	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
10	久保崎道路	10	本郷山地内	830.51m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年3月8日	—	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
11	南出道路	11	中180.1	—	m ²	確認済	確認済	—	—	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
12	岱門長名郷地(C 地点)	12	岱門町野口150番地先	—	m ²	確認済	確認済	平成25年3月12日	—	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
13	内原道路分析計測地(C 地区)	13	玉名町廣川字御加隈、田代、下前田	—	m ²	確認済	確認済	平成25年3月12日	~ 平成25年3月22日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
14	市内道路分析計測地(小田地区)	14	玉名市山田字高瀬、難波	—	m ²	確認済	確認済	平成25年3月12日	~ 平成25年3月22日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
15	市内道路分析計測地(佐野町地区)	15	玉名市佐野町野口	—	m ²	確認済	確認済	平成25年3月12日	~ 平成25年3月22日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会

平成25年度		調査地		検出面積		種別		調査期間		担当者		結果	
No.	伊食宮の鹿道跡	No.	伊食宮の鹿道跡	面積	単位	確認	確認	日付	日付	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
1	1年の冲縄路(A 地点)	1	佐野町野口1丁目254.3m ²	22,060m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年4月22日	~ 5月23日	監査官会	監査官会	監査官会	監査官会
2	2年の冲縄路(B 地点)	2	佐野町野口1丁目256m ²	1092.07m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年8月1日	~ 9月19日	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢
3	3年の冲縄路	3	佐野町野口1丁目609.61m ²	204m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年8月27日	—	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢
4	楢原道路	4	佐野町字中162.1	545.25m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年9月10日	~ 11月22日	田中謙	田中謙	田中謙	田中謙
5	池田山道路	5	佐野町字中584.1他5.3m ²	3,547.0m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年10月22日	~ 23日	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢
6	布毛道路(佐野市平野道跡A地点)	6	河崎1458.1	1,246.00m ²	m ²	確認済	確認済	平成25年11月26日	—	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢
7	7段式田道跡(佐野市平野道跡B地点)	7	谷崎82.1-1.32-1	2,494.36m ²	m ²	確認済	確認済	平成26年1月20日	—	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢
8	高輪町前道路(第2次測定)	8	水池寺地内	3,000m ²	m ²	確認済	確認済	平成26年1月21日	~ 3月20日	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢
9	9段式田道跡	9	佐野市西原寺字前田屋265.3 94.8m ²	28,292m ²	m ²	確認済	確認済	平成26年2月4日	~ 2月18日	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢
10	10段式田道跡	10	佐野町野口1031.1 9.17m ²	3,709.09m ²	m ²	確認済	確認済	平成26年2月12日	—	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢
11	11段式田道跡(佐野市平野道跡C地点)	11	玉名1042.1-1042.5	5,585m ²	m ²	確認済	確認済	平成26年2月20日	—	未水 沢	未水 沢	未水 沢	未水 沢

II 平成 24 年度の調査

1 年の神遺跡（A地点）

所在地： 俗明町野口字早馬 2757～2760-3 番地先

調査原因： 市道拡幅

対象面積： 111m²

調査期間： 平成 24 年 5 月 24 日

担当者： 蟹父雅史

調査地は、友田川左岸の低位段丘面に位置し、標高約 15 m の地点にあたる。

当遺跡は昭和 43 年、広域な開田造成中に弥生土器を中心に遺物が多く出土したことから、数か所で緊急な発掘調査が行われている。その際に、支石墓や甕棺墓が数基確認され、1 基の支石墓内甕棺からゴホウラ貝製の腕輪 7 点が出土している。その他、正確な出土地点は不明だが銅矛片も採集されている。平成 18 年度の調査区では、甕棺内から石劍の切先と考えられる破片が出土している。

この市道改良工事に関しては、平成 19 年度より買収が済んだ地点から確認調査を実施しており、全体的に開田造成時の攪拌を受けた層に遺物が含まれるため工事立会を行ってきているが、出土遺物の大半は甕棺と考えられる破片であった。このようなことから複数の甕棺墓群が広がっていたものと想定される。

調査では、2 筆の畑にそれぞれ 1 箇所ずつトレーニングを設定し、埋蔵文化財の確認を行った。現地表面から約 1.8 m 下まで掘削したが、いずれにおいても造成時の埋土、旧水田耕作土と考えられる層が確認でき、遺構・遺物は確認されなかった。

しかし、南側には市指定史跡である「支石墓」が存在し、遺物や石材等が混入する可能性も考えられるため掘削時には、工事立会を行うことになった。

<参考文献>

田添夏喜 1969 「年の神遺跡調査報告」俗明町教育委員会

田中康雄編 2008 「玉名市内遺跡調査報告書IV」玉名市文化財調査報告第 17 集 玉名市教育委員会



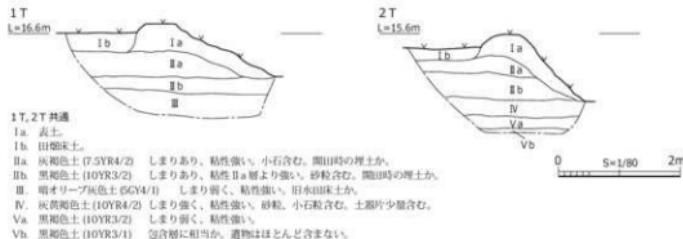
第 3 図 年の神遺跡（A 地点）調査地位置図 S=1/5,000



第 4 図 年の神遺跡（A 地点）トレーニング配置図 S=1/1,000



写真 5 年の神遺跡（A 地点）調査状況



第 5 図 年の神遺跡 (A 地点) トレンチ土層断面図

写真 6 年の神遺跡支石墓



年の神遺跡支石墓 (玉名市指定史跡 後方が調査地)



年の神遺跡支石墓 (上石)

2 木船西遺跡(岱明玉名線建設予定地A地点)

所在地：岱明町野口 499, 24-1

調査原因：市道建設

調査期間：平成 24 年 5 月 31 日

担当者：齋父雅史

調査地は、境川右岸の低丘陵上に位置する標高約 12 m の地点である。

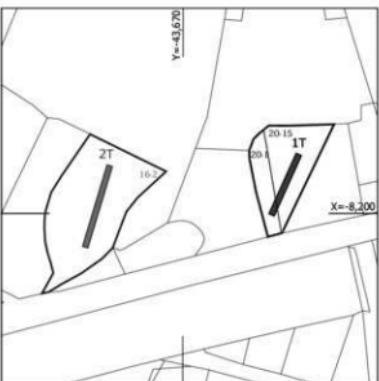
木船西遺跡の範囲に含まれており、遺跡範囲としては南端にある。JR 鹿児島本線の南側からは塚原遺跡にあるが、この一帯は、弥生時代中期から後期、古墳時代前期にかけての遺跡が集中している。

平成 24 年度に実施した岱明玉名線建設に伴う発掘調査では、木船西遺跡から住居跡約 60 基が切り合っている状況であり、破鏡(後漢鏡)が出土している。南側の塚原遺跡では、弥生時代中期の大型の円形竪穴建物、甕棺墓群、古墳時代の住居跡、石棺系室石を持つ古墳などが確認された。

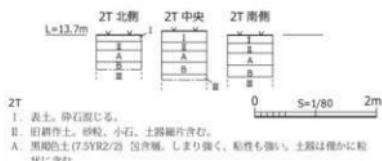
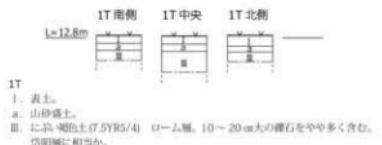
今回、両敷地に 2か所のトレンチを設定して確認調査を実施したが、共に埋蔵文化財は確認されなかった。東側の 1 トレンチは、浅い部分から 10~20cm 大の礫石を含む無遺物層(岱明層)が確認された。以前から削平を受けていたものとみられる。2 トレンチは、黒褐色土層が確認できたが、遺物は含まず遺構も検出されなかった。



第6図 木船西遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第7図 木船西遺跡トレンチ配置図 S=1/1,000



第8図 木船西遺跡トレンチ土層柱状図



写真7 木船西遺跡 1トレンチ調査状況

3 大原遺跡（岱明玉名線建設予定地B地点）

所在地：岱明町野口 499

調査原因：市道建設

調査期間：平成 24 年 5 月 31 日

担当者：齋父雅史

調査地は、境川右岸の低丘陵上に位置する標高約 10 m の地点である。

大原遺跡の範囲に含まれており、遺跡の北東側にあたる。一帯は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての遺跡が集中している。北西側の平成元年における調査区では、大型木棺墓や箱式石棺墓群が確認されている。

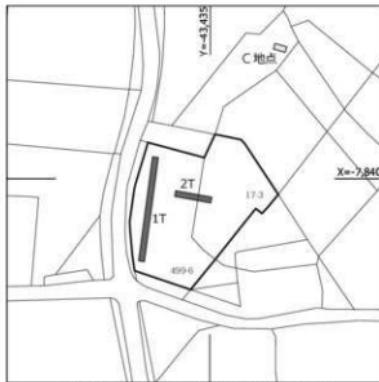
平成 25 年度に実施した岱明玉名線建設に伴う大原遺跡の発掘調査では、住居跡約 120 基が切り合っている状況であり、破鏡などが出土している。

今回、両敷地に 2か所のトレンチを設定して確認調査を実施したが、共に埋蔵文化財は確認されなかった。東側の 1 トレンチは、浅い部分から無遺物層が確認され、以前から削平を受けていたものとみられる。2 トレンチも客土層のみで盛土造成されている状況であった。

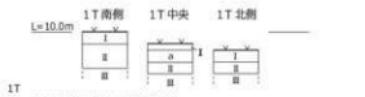
旧地形は、北東側にかけて浅い谷となっていくため、土地利用の過程で傾斜地が宅地として造成されていったものと考えられる。



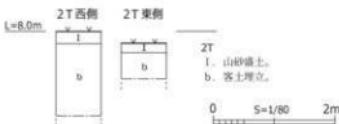
第 9 図 大原遺跡調査位置図 S=1/5,000



第 10 図 大原遺跡トレンチ配置図 S=1/1,000



1. 表土（以前の住宅の解体跡地）。
- a. 灰褐色土（7SYR4/2）旧耕作土。しまり強く、僅かに粘性有り。
小礫石を少額含む。土壌細粒、土源粉を少額含む。
- III. 明治台土（7SYR8/8）ローム層。しまり非常に強く、粘性強い。
小礫石をやや多く含む。岱明前に近いか。
- ※下位まで削平を受けていたため、遺構等なし。



第 11 図 大原遺跡トレンチ土層柱状図



写真 8 大原遺跡調査状況

4 築地館跡（A地点）

所在地：築地字八反 1799-1

調査原因：宅地造成

対象面積：650m²

調査期間：平成 24 年 9 月 18 日～10 月 12 日

担当者：齋父雅史

調査地は、小岱山から南に広がる丘陵上に位置し、標高約 20 m の地点である。一帯は、大野氏に関連した中世館跡と推定されており、土塁や堀跡が現状でも確認される。

西側に位置する玉名バイパス建設工事に伴い県文化課によって発掘調査が行われ、弥生時代の集落跡や中世の遺構等が確認されている。

当地は、専用住宅の駐車場部分が切土される予定であったため、確認調査を実施した。結果、埋蔵文化財が確認されたため、緊急的に調査を継続した。

検出した遺構は、住居跡 1 基とピット数基である。住居跡は南西側コーナーの一部を検出したため、方形プランと考えられるが全体の規模は不明である。柱穴の配置から 4 本柱であった可能性がある。北側に焼土の集中部があり、壺・甕などが出土している。

中央部には炭化物の集中がみられたが、炉跡は検出できなかった。ほか鉄器が 2 点出土している。鉄鏃及び鎌状を呈しているが明確ではない。その他ミニチュア土器も 1 点出土した。

床面近くから出土した遺物から、時期は弥生時代後期後半～古墳時代初頭と考えられ、県文化課の調査区における集落の時期とも重なることから、当地付近まで集落が広がっていたものと考えられる。

駐車場部分は切土が行われるため事前に調査を行い、確認された遺構はすべて完掘して調査は完了したため慎重工事となった。

<参考文献>

宮崎敬士 2013 『築地館跡』 熊本県文化財調査報告第 283 集 熊本県教育委員会



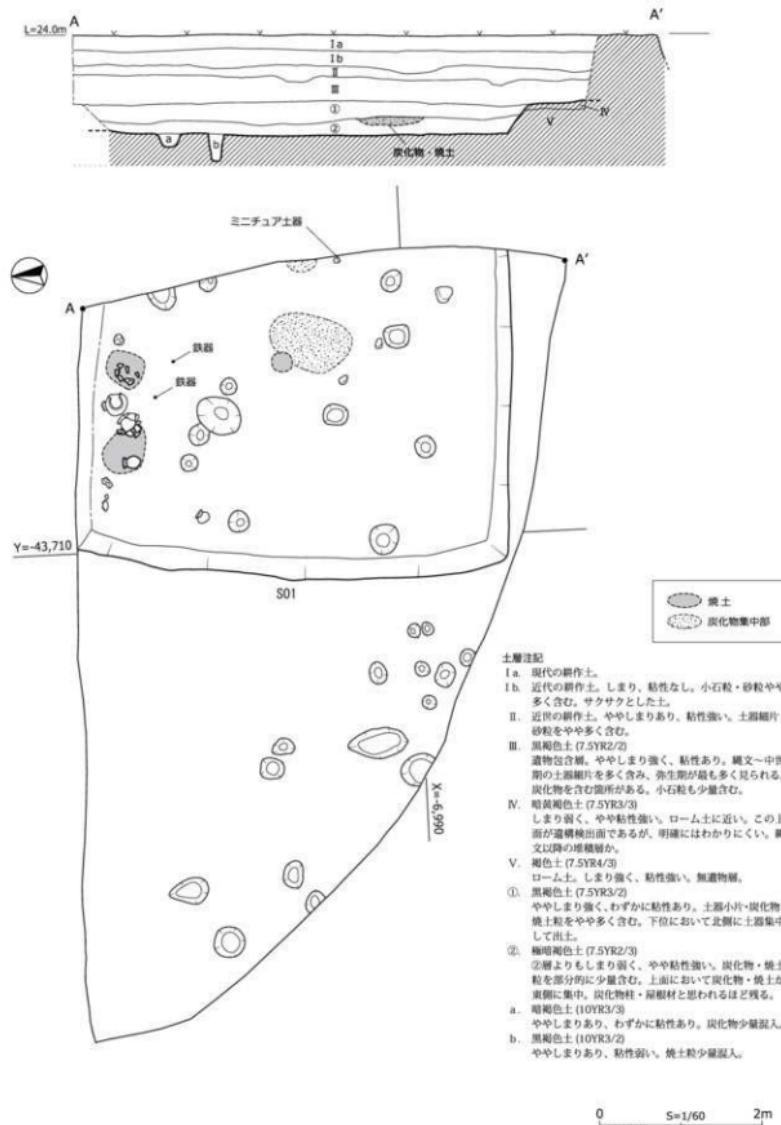
第 12 図 築地館跡（A 地点）調査地位置図 S=1/5,000



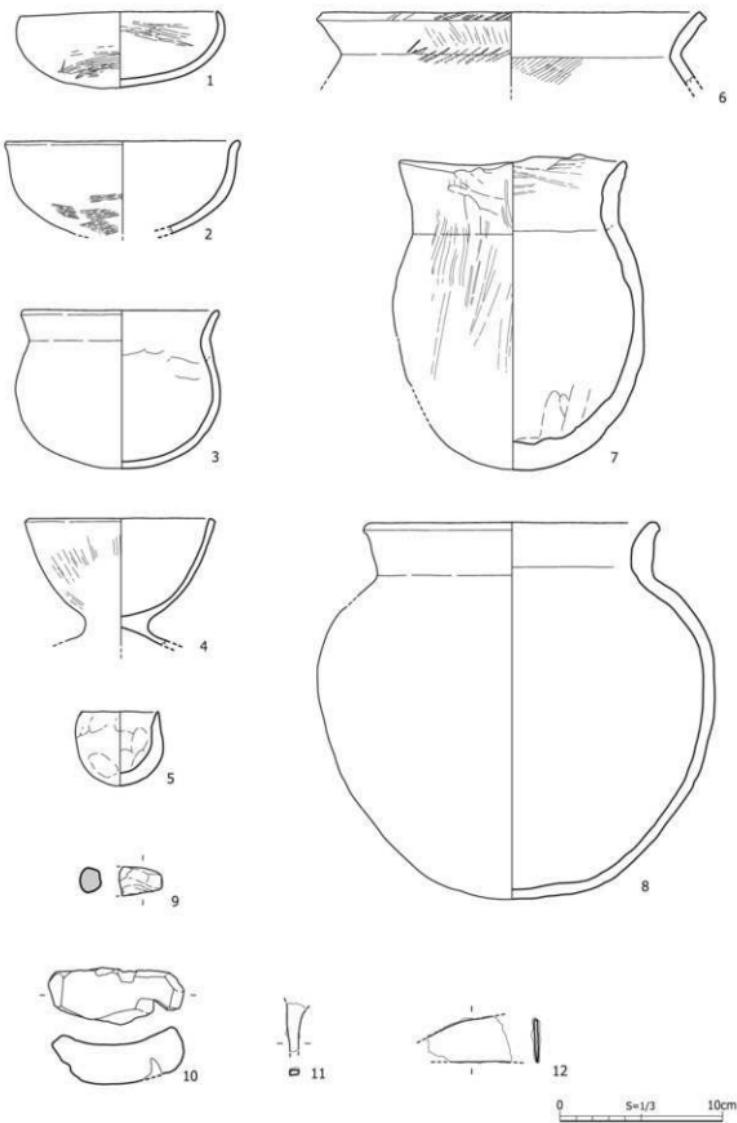
第 13 図 築地館跡（A 地点）トレンチ配置図 S=1/1,000



写真 9 築地館跡（A 地点）調査前状況



第 14 図 荘地跡 (A 地点) 造構実測図

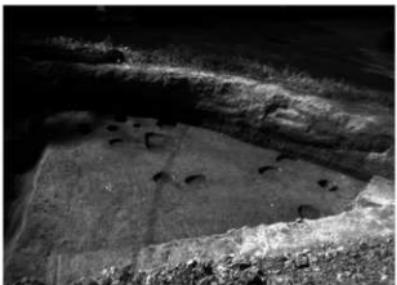


第15図 築地館跡 (A地点)S01 出土遺物実測図

写真 10 梯地鉢跡 (A 地点) 調査状況



調査区東側 S01 完堀状況（北から）



調査区西側ピット群完堀状況（北から）



S01 北側遺物出土状況（南から）



S01 遺物出土状況（西から）



S01 遺物出土状況（南から）



S01 出土遺物

5 築地館跡（B地点）

所在地：築地字八反 1799-3

調査原因：宅地造成

対象面積：625.26m²

調査期間：平成24年9月18日～10月12日

担当者：蟹父雅史

調査地は、小岱山から南に広がる丘陵上に位置し、標高約20mの地点である。

A地点の北側隣接地であり、同様に駐車場部分が切土されるため、その範囲を対象に調査を実施した。

遺構は、北側のトレンチ壁際に沿って、溝状の遺構が検出された。全体の形状は不明であるが、東西方向に延びる溝であり、東側になるほど浅くなる。

時期は遺物の破片が少量出土したのみで断定できないが、弥生時代か中世の溝と考えられる。

北側にトレンチを約5m延長して溝の幅を確認したが、溝の立ち上がりは検出できなかった。

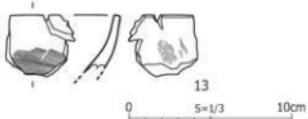
溝は西側になるほど深くなる傾向があり、底部は浅い段ではあるがやや階段状になる。全体の形状は不明で、道路状遺構の可能性もあるが硬化面までは確認できなかった。今後の調査で検証が必要である。

その他、ピットが数基検出され、溝状遺構の南側で焼土集中部が認められた。

進入路部分は切土が行われるため事前に調査を行い、確認された遺構はすべて完掘して調査は完了しているため慎重工事となった。

<参考文献>

宮崎敬士 2013 『築地館跡』熊本県文化財調査報告第283集 熊本県教育委員会



第18図 築地館跡（B地点）出土遺物実測図



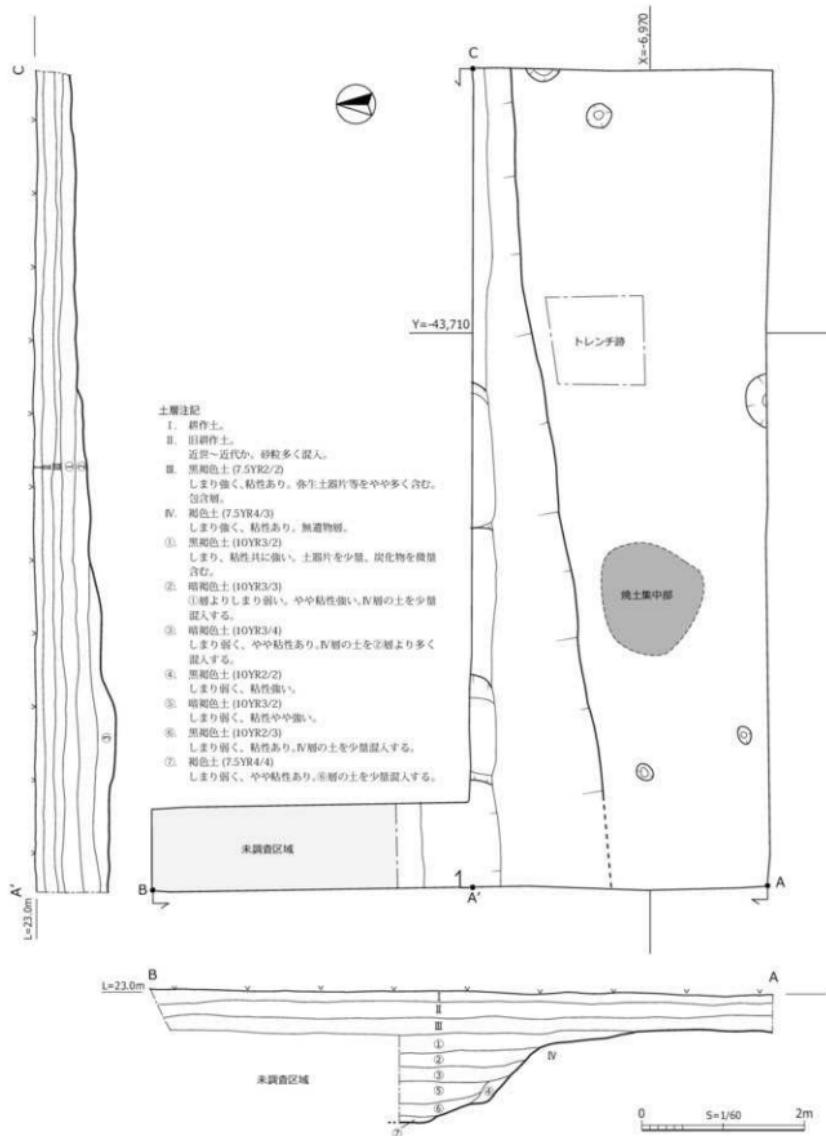
第16図 築地館跡（B地点）調査地位置図 S=1/5,000



第17図 築地館跡（B地点）トレンチ位置図 S=1/1,000



写真11 築地館跡（B地点）調査地



第 19 図 築地館跡 (B 地点) 造構実測図

写真12 荘地館跡（B地点）調査状況



溝状遺構（西側から）



溝状遺構（南東から）



溝状遺構（東から）

6 築地館跡（C 地点）

所在地：築地字陣内 2404-1～3、2405 外 7 筆

調査原因：宅地造成

対象面積：10113.9m²

調査期間：平成 24 年 10 月 24 日～11 月 7 日

担当者：蟹父雅史

調査地は、小岱山から南に広がる丘陵上に位置する、標高 20 m ほどの地点である。

A・B 地点を調査中に造成されていたため、緊急的に調査を実施した。西側の 3 区画分の駐車場予定地を中心に確認調査を行ったところ、表土直下から無遺物層が確認されたため、削平を受けているものと判断された。しかし、一部において柱穴が数基検出された。これらは、削平を受けながらも、わずかに底部が残存していたもので、中世の居館に伴うものと考えられる。

また、調査地の北西側（C-1 区）において弥生時代と考えられる住居跡 1 基を確認したが、これもほとんど削平を受けており、硬化した床面と南側壁の一部と柱穴を検出したのみである。全体の形状は不明であるが、前頁の A 地点における調査区の住居跡と同時期の集落内であった可能性が高い。

掘立柱建物跡は、2 間 × 2 間の 9 本柱で正方形を呈する倉庫的な建物であったと考えられる。また、この西側には 3 本の柱穴が等間隔で検出されたが、これに対応するピットがないため柵列の可能性がある。

当敷地の西側は、館跡の主郭と推定されている区画があり、ほぼ中心部から建物跡が検出されたことになる。なお、南東側には五輪塔群がある。南端には地権者から防空壕があったとの情報を得た。付近から硬化した落ち込みがみられ、近代以降の遺物が検出されたため、その痕跡の可能性がある。

今回の調査において、確認された遺構はすべて完掘し、調査が終了しているため慎重工事となった。



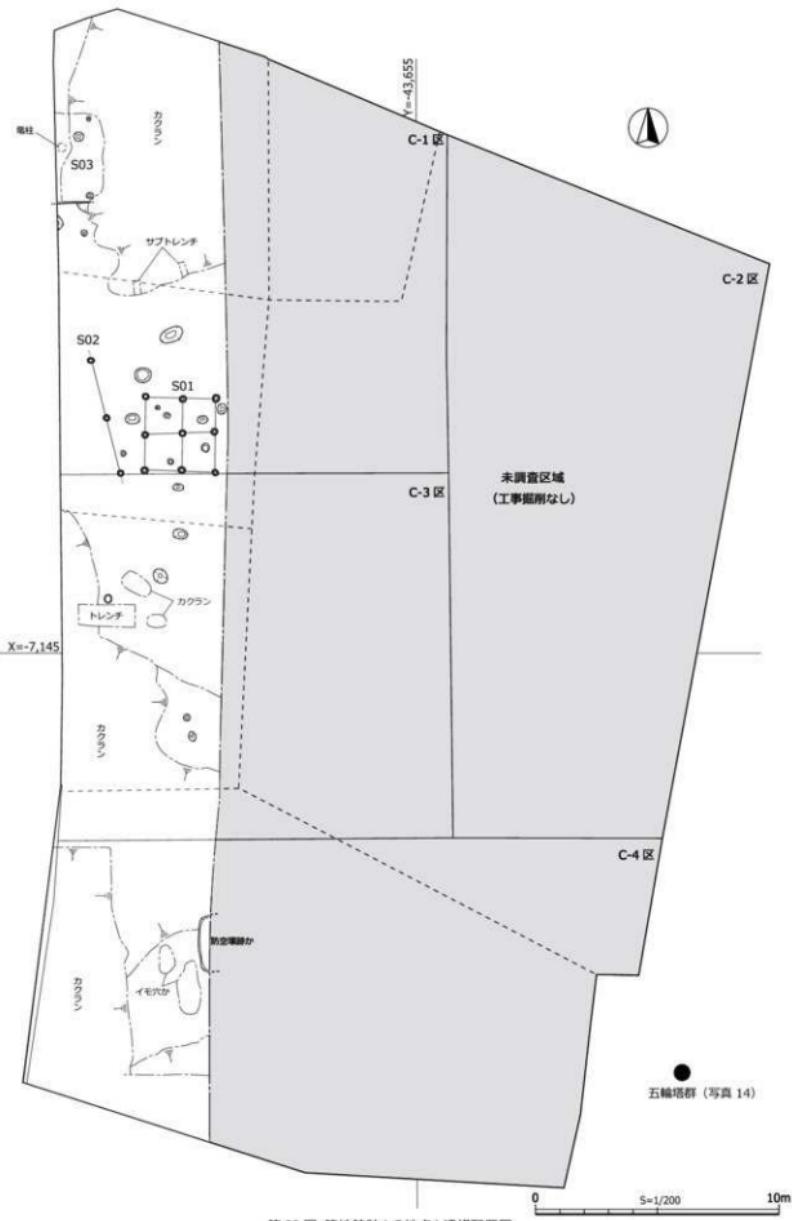
第 20 図 築地館跡（C 地点）調査位置図 S=1/5,000



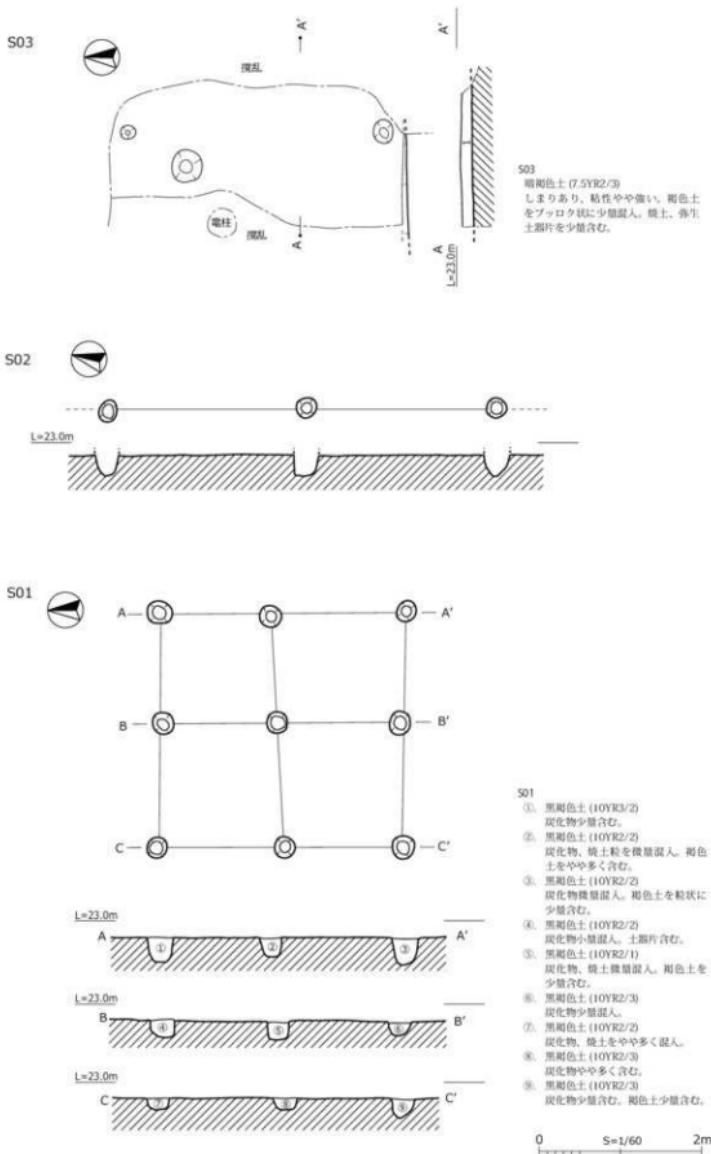
第 21 図 築地館跡（C 地点）調査区区割図 S=1/1,000



写真 13 築地館跡 C 地点調査地（北から）



第 22 図 築地館跡 (C 地点) 造構配置図



第 23 図 染地跡路 (C 地点) 透構実測図

写真14 築地館跡 (C 地点) 調査状況



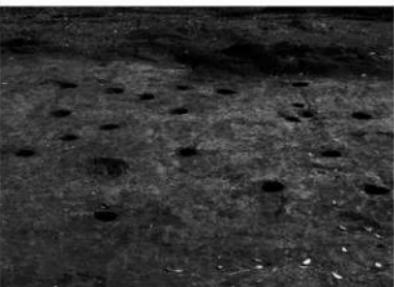
C-1 区 S03 調査状況 (南東から)



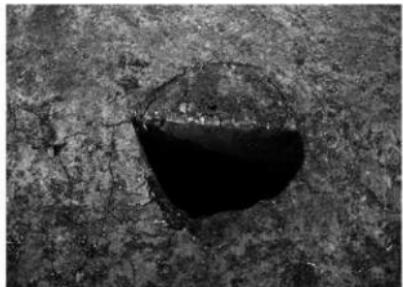
C-1 区 S03 完堀状況 (北から)



C-1 区 柱穴群検出状況 (北から)



C-1 区 掘立柱建物跡完堀状況 (西から)



C-1 区 掘立柱建物跡柱穴土層堆積状況 (西から)



調査区南東側に残存する五輪塔群

7 吉丸前遺跡

所在地：寺田 669-1

調査原因：宅地造成

対象面積：620.31m²

調査期間：平成 24 年 9 月 14 日

担当者：齋父雅史

調査地は、菊池川左岸の台地上に位置し、標高約 40m の地点である。平成 13 ~ 15 年度に敷地東側の玉名バイパス建設に伴い、発掘調査を実施しており、中世の空堀状遺構などが確認されている。

当該地では、調査依頼に基づいて、確認調査を実施し計 9 本のトレンチを設定した。基本土層は、I・II 層が耕作土、III 層が黒褐色粘性土、IV 層が暗黄褐色粘性土、V 層が無遺物層である。

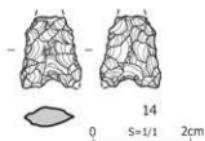
確認した主な遺構は、溝状遺構、土坑、ピットである。溝は幅約 4 m、深さ約 70cm、東西方向へ延び、東側にかけてやや広がる傾向がある。この溝は、位置や方向などからも西側に隣接する県調査区で検出されていた溝状遺構の続きである可能性がある。

今回の工事は、4 区画分の宅地造成である。主な掘削は、北西側に計画されている進入路部分であるが、この部分で検出された遺構は、ピット数基であり完掘している。なお、平成 27 年度になって進入路の計画が変更されたため、再度調査を実施しているが、別途報告を予定している。

その他、ピットが数基検出されたが、造成にあたっては工事立会となった。

<参考文献>

亀田 學 2012 『吉丸前遺跡』熊本県文化財調査報告第 272 集 熊本県教育委員会



第 26 図 吉丸前遺跡出土遺物実測図



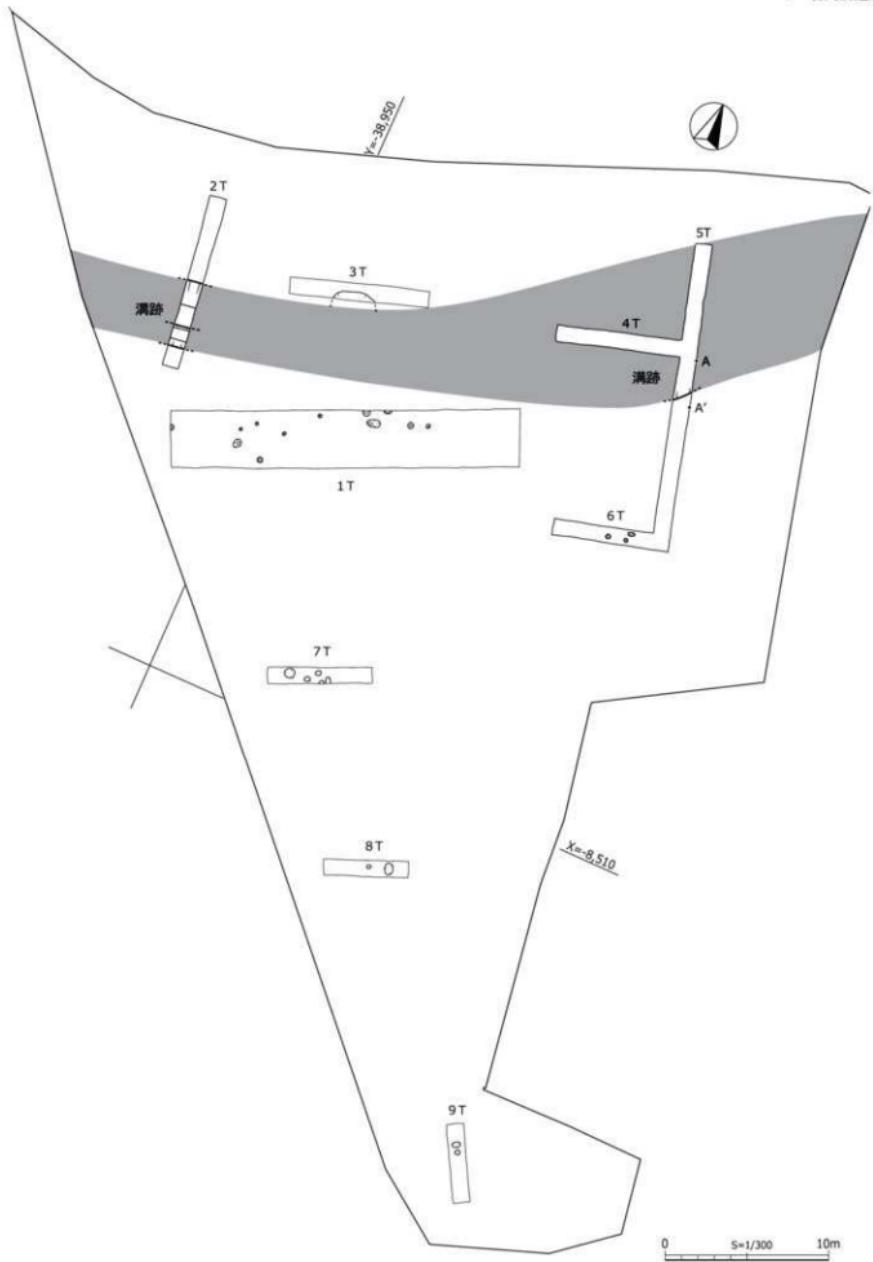
第 24 図 吉丸前遺跡調査位置図 S=1/5,000



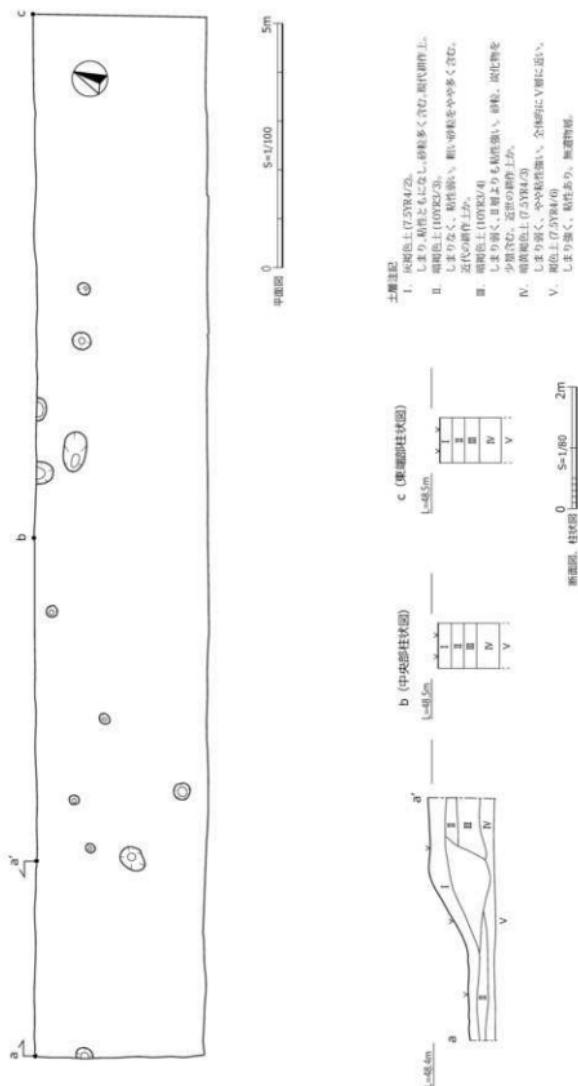
第 25 図 吉丸前遺跡トレンチ配置図 S=1/1,000



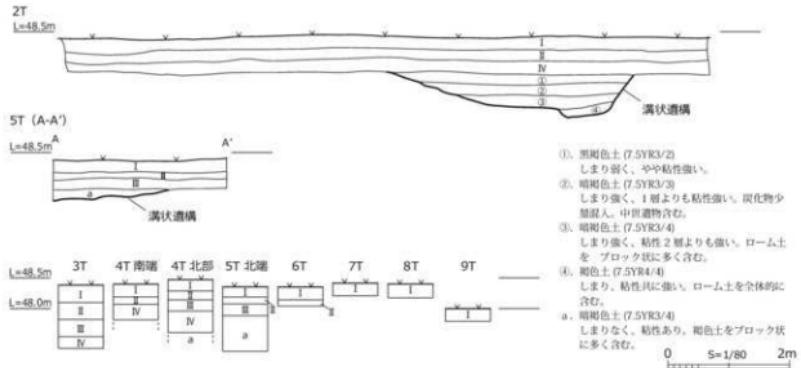
写真 15 吉丸前遺跡調査前状況



第27図 吉丸前遺跡遺構配置図



第 28 図 吉九前遺跡遺構実測図



第29図 吉丸前遺跡トレチ土層断面図および柱状図

写真16 吉丸前遺跡調査前状況



1 トレチ全景（西から）



2 トレチ検出の溝状遺構（西から）



5 トレチ検出の溝状遺構（南から）



9 トレチ調査状況（南から）

8 龜甲遺跡

所在地：亀甲字北園 218.223, 長畠 134

調査原因：店舗建設

対象面積：22,060.00m²

調査期間：平成 24 年 11 月 15 日～16 日

担当者：齋父雅史

調査地は、繁根木川右岸の台地上に位置し、標高は約 12 m の地点である。周辺に比べて最も高い場所であり、西側を除いて一帯は急に傾斜していく。

当地は、近代になって地形が造成され、紡績工場が建てられて、その後、凸版印刷工場へと変わった経緯がある。

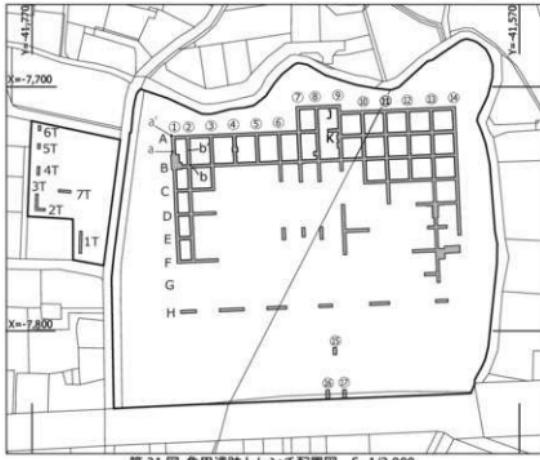
今回、調査依頼に基づき確認調査を行った。調査は、工場があった敷地全体に、大型店舗の基礎が入る位置に 42 ケ所のトレンチを設定した。また、以前は寮などが建っていた西側の駐車場予定地にも計 8 ケ所のトレンチを設定して埋蔵文化財の有無の確認を行った。その結果、弥生時代の住居跡が 4 基（うち駐車場で 1 基）、土坑が 6 基、掘立柱建物跡が 1 棟、その他ピット（中世含む）が数基確認された。これらの遺構は、主に北東側に集中し、他の範囲は、以



第 30 図 亀甲遺跡調査位置図 S=1/5,000



写真 17 亀甲遺跡 調査状況（南西から）

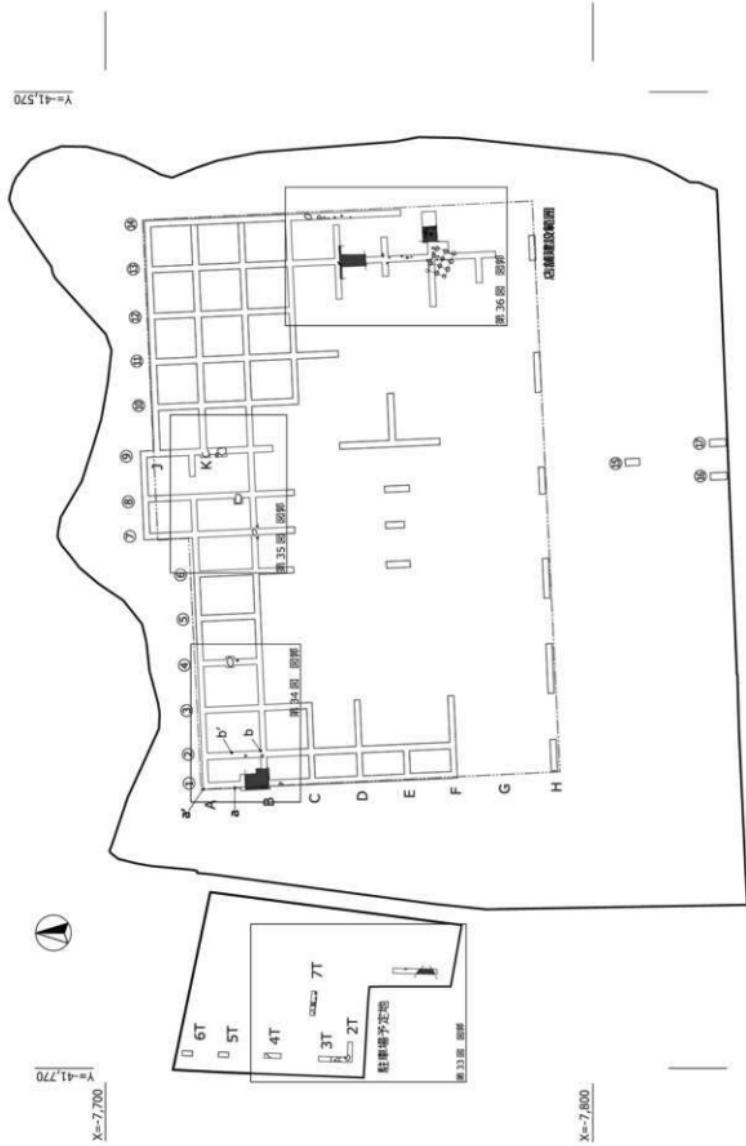


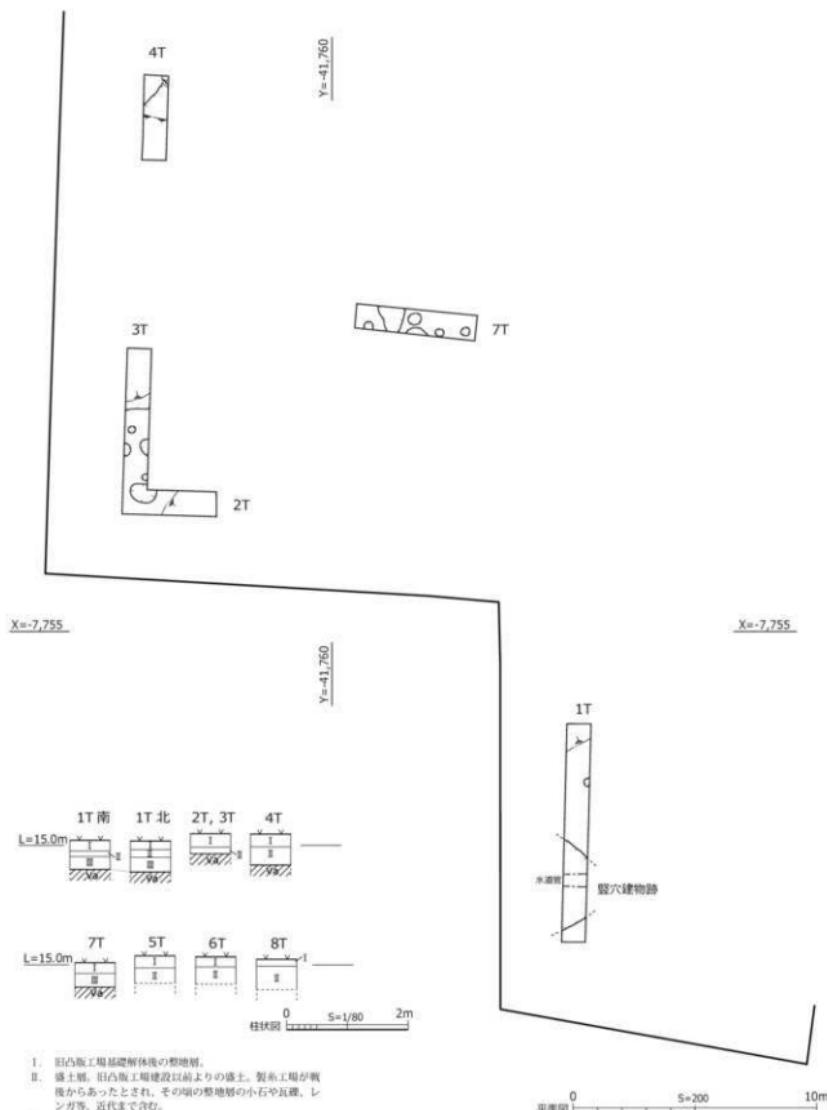
第 31 図 亀甲遺跡トレンチ配置図 S=1/2,000

前の工場等の基礎により搅乱を受けたり、建設前の造成により傾斜地を埋め立てられたりしており、遺構は残存していないかった。本来は、弥生時代中～後期にかけての集落が広がっていたものと想定される。今回、基礎が入る場所を中心に調査を行い、確認された遺構については、そのまま調査を継続して完掘している。今後の処置について、工事立会となった。

各遺構の詳細については、後半で述べることとする。

第32図 亜甲遺跡主要遺構配置図 S=1/1,000

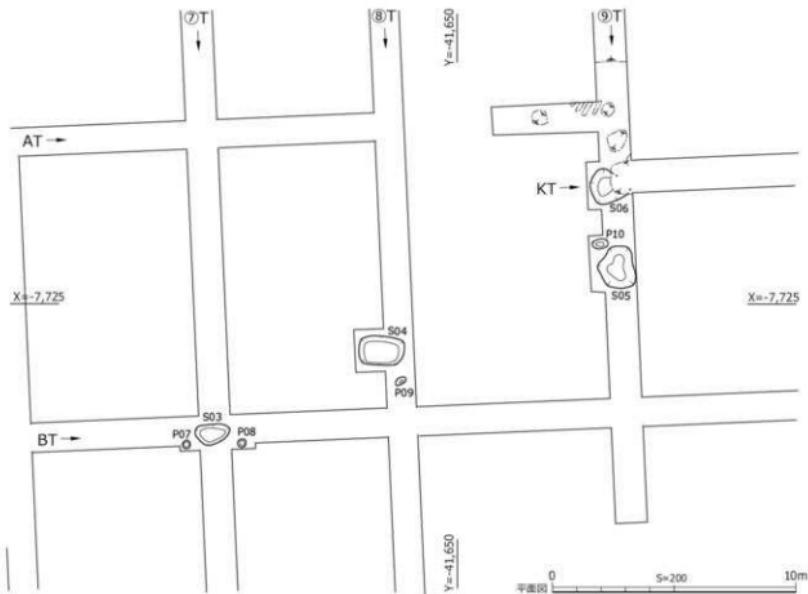




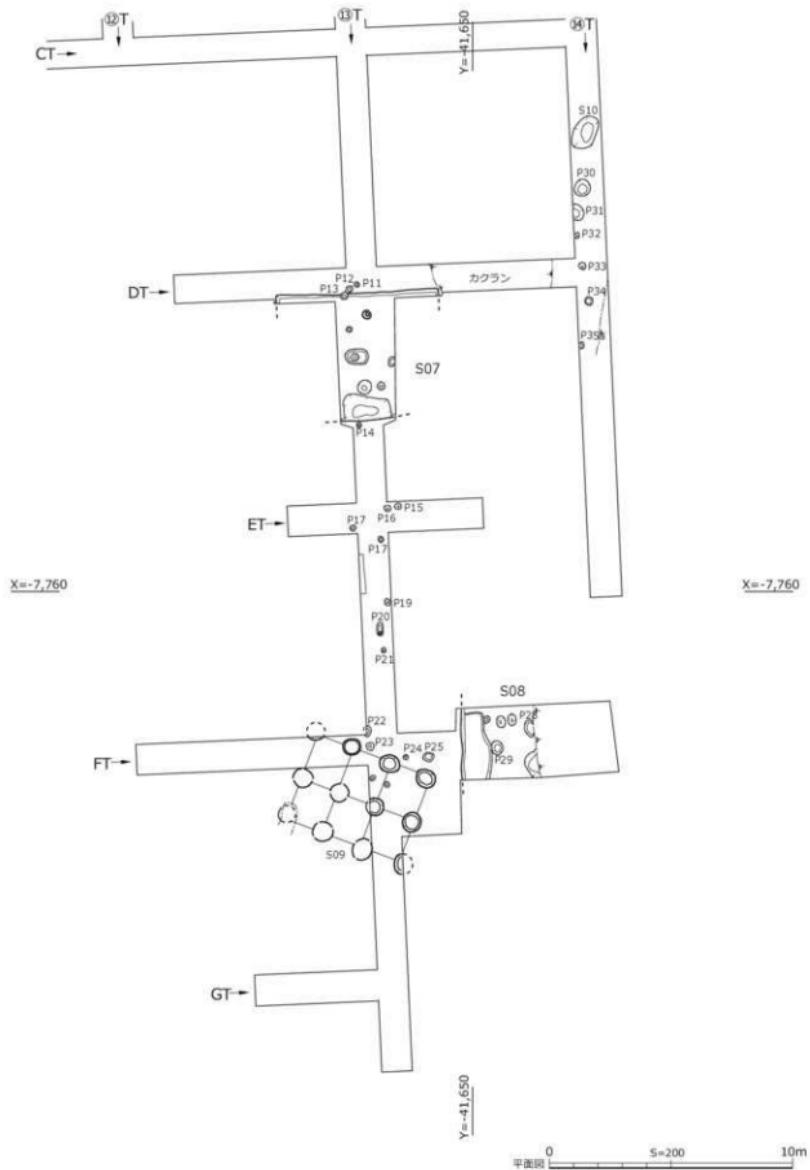
第33図 龜甲道路造構平面図1およびトレンチ土層柱状図



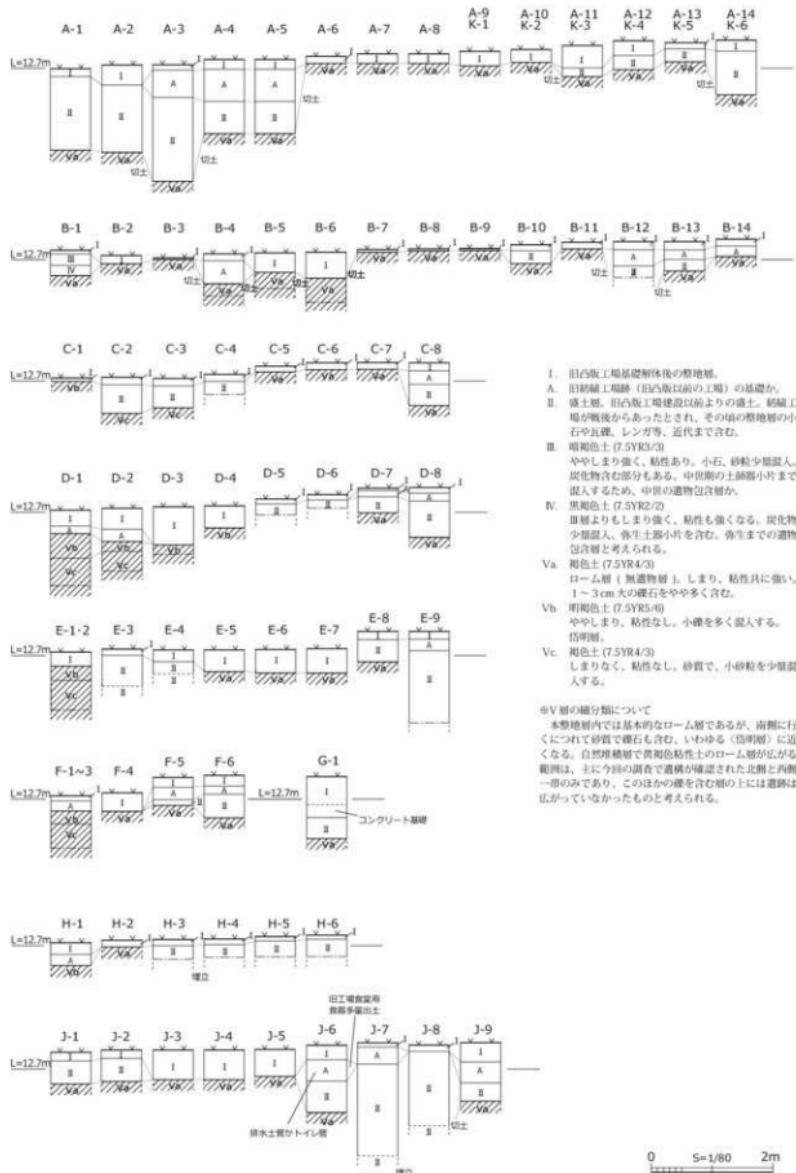
第34図 亀甲遺跡構造平面図2



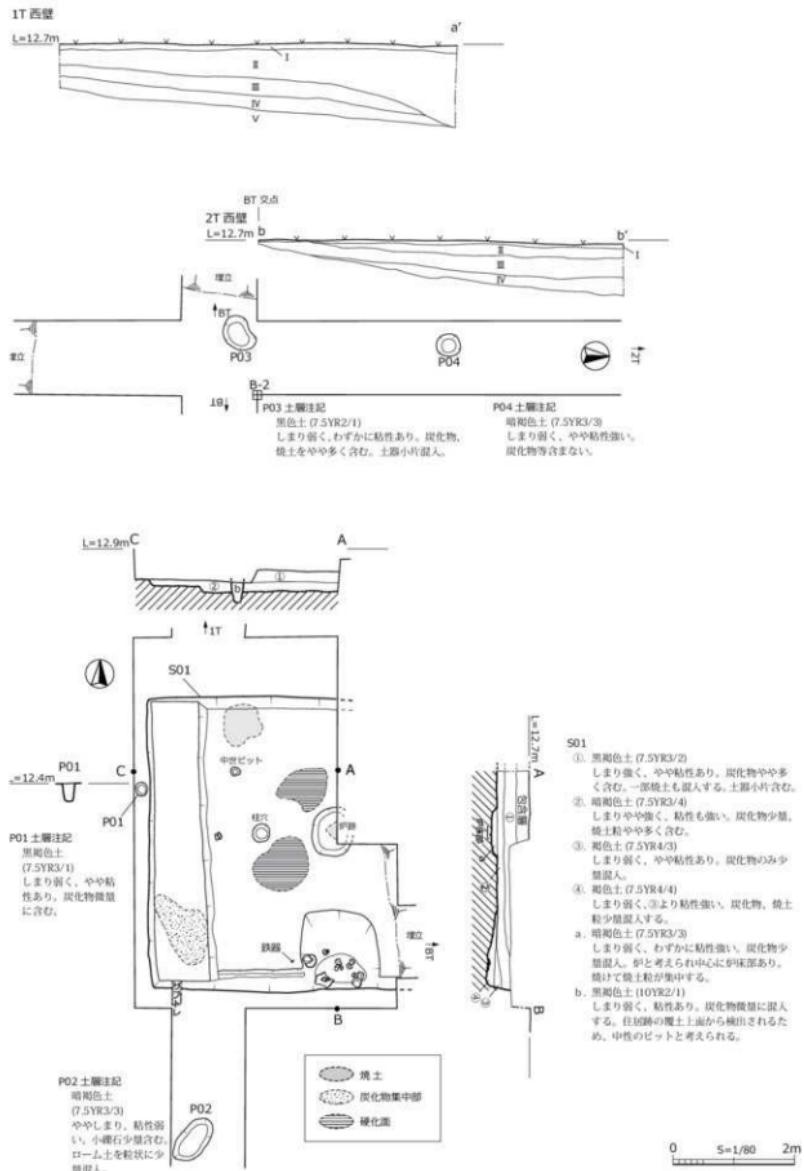
第35図 亀甲遺跡構造平面図3



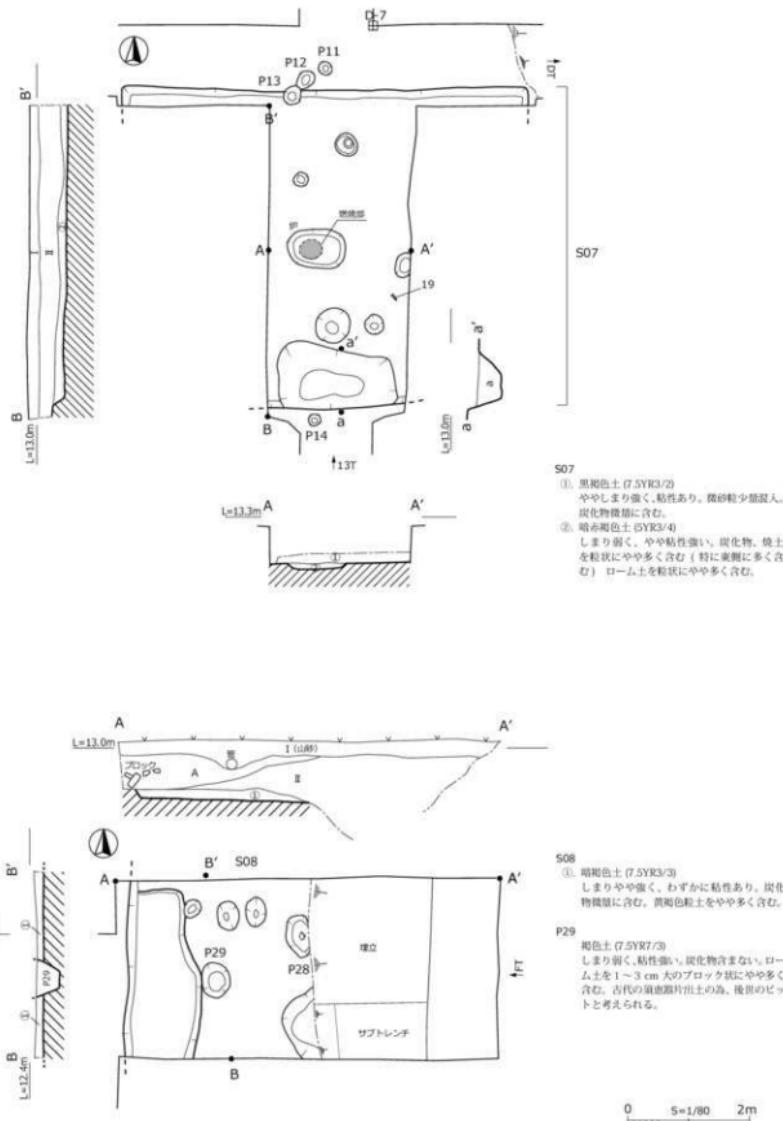
第 36 図 龜甲遺跡遺構平面図



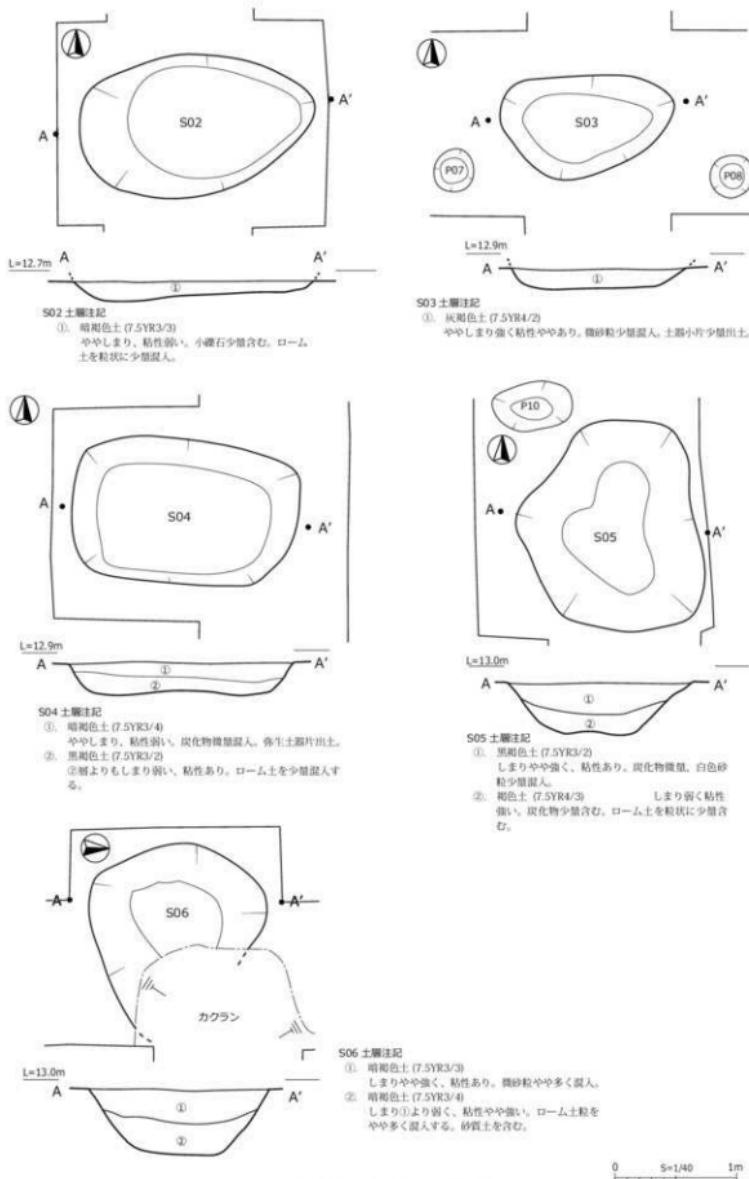
第37図 龜甲遺跡トレンチ土層柱状図（各トレンチ交差地点）



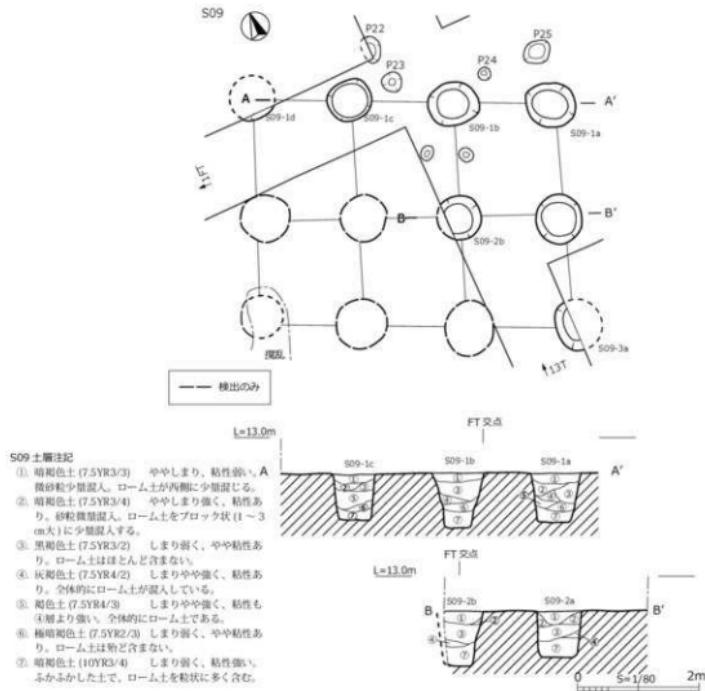
第38図 龜甲遺跡トレーニング実測図1



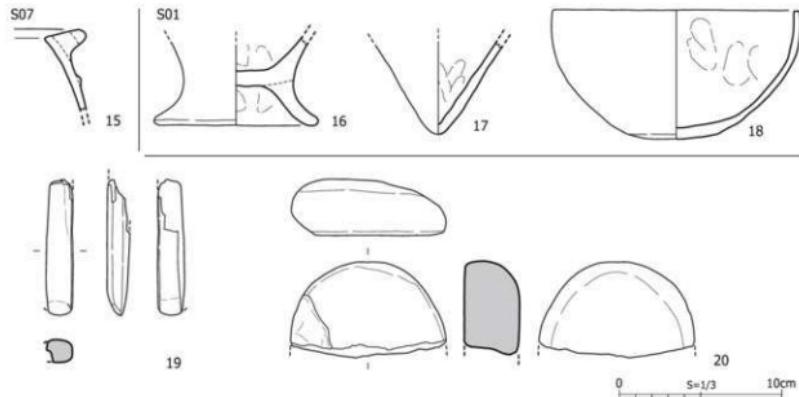
第39図 亀甲遺跡トレチ実測図2



第 40 図 龜甲遺跡トレンチ実測図 3



第41図 亀甲遺跡トレンチ実測図4



第42図 亀甲遺跡出土遺物実測図

今回、検出した遺構は主に弥生時代中期から後期と考えられる。基礎掘削範囲内で検出し、完堀した遺構の概要を述べることとする。

<住居跡>

敷地は工場建設に伴い全体的に搅乱を受け、削平されていたが、わずかに遺構が残存していた。住居跡が計 4 基あり、うち店舗部分の 3 基を完堀した。北西側の S01 は、南北 4.8 m、東西 4m 以上を測る方形プランの住居跡である（第 38 図）。深さは約 40cm 残存していた。西側にベッド状遺構を配し、中央部に炉跡があり、それを挟むような 2 本柱だったと想定される。南側が出入り口と考えられ、貯蔵穴があるプランは、玉名地域を代表する弥生時代後期の特徴を備えている。また、炉の周囲には硬化面が確認できた。

この住居は炉以外の場所から、炭化物や焼土の集中部がみられたことから、火災を受けている可能性もある。貯蔵穴内部から、弥生時代後期と考えられる鉢形土器、甕の脚台部、底部が尖った特殊な土器などが出土した（第 42 図）。なお、図化していなが鉄器も 1 点出土している。

調査区東側で検出した S07 は、南北 5.2 m、東西 6.6 m を測る長方形プランと考えられる住居跡である（第 39 図）。S01 と同様に中央部に炉があり、これを挟むような 2 本柱と想定される。また、南側が出入り口と考えられ、下に貯蔵穴がある。全体の形状は不明であり、ベッド状遺構は確認できなかつたが、検出していない東西の南側に付く可能性もある。

出土遺物の中には、弥生時代中期の甕口縁部と、磨石などがあり、本来の住居跡の時期とはやや異なるため、埋まる過程での流れ込みの可能性がある。なお、柱状片刃石斧が 1 点出土している（第 42 図）。S07 の南側で検出した S08 は、長さ、幅とも約 1.2 m 以上を測る方形プランと考えられる住居跡である（第 39 図）。東側は削平を受けており、全体の形状は不明。西側にベッド状遺構がある。深さも約 20 cm 残存する程度であり、炉や柱穴の配置は明確にできなかつたが、S01 や S07 と同時期と考えられる。

出土遺物もほとんどなかつたが、P28 と切り合つてある。この P28 からは古代と考えられる須恵器が出土している。

<土坑>

土坑も各トレンチで数基確認したが、いずれもそれほど深くないため、工事等により削平を受けているものと考えられる。遺物の出土もほとんどないため、時期の特定も困難であるが住居跡とほぼ同時期である可能性が高い。

<掘立柱建物跡>

トレンチ調査であったため、当初は通常のピットとして認識していたが、並び方に規則性があつたため、東側を拡張して掘立柱建物跡として調査した。

このうち主に完堀したのは、北東側の 5 つの柱穴であり、これについては、東西方向で半裁して断面の土層觀察ができた。結果、柱穴痕や抜き取り痕は検出されなかった。遺物の混入がほとんどなかつたため、時期の特定が困難であるが、住居跡と同時期とすれば弥生時代中期から後期となる。

直径は約 70 ~ 80cm のほぼ円形であり、検出面からの深さは約 80 ~ 90cm である。南西側は調査区外であったが、検出面から上層はすべて整地層であつたため工事立会時にこの表土のみ剥ぎ、全体の検出まで行った。トレンチの配置上、この他に柱穴はないものと判断した。よって、2 間 × 3 間の 12 本縦柱建物と考えられる。完堀していない柱穴については、現状保存されている。



写真 18 亀甲遺跡 501 出土遺物

写真 19 亀甲遺跡調査状況



S01 調査状況 (南西から)



S01 南側遺物出土状況 (北から)



S07 調査状況 (南から)



S07 柱状片刃石斧出土状況



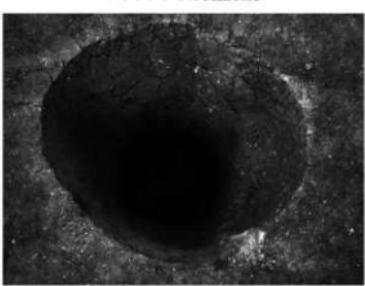
S08 完掘状況 (東から)



7 トレンチ S03 完掘状況

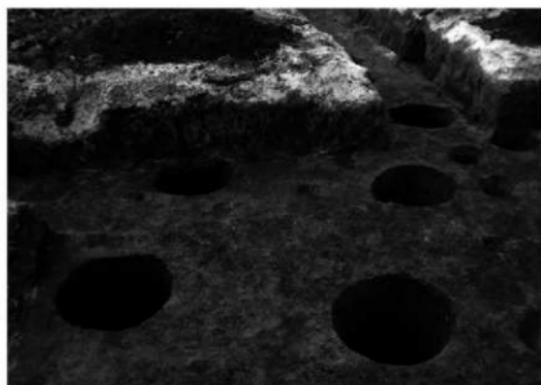


S09 掘立柱建物棟出状況 (南東から)



S09 掘立柱建物柱穴完掘状況

写真 20 亀甲遺跡の据立柱建物跡



S09 完堀状況（東から）



S09 範囲確認状況（東から）



S09 全体検出状況（北東から）

9 春出遺跡

所在地：中字徳丸 1468 ほか

調査原因：共同住宅

対象面積：1,200.14m²

調査期間：平成 24 年 1 月 11 日

担当者：齋父雅史

調査地は、境川左岸の台地上に位置し、標高約 1.7 m の地点にあたる。当地の南西側に中明正寺や慶専寺といった寺院が所在するが、この付近を中心 大野一族と関連性が指摘されている中世の居館跡（中村館跡）と推定されている。現在、市道となっている窪地状の道路は堀跡の可能性が高く、竹藪となっている高まりは土塁跡と考えられ、これらの痕跡は数か所で確認できる。

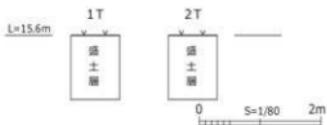
今回の工事の内容は、古い共同住宅を解体した後に、新築するものである。基礎の掘削が 1 m と深いため、解体後に確認調査を実施した。

基礎が入る予定地に東西 2 箇所のトレンチを設定して、重機で掘削したところ、約 1 m 下まで埋め立てた層であり、以前のアパートも盛土した上に建ててあったようである。

以上のような結果から、工事の掘削も埋蔵文化財に対する影響はないものと判断されることから慎重工事となった。

<参考文献>

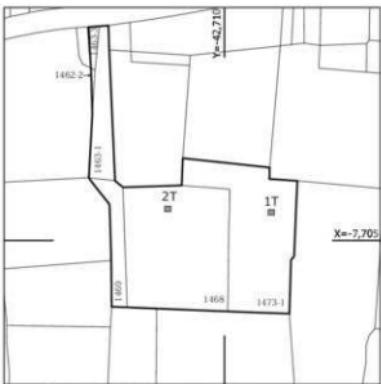
末永 崇 2004 『玉名市内遺跡調査報告書Ⅱ』 玉名市文化財調査報告第 13 集 玉名市教育委員会



第 45 図 春出遺跡トレントレンチ柱状図



第 43 図 春出遺跡調査地位圖 S=1/5,000



第 44 図 春出遺跡トレントレンチ配置図 S=1/1,000



写真 21 春出遺跡調査前状況

10 高瀬船着場跡（第 1 次調査）

所在地：永徳寺地内

調査原因：河川護岸整備

対象面積：約 600m²

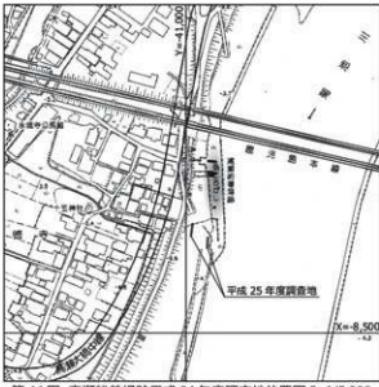
調査期間：平成 25 年 3 月 4 日

担当者：末永 崇

高瀬船着場跡は、菊池川右岸沿いに位置しており、年貢米の積み出し港として利用された施設である。

米俵を保管するための御蔵という藩営の倉庫群が整備され、そこから船に米俵を積み込むための「俵転がし」と呼ばれる施設が設けられた。上流側は、旧渡頭と呼ばれ高瀬御茶屋への階段状の入口と小規模な俵転がしが 1 基残存している。下流側は新渡頭と呼ばれしており、天保 12(1841) 年に行われた大改修の時期に、もう 1 基俵転がしが築造されたと考えられている。

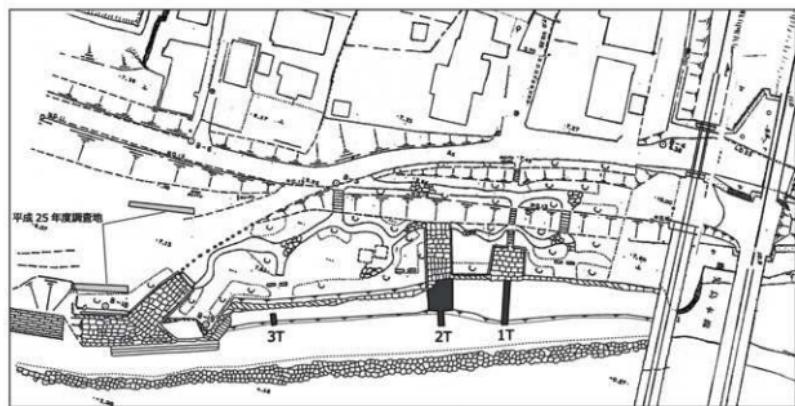
近世における熊本藩の年貢米は、大坂の堂島へ搬送されるため、高瀬・川尻・八代の各御蔵に集められて厳重な品質管理が行われていた。高瀬御蔵には、菊池川流域の玉名・山鹿・菊池などからの米が納められ、嘉永年間には、最大 25 万表が集められた。中でも高瀬からの積み出しが藩内最大であった。しかし、明治 10 年の西南戦争で御蔵等が消失、さら



第 46 図 高瀬船着場跡平成 24 年度調査地位置図 S=1/5,000



写真 22 高瀬船着場跡（新渡頭の俵転がし）



第 47 図 高瀬船着場トレーンチ配図 S=1/1,000

に鉄道の新設によって、船運も廃れ、船着場としての機能は失われた。

調査地は、菊池川右岸沿いに位置しており、土砂に覆われている部分の石積みなどの状況を確認するため、3ヶ所のトレンチを設定し、重機で掘削して確認した。観察地点を、北側から階段状の地点を1T、スロープ状の地点を2T、そのさらに南側を3Tとした。

(1) 1T

観察地点の最も北側（上流側）で、船からの荷物などを川から御蔵及び御茶屋まで運び上げるために階段状に築造されている。堆積している土砂を除去し、階段部分と石積み部分を確認した。階段の最下段から約7.5mまで石積みが続き、そこから一段下がった部分で護岸用の捨石が確認された。捨石より下は掘削が困難であったため未確認である。石積みの縁は、本来の船着場であったとみられ、昭和40年の調査記録と一致する。

(2) 2T

1Tの南側（下流側）であり、俵ころがしのスロープ状の部分から川側への土砂を除去し、石積み部分を確認した。スロープ下端から約5m石積みが続き、石

の積み方が谷積に変更され、傾斜して法面が形成されている。その上には護岸用の捨石が乗せられ、さらにコンクリートのテトラポットが入れられていた。

(3) 3T

観察地点の最も南側（下流側）であり、2Tで確認した谷積部分がすでに一部見えていた。土砂を除去すると、谷積部分が2Tと同様に法面が形成され、護岸用捨石とテトラポットを確認した。全体の状況は2Tとほぼ同様である。

<調査の結果>

今回調査した結果、俵ころがしの前面は石積が敷かれ、昭和30～50年代にかけての整備後の状況とほぼ同様である。一部の範囲の調査であったが、全体を観察し、本来の石積みの部分と新たに整備した部分との確認が必要と判断される。谷積の部分は、後世の修復であることが明瞭に判別できるが、石積の部分は、当時の状況をそのまま留めているか、同じ石材を用いて修復されているのかの判断は、今回の調査ではでなかった。谷積の範囲は船着場全体に亘り、すでに本来の石積みは崩れ、修復されていることが判明した。



写真23 高瀬船着場跡（旧渡頭）土砂除去後

写真 24 高瀬船着場跡調査状況



2 トレンチ (東から)

1 トレンチ (東から)



旧渡頭の俵転がし跡

旧渡頭の揚場跡

11 南出遺跡

所在地：中1810-1

調査原因：調査依頼

対象面積：148.68m²

調査期間：平成23年3月15日

担当者：齋藤雅史

調査地は、菊池川右岸の玉名台地上に位置し、標高約14mの地点にある。南側に接する市道は、旧三池往還である。一帯は、弥生時代を中心として、以前に墳塚が出土したとされ、平成15年に行った近隣の調査では、住居跡、溝などが確認されている。

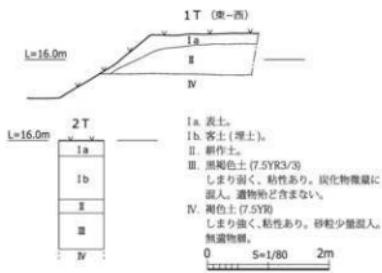
今回、調査依頼に伴い掘削が予定されている範囲を中心に2箇所のトレンチを設定して埋蔵文化財の確認を行った。

その結果、南側の1トレンチにおいて、土器を含む柱穴を1基確認した。土層は、I層が表土、II層が耕作土で、その直下が無遺物層であり、その面から遺構が検出された。包含層に相当する層は確認できず、後世に削削を受けているものと考えられる。

2トレンチは、無遺物層がやや下がり、上に黒褐色の層が堆積していたが、弥生時代以前の自然堆積と思われ、遺物は含まれていなかった。

現在の遺跡範囲も北側は含まれていなかったが、旧地形もやや低くなるため北側までは遺跡は広がっていない可能性がある。

今回の工事は、駐車場の造成であり、特に東側の一段高くなっている範囲が切土の計画である。地表から60cm下より遺構が検出されるが、上部は耕作土であり、切土後は、駐車場として碎石が敷かれるのみであるため慎重工事となった。



第50図 南出遺跡トレンチ土層断面図



第48図 南出遺跡調査位置図 S=1/5,000



第49図 南出遺跡トレンチ配置図 S=1/1,000



写真25 南出遺跡調査地

12 大原遺跡（岱明玉名線建設予定地 C 地点）

所在地：岱明町野口 500-1 番地先

調査原因：市道建設

調査期間：平成 25 年 3 月 12 日

担当者：蟹父雅史

調査地は、境川右岸の低丘陵上に位置する、標高約 15 m の地点である。

大原遺跡に含まれており、遺跡範囲としては北東側にあたる。この一帯は、弥生時代中期から後期、古墳時代前期にかけての遺跡が集中している。北西側の平成元年の調査区では、大型木棺墓や箱式石棺墓群が確認されている。

平成 26 年度に実施した岱明玉名線建設に伴う発掘調査では、大原遺跡から、住居跡約 120 基が切り合って検出され、前漢・後漢鏡（破鏡）が 2 点と小型彷彿鏡などが出土している。

敷地の東側は崖面であり、旧地形もここで段丘状に落ち込んでいたものと考えられる。また、以前の住宅建設の際にも大幅な造成を受けているものと考えられ、コンクリートによって固められていた。

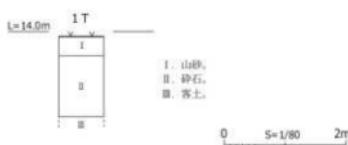
よって、今回は限られた場所でしかトレンチ設定できなかったが、掘削した結果、山砂や碎石、客土による盛土が行われており埋蔵文化財は確認できなかった。遺跡範囲としても、北東端にあたるものと考えられる。



第 51 図 岱明玉名線建設予定地 (C 地点) 調査地位位置図 S=1/5,000



第 52 図 岱明玉名線建設予定地 (C 地点) トレンチ配置図 S=1/1,000



第 53 図 岱明玉名線建設予定地 (C 地点) トレンチ土層柱状図



写真 26 大原遺跡調査前状況

13 溝上地区の古墳群（分布調査）

所在地：溝上城跡間、田代、下前田
調査原因：現状確認踏査
調査期間：平成25年3月2日～3月20日
担当者：齋父雅史

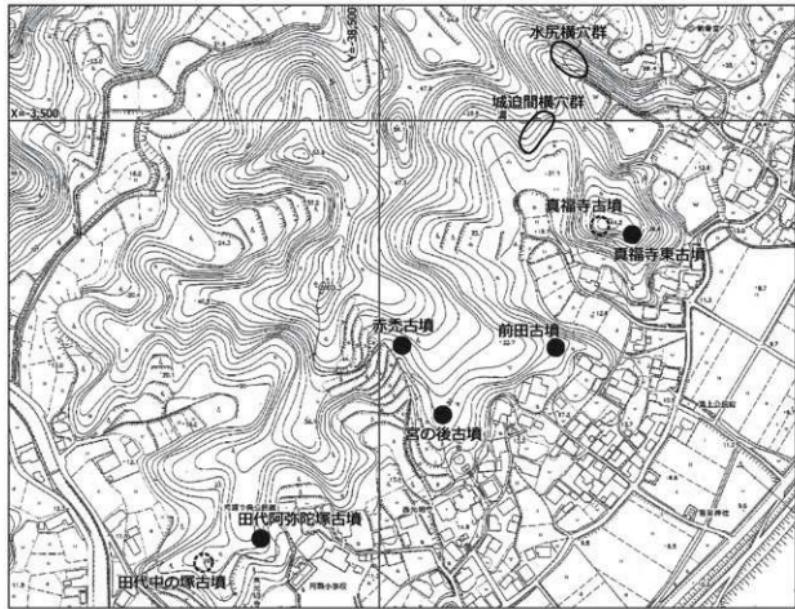
当市では、独自に遺跡地図を作成しているが、実際には消滅していたり、残存していても崩壊が進んでいる状況が見受けられた。よって、詳細な分布を再確認して、遺跡の現状を把握し、今後の保存を目的とする踏査を行うこととした。

時間的にも限られていたため、埋蔵文化財ではなく現状の踏査で確認できる古墳などを対象とした。その中で、最も不明確であった溝上地区の古墳群などで実施した。玉名市は全国でも舟形石棺が最も多く集中し、畿内地方まで輸送されていることがわかっている。市内に残る小規模な古墳の多くは、大きくなっている。市内に残る小規模な古墳の多くは、大きくなっている。



写真27 溝上の古墳群遠景

正から昭和初期頃の土砂採掘時に偶然発見されたりして、その後玉名高校考古学部などによって調査されたものが多い。報告書等も正式に公表されていないため、詳細が不明であり現在、所在の実態がわからない状況であった。そのため現状を把握し、掘削を伴わない清掃、可能な範囲の実測、写真撮影を行った。過去に実測されているものについては、再トレースや追加等を行い掲載することとした。



第54図 溝上地区的古墳群分布図 S=1/5,000

13-1 宮の後古墳

当古墳は、菊池川右岸の小岱山から南東側へ延びる丘陵上（標高は約 30～32 m）に位置している。

対岸には、江田船山古墳を中心とした清原古墳群があり、清原石棺・大久保石棺などが分布、また山下古墳・徳丸古墳群など舟形石棺を主体とする古墳が最も集中して分布する地域である。

西光明寺の北東側に七社宮があるが、この社殿の裏側（北側）丘陵斜面に当古墳はある。同じ丘陵突端部には、前田古墳・赤堀古墳が所在する。

この七社宮の西側には、谷の崖面に沿って幅の狭い山道があり、この道を登って行くと右側の林中にやや小高くなる部分が見えてくる。小高い部分が墳丘の名残と考えられ、その上に石棺が埋没した状態である。埋没しているというよりは、墓壙がすでに盗掘により約 1 m 剥ぎ出され、石棺の上半部が露呈し、棺蓋が割られてずれている状態である。露出した部分はコケが生え、ほとんどが落葉などに埋もれている状況であった。

今回、掘削は行わず石棺を傷めないように落葉のみ剥い、全体が見える程度まで検出を行った。

本格的な発掘調査は行われていないため、古墳の形状は不明であるが、円墳と考えられている。現状の封土は直径約 25 m である。

主体部は舟形石棺の直葬と考えられ、蓋は家型（寄

棟式）、棺身共に縄掛突起がある。棺身も北側面が割れて傾斜している状況で棺自体はまだ埋もれている。石棺の寸法は、全長 2.34m、幅 1.13m、蓋高 0.5m を測る。石材は、阿蘇溶結凝灰岩製で近辺が産地とされる。

石棺内に土砂の流入はほとんどなかった。発見された当初は、内面で赤色顔料が確認されているが、現在肉眼では判別にくい。

過去の調査時に、内部より鉄剣 1 点、刀子 3 点、滑石製玉 2 点が出土したという記録があるが、現物共に詳細は不明である。

石棺の形状は、いわゆる北肥後 I 型であり、舟べり突起がつき、底部が平坦とみられ、蓋は経塚古墳でみられるような棟部がなく切妻の家形である。高木氏の編年によると院塚古墳に続く 6 期と考えられる。

以前の断面図を再トレースし、今回は石棺見通し図と盗掘坑のラインを入れて掲載している。

<参考文献>

- ①田添夏喜 1985 「溝上の宮の後古墳」『玉名市文化財めぐり』(172)。
- ②田辺哲夫 1991 「舟形石棺のふるさと玉名」『歴史玉名』第 5 号。
- ③高木恭二 1992 「九州地方」『別冊式石棺研究の現状と課題』古代学協会発表資料。
- ④高木恭二 2012 「菊池川流域の古墳」『国立歴史民俗博物館研究報告第 173 集』。

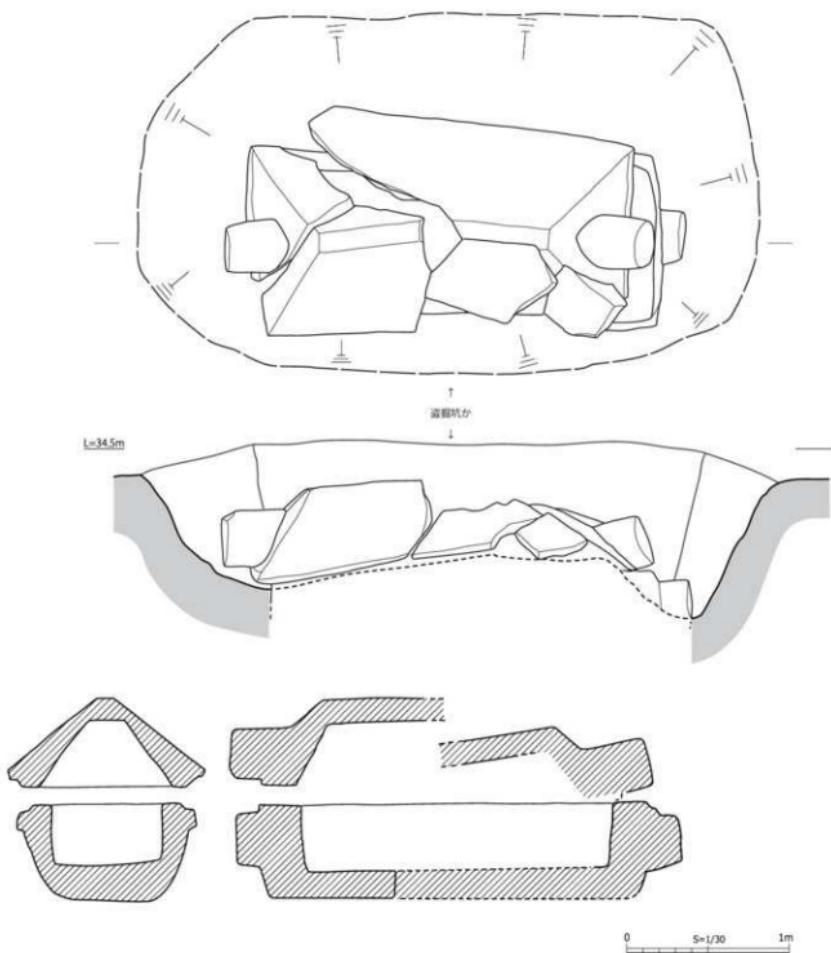
写真 28 宮の後古墳



宮の後古墳石棺現状（清掃前）



宮の後古墳石棺（北側）



第 55 図 宮の後古墳石棺実測図 *新面図のみ文献③から再トレース

写真 29 宮の後古墳調査状況



宮の後古墳石棺（北から）



宮の後古墳石棺内部



宮の後古墳石棺

13-2 赤堀古墳

宮の後古墳の北側丘陵上にあり、標高は約55mの地点である。宮の後古墳と同じく、西側に谷の崖面に沿って、下の神社から続く山道があり、その道を登っていくと先が谷になって左に阿蘇宮地獄神社（石祠・英彦山）がある。このすぐ右側のやや小高くなる部分がみえてくる。その上に、石棺が埋没している。墓坑がすでに盜掘により約50cm掘り出され、石棺の一部が露呈し落葉などに埋もれていた。

当古墳は大正時代に地元の人により発見され、石棺内部から人骨と共に鉄剣が掘り出されているが、再度埋め戻したという伝承があった。その後、昭和24年になって玉名高校考古学部によって調査され、その伝承通り人骨片と鉄剣が風化した状態で確認されている。しかし、図面や写真等も正式に公表されていない。

北側と東西側は崖に囲まれており、古墳の形態は不明であるが、周辺の地形から自然丘陵上に石棺のみ埋設されている可能性がある。

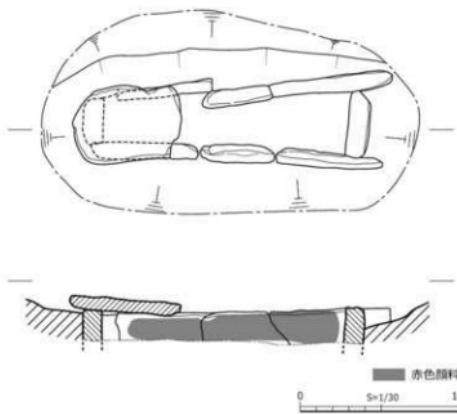
石棺の形状は、凝灰岩製の板石を組み合わせた箱式石棺であり、寸法は、全長1.76m、幅0.4m(東側)、0.35m(西側)を測る。東側が広いため頭部であったと考えられる。深さは約0.3mで、底石はなく、砂敷きと記録されている。

玉名市内で箱式石棺から副葬品が出土した例は他に、繁根木石棺（現：玉名第一保育所入口）から方格規矩鏡が出土したほか、天水の大塚古墳主体部以外の箱式石棺などの例がある。

蓋石も凝灰岩製であり、現在は1枚のみ残り、あとは断片が東側に散乱していた。棺内には赤色顔料が肉眼でも確認できる。

＜参考文献＞

田添夏喜 1985 「赤堀古墳」『玉名市文化財めぐり(173)』



第56図 赤堀古墳石棺実測図



写真30 赤堀古墳の現状



写真31 赤堀古墳の箱式石棺

13-3 前田古墳

前田古墳は、宮の後古墳と同じ丘陵上の標高約 33 m の地点にある。以前から石棺のみが完全に露出しており、封土などは全く残存していない。この状況は昭和 30 年代に玉名高校などが調査した頃と変化していないようである。

前頁では触れなかったが、これらの古墳群が分布する丘陵上は中世の山城と考えられる「溝上城跡」が所在している。今回、山城としての踏査はできなかつたが、最も高い峰の標高約 56 m 上に築かれており、地図上でも平坦部が数ヶ所みられ、本丸と推定されている場所には社がある。

この中世城を造る際に、どの程度造成を受けたか不明であるが、当古墳の石棺底面が埋没していることからも移動しているとは考え難い。

棺身は舟形石棺であり、南側が割れてずれている状態で縄掛突起がある。棺蓋は既になくなつておらず、恐らく盗掘時に碎かれ紛失したものと思われる。副葬品についても全く不明である。石棺全長 2.16m 幅 1.05m を図る。棺身の形状からすると、小路古墳石室内の石棺と非常によく似ている。やや幅が広いわりには浅く、縄掛突起が短い。底部が平坦など

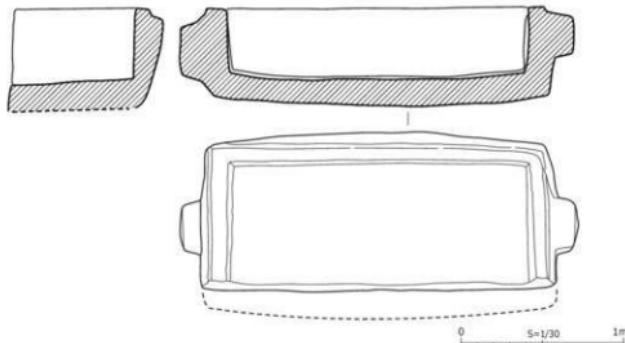
の特徴が共通している。土地所有者は古墳のすぐ近くに住んでおられ、少なくとも、昭和 50 年頃の写真を見ると、縄掛突起の半分くらいまで土に埋もれている状況がわかる。時間の経過と共に石棺が露呈していったものと考えられる。

<参考文献>

- ①田添夏喜 1985 「溝上の前田古墳」『玉名市文化財めぐり』(173)
- ②高木恭二 1992 「九州地方」『朝倉式石棺研究の現状と課題』古代学協会発表資料



写真 32 前田古墳の舟形石棺から菊池川を望む



第 57 図 前田古墳石棺実測図 (文献③から再トレイス)

写真 33 前田古墳の舟形石棺



前田古墳の舟形石棺（東から）



前田古墳の舟形石棺（南から）

13-4 真福寺東古墳

地元では「真福寺山」（しんぼうじやま）と呼ばれている丘陵の突端部上にある。

戦前、土砂採取の作業中に石棺が発見されており、墳丘の両側は削られ、舟形石棺が破壊された状態のまま残存している。手前には石棺の破片が散乱している状態であった。しかし、昭和 40 年頃までは、削られていても原形に近い状態で保たれていたという。発見された直後の図面が残されているが、写真是その後に散在した状態のものである。

石棺の主軸は東西方向であり、全長は 2.26 m、幅 1.06 m、高さ 0.8m で、宮の後古墳の石棺よりやや小さいがほぼ同類の規模と形状である。

発見当時には、石棺内部より鉄劍片、滑石製の小玉、外部より鉄斧 1 点の出土があったと伝えられているが、現物の所在も不明である。また、石棺内面は赤く彩色されていたと記録されているが、肉眼

では確認できなかった。

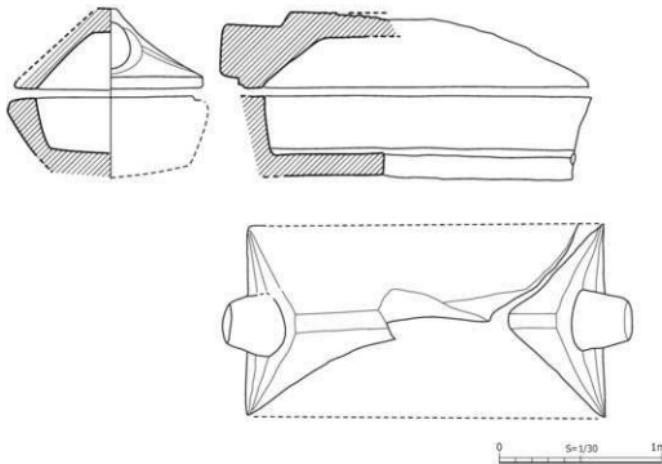
同丘陵上にはもう 1 基、真福寺西古墳があるとされているが、現地で確認することができなかった。

西古墳は、記録によると棺蓋断片が残存し、墳丘封土も残っていないことから、同じように土砂採掘中に破壊された可能性がある。出土品なども不明であり、石棺片も原位置から移動していたという。

この真福寺古墳の石棺の北側上には樹木が大きくなり根が繁茂している。北側は棺蓋が削れた状態で截つたままとなっているが、樹根の影響により、さらに崩落が進行するものと考えられる。今後、保存処置の検討も必要である。

<参考文献>

- ①田添夏喜 1985 「満上の真福寺古墳」『玉名市文化財めぐり』(177)』
- ②高木恭二 1992 「九州地方」『朝挾式石棺研究の現状と課題』古代学協会発表資料



第 58 図 真福寺古墳石棺実測図（文献②から再トレース）

写真 34 真福寺東古墳



舟形石棺と石材の散乱状況（南から）



舟形石棺（南から）



舟形石棺西側部分

13-5 阿弥陀塚古墳

当古墳は、前堀の宮の後古墳・前田古墳等とは別の尾根上に位置する。月瀬小学校の体育館裏側から登った丘陵の突端部上にあり、竹藪の中の少し盛り上がった部分が古墳の墳丘と考えられる。最も高い部分がくぼ地となっており、そこに凝灰岩製の石棺が破壊された状態のまま散乱している。

いつ頃から盗掘、破壊されたかは定かではないが、以前はここへ阿弥陀堂が建っていたと言われ、古墳名称の由来となっている。

墳丘の形状は不明確であるが、丘陵突出部に築造された円墳と考えられる。墳頂の窪みは盜掘抗の可能性があるが、以前はもっと残存状態が良かったものと考えられ、熊本県教育委員会でまとめられた「院塚古墳」の報告書に掲載されている記述には「玉名市溝上阿弥陀塚石棺は、箱式棺の蓋に舟形石棺に見

かける棺蓋を持ち…」とある。現地でも舟形石棺系の棺身は確認できなかったが、板状の石材が 2 枚直立している状況であった。棺身が凝灰岩製の箱式ならば、赤堀古墳の石棺に似ている。棺蓋は割られた状態で数点が散乱していた。棺蓋には赤色顔料が確認されている。なお、当石棺蓋の実測図が『歴史玉名』(第 5 号)に掲載されているが、縄掛突起は片側に 2 つ付くという玉名地域でも珍しい形状をしている。県内で舟形石棺蓋に突起が 2 つ付く例は、山鹿市鹿央町の持松塚原古墳の石棺がある。

<参考文献>

- 乙益重ほか 1965 『熊本県文化財調査報告 第 6 集
（玉名地方）熊本県教育委員会
田辺哲夫 1991 「舟形石棺のふるさと玉名」『歴史
玉名』第 5 号

写真 35 阿弥陀塚古墳現況



墳丘現状（北西から）



古墳主体部現状（西から）



石棺棺身残存状況



石棺蓋破片の散乱状況

14 山田地区の古墳・窯跡

所在地：山田字高岡・糠峯・保多地（一部築地）

調査原因：詳細分布踏査

調査期間：平成25年3月15日～3月20日

担当者：齋父雅史

山田地区の集落には、宅地化が進むなかで破壊されたと考えられる遺跡や古墳が多くある。

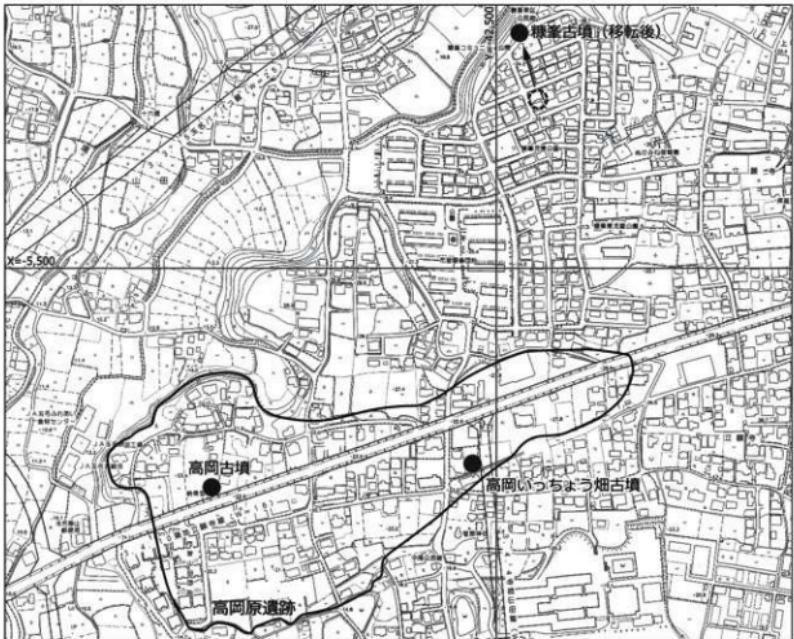
今回、踏査して現状を確認した古墳は、高岡古墳、糠峯古墳、高岡いっちょう烟古墳、保多地古墳群である。高岡古墳は、右写真のように安山岩板石が3枚積み重ねてあり、その範囲は石垣で囲まれている。そこへ「高岡古墳」という碑が建てられている。古墳と伝えられている程度であり、詳細は不明であるが、これらは天井石などの石材であった可能性はある。周辺は中世の館跡「高岡居屋敷」と推定されている。平成28年度の発掘調査では、南北方向に延



写真36 高岡古墳現況

びる溝に沿って、掘立柱建物跡が数棟検出された。

しかし、この古墳跡の北西側においては、遺構は確認されず、大幅に削平を受けている状況であった。中世以降から地形の変更は行われているようである。



第59回 山田地区の古墳分布図 1 S=1/6,000

14-1 糖峯古墳

糖峯団地内に以前あったとされ、古墳が当初あつた場所は現在宅地化され、痕跡は何もない。昭和 50 年頃に団地造成が開始され、団地一帯に広がっていた「糖峯遺跡」も消滅したといわれている。この古墳も正式に発掘調査されたわけではなく、石棺のみが残されて、団地の端へと移設されたようである。移設といつても、どれだけ元の状態に近いのかが疑問である。現在の状態からは、石室というより石棺の形態に近いものと考えられ、安山岩板石が組まれている。現況の実測も行ったが、本来の情報が残されていない可能性があるため、現状写真のみを掲載することとした。

なお、俗明町野口の塚原遺跡から北部九州に多く分布するとされる石棺系石室を主体とする古墳が数基確認されたが、当古墳も石棺系石室であった可能性がある。

14-2 高岡いっちょう畑古墳

当古墳は、弥生時代後期を中心とする集落である高岡原遺跡の範囲内に位置している。現在は畠地となっている傾斜地に安山岩板石 2 枚が直立している。その幅は約 50cm で、他にも埋もれた石材が露出している。古墳の石室というよりは箱式石棺もしくは、糖峯古墳と同じように石棺系石室の可能性がある。

高岡原遺跡の集落内における墓地は、これまで石蓋土坑墓が 1 基検出されているのみである。また、赤色顔料が塗られた安山岩板石が出土している。

古墳南側の旧道は、古代から中世期と考えられる道路跡であり、この道路造成時に法面が削平され、石材が露呈するに至ったものと考えられる。

今回、除草をして現状を確認、実測も行ったが、露出部分のみであり、古墳主体部は、現地に埋蔵された状況で残存している可能性があるため、今後の調査に期待することとしたい。



写真 37 糖峯古墳現況

遺跡台帳の記録によれば、直径約 6m、高さ約 3m の封土があったとされる。解体移設後は地元の人によって「糖峯権現」として祀られたという。このようなことから、石棺石材は祠状に改変されたものと考えられる。



写真 38 高岡いっちょう畑古墳周辺



写真 39 高岡いっちょう畑古墳現況

14-3 保多地古墳群

小岱山から南側へ延びる丘陵上、標高約50～53mの地点に位置する。東側の谷をひとつ隔てた丘陵上には山田の集落があり、「建長の塔」などが所在する。当古墳群は、昭和28年頃に発見された。本来5基からなる円墳群と記録されているが、踏査を行った結果、1・2号墳のみ残存し、3～4号墳は完全に消滅しているものと考えられる。5号墳と考えられるものは、花崗岩石材が残る。

文献には、石室が残存し、現地に復元されているのは2号墳とされている。

<1号墳>

2号墳に隣接する1号墳は、墳丘は現在約60cmの高まりがある程度である。花崗岩の石材が集中して点在、露出している状況であり、これが石室の名残と考えられる。残存というものの、かなり破壊されている可能性が高い。現状でも、石室の形状など判断が困難である。今回は、かなり草が生い茂っていたため、除草のみを行い、現状を把握したのみで、掘削は行っていない。

<2号墳>

横穴式石室であり、古くから荒らされ、発見された当初から西側壁と天井石は破壊されていたといふ。

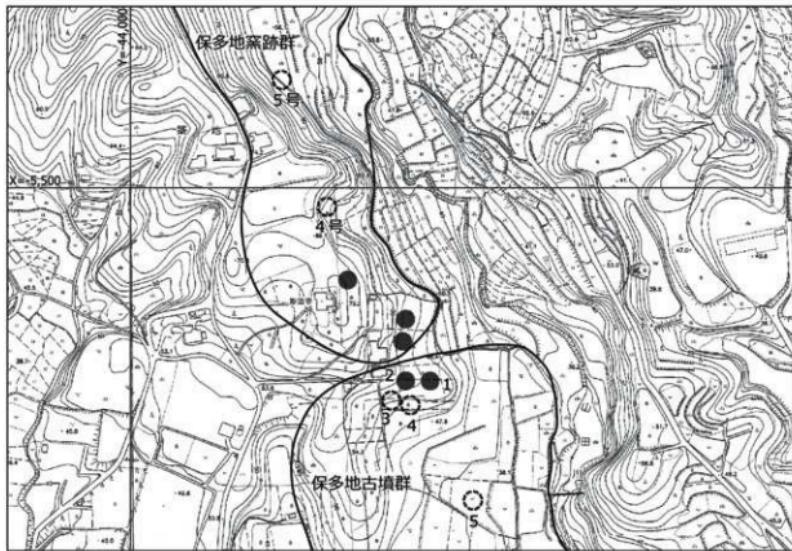
発見後、土地所有者が西側の石材を別の石材で追加し補修、周辺に石垣を作り簡易的な整備が図られている。奥屍床があり、副葬品として17個の金環、メノウ製の勾玉、碧玉製の管玉、鐵鎌数点、鉄斧、ヤリガナガ、轡などが発見時に出土しており、これらの遺物は一括して所有者から玉名市立博物館へ寄託されている。遺物については、今後も詳細な分類、検討が必要である。

今回は、石室内の除草、清掃、実測、写真撮影を行った。実測図は、後世に追加された石材があるため完全な面図化は不可能であった。特に西側壁の石材は後世に追加されたものなので破線で表現している。

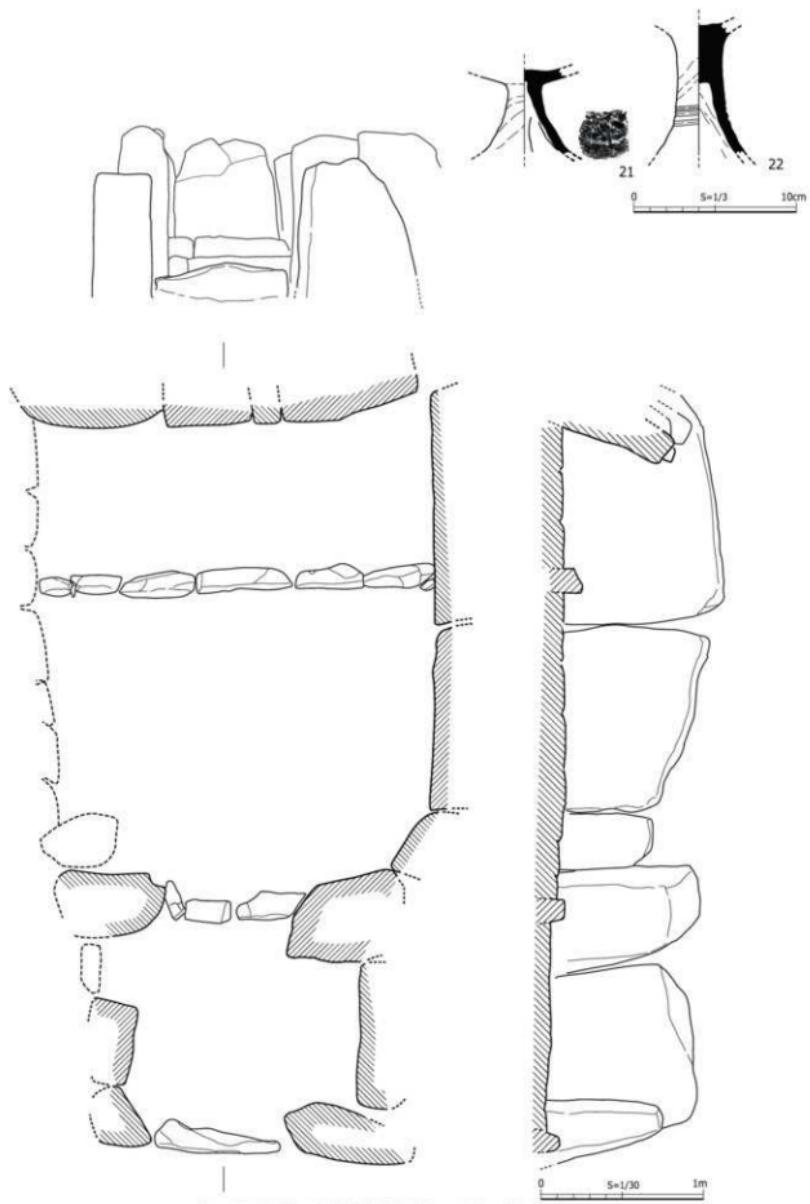
なお、石室内の一か所に遺物が集中して集められていたが、中に須恵器の高环片が2点含まれていたため、今回実測図を掲載している。

<参考文献>

田添夏喜 1974 「保多地古墳」『玉名市の文化財』玉名市教育委員会



第60図 山田地区の古墳・窯跡群分布図2 S=1/5,000



第 61 図 保多地 2 号填採取遺物実測図・2 号填石室実測図

写真 40 保多地古墳群



1・2号墳遠景（奥が1号墳）



2号墳石室正面（南から）



2号墳石室全景（南から）



2号墳石室（奥室底床）



2号墳石室現状（北から）



2号墳石室石材（南から）

14-4 保多地窯跡群

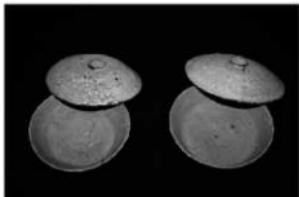
小岱山から南側へ延びる丘陵上、標高約 50 ～ 60 m の地点に位置する。保多地古墳群の北側にある。

小岱山には、北山浦窯跡（県史跡）などを含む「荒尾窯跡群」という須恵器窯跡が確認されているが、玉名市内で確認されている窯跡は、この 1 か所のみで、これらの支群に含まれている。

現在、妙法寺があり、その東側斜面が主な分布域となっている。本来は、5 基あったとされるが、北側の 4・5 号は消滅している。また、南側の 1・2 号は床面が露出した状態であり、ミカン畠の中に赤い焼上、硬化面が観察され、須恵器片が散乱している。これらの中で、3 号が完全に残存しているといわれている。3 号は、妙法寺のすぐ東にあたる。当

窯跡は、小岱山の製鉄遺跡調査と同時に調査されており、窯跡の規模は、大きいもので幅約 2 m、全長 8.3 m で、焚口が東側、床面の中央部付近まで平坦で、その先は西側にかけて約 30 度傾斜する登り窯構造であったと記録されているが、図面等が公表されていないため、詳細は不明である。

窯跡の時期も古墳時代とされているが、荒尾窯跡群（約 60 基）でも古墳時代の須恵器窯は大和窯跡（6 世紀後半）のみと少ない。当窯跡採集と考えられ、市博物館に寄託されている須恵器（环・环蓋）からすると、8 ～ 9 世紀代とみられる。



保多地窯跡採集と考えられる須恵器（博物館資料）

写真 41 保多地窯跡群



保多地窯跡からみる市街地方面



2 号窯跡付近



3 号窯跡付近（東側の焚口か）



3 号窯跡の煙道か

15 塚原古墳

所在地：岱明町野口字塚原 737 地先

調査原因：現況確認踏査

調査期間：平成 25 年 3 月 21 日

担当者：齋父雅史

当古墳は、友田川の左岸に位置する標高約 14 m の地点にある。南東側には塚原遺跡が所在しており、平成 22 年度の岱明玉名線建設に伴う発掘調査では、弥生時代中期から古墳時代中期にいたる集落跡、喪棺墓群、古墳群が確認されている。また、年の神遺跡が西側に隣接し、南側には石蓋土坑墓が確認されるなど、遺跡が密集している。

当古墳は個人住宅の敷地内にあるが明確に高塚状の封土が残っている。このような小規模な古墳が墳丘まで残存している例は市内でも少ない。

この古墳の周囲は、中世寺院「二仏庵跡」であり、五輪塔 7 基、板碑 1 基、宝塔 3 基ほか石造物が多数残存している。

古墳の中央部に安山岩板石を組み合わせた状態で露出しているが、箱式石棺と考えられ、内部は半分ほど削平され、石棺内が祠状になされている。幅約 63cm、長さ約 60cm、深さ約 40cm を測る。内部には、宝塔の人物面を正面に向けた状態で祀ってある。おそらく寺院が建てられた中世以降、信仰の対象となっていたものと考えられ、これが古墳が後世まで残された要因であろう。

現状の墳丘は径約 12 m、高さ 2.5 m を測り、高木や竹が生えているが、竹は定期的に伐採され、所有者により管理されている。

塚原遺跡で確認された古墳群と関連して、年の神遺跡の支石墓、喪棺墓群と合せて地域における墳墓の変遷を考えるうえでも貴重である。



第 62 図 塚原古墳調査位置図 S=1/5,000

写真 42 塚原古墳 (1)



塚原古墳遠景（南から）



墳丘現状（南から）

写真 43 塚原古墳 (2)



塚原古墳の主体部（西から）



塚原古墳の箱式石棺（祀として利用）



塚原古墳の箱式石棺

III 平成 25 年度の調査

1 伊倉宮の後遺跡

所在地：伊倉北方字宮ノ後 2625、2636 外 2 筆
 調査原因：学校施設（武道場）
 対象面積：22,060.00m²
 調査期間：平成 25 年 4 月 22 日～5 月 23 日
 担当者：齋父雅史

調査地は、菊池川左岸の台地上に位置し、標高は約 36 m の地点である。玉南中学校用地内で以前は旧校舎、体育館などが建っていた位置であり、調査時は解体され整地されている状況であった。

平成 23 年度に実施した体育館建設に伴う確認調査でも、縄文晩期の土器埋設遺構、中世の溝状遺構 2 条などが確認されている。

今回の確認調査では、基礎及び地中梁が計画されている位置に合わせて、掘削可能な部分にトレーンチを設定した。基本土層については、隣接する体育館の調査時と対応する。

I 層が山砂整地層、II 層が旧建物解体時の搅乱及び客土層、III 層は擾乱で確認できず、IV～VI 層は旧耕作土考えられる層で、VII 層が無遺物層である。遺物の出土状況に応じて V 層若しくは VI 層上面まで重機、それ以下を人力により掘削した。層中からは、主に縄文から中世にかけての土器小片が出土したが、V・VI 層とも、耕作等の影響を受けているものと考えられる。

遺物の内容から、V 層上面が中世期、VII 層上面が弥生時代から中世初頭と考えられる。遺構は、大半が植物痕や基礎解体等による擾乱が著しく、遺構とする判別が困難であったため、一部掘削を行って確認したが、明確な遺構は確認できなかった。

遺構の大半は、耕作等の影響により削平を受けているものと考えられる。調査の結果、基礎が入る部分では遺構は確認されず、面積も狭小であることから慎重工事となった。



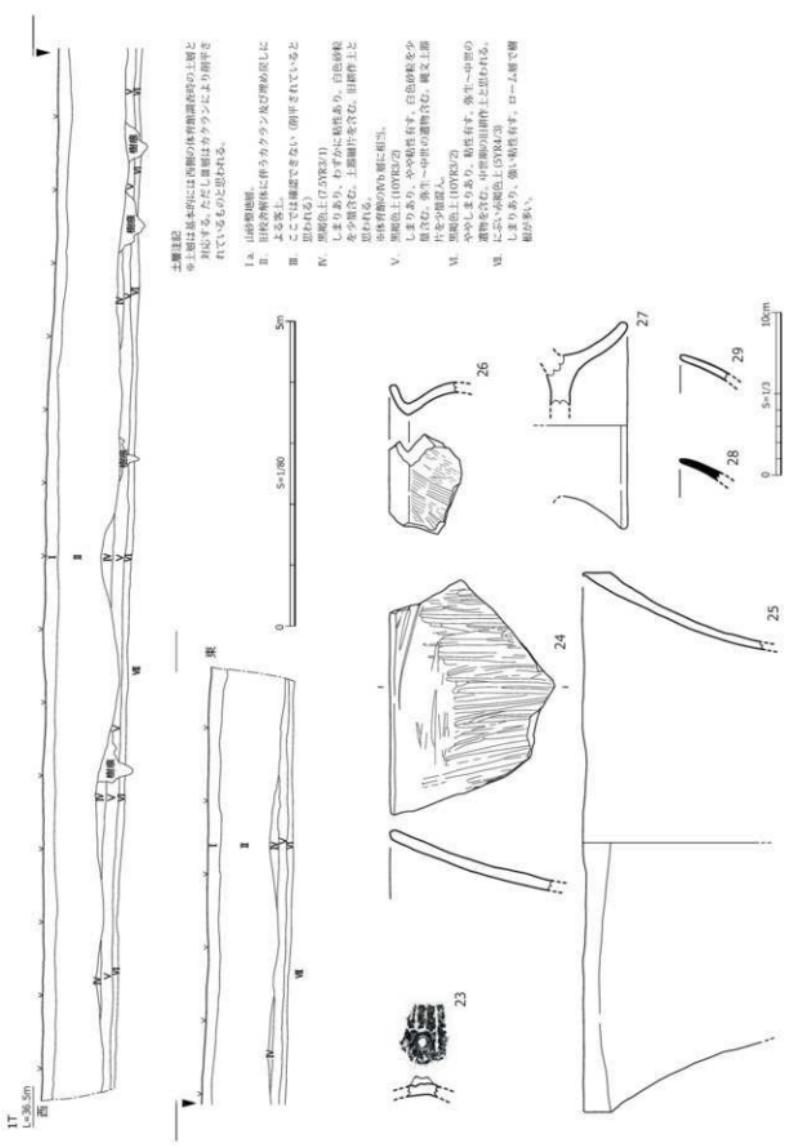
第 63 図 伊倉宮の後遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第 64 図 伊倉宮の後遺跡トレーンチ配置図 S=1/1,500



写真 44 伊倉宮の後遺跡調査状況



第65図 伊食宮の後進跡トレント士削面図および出土遺物実測図

2 年の神遺跡（B地点）

所在地：岱明町野口 2456
 調査原因：特別養護老人ホーム
 対象面積：1092.07m²
 調査期間：平成25年8月1日～9月19日
 担当者：末永 崇

調査地は、小岱山から南側に延びる低丘陵上に位置する、標高約16mの地点である。遺跡を含む丘陵一帯は、昭和40年代から「開田」と呼ばれる耕作地造成工事が行われ、その際に多くの埋蔵文化財が確認された。年の神遺跡は、これまで弥生時代の甕棺墓などが出土している。敷地内は水田であったが、近年山砂で埋められて造成されている。

今回の調査では、建物の基礎部分を掘削して1～10トレンチとし、重機及び人力で掘削して埋蔵文化財の状況を確認した。

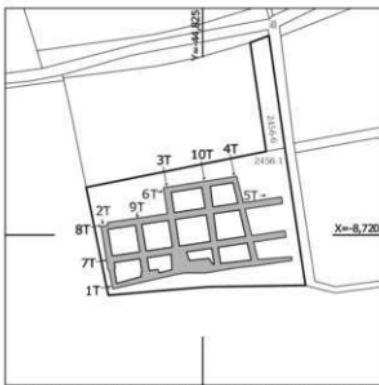
全体の層位は、山砂層の下からI層が旧耕作土、II層が黒褐色土を呈する遺物包含層、III層が暗褐色土の遺物包含層であり、IV層以下が無遺物層と判断した。IV層上面で住居跡、土坑、小穴などを検出した。I層から、多量の弥生土器、少量の須恵器が出土した。全体的に、調査範囲の西側のS07から特に土器片が集中する。甕棺の破片も非常に多い。これまでの耕作地の造成工事によって地形は大きく改変されているとみられる。

トレンチ調査であったため、各遺構の全体像や性格が不明な点が多い。S01は円形の土坑で、内部より口縁部に数条の暗文を施した壺、肩部に数条の線刻がある壺などが出土している。この線刻も全体が不明なため線刻画になるのか、模様的なものか明確ではない。S02は長方形を呈した小型の土坑であり、石包丁が出土している。S07は、大型の土坑、もしくは竪穴建物跡の可能性があるが、全容が不明である。包含層からは、甕の蓋、須恵器、砥石等が出土している。

工事の内容は、福祉施設の建設工事である。基礎工事で、独立基礎と地中梁の部分が遺構面まで掘削されるが、その部分は確認トレンチとして調査した。よって、工事は埋蔵文化財に対して影響ない範囲であるが、現地で状況を確認するため工事立会となった。



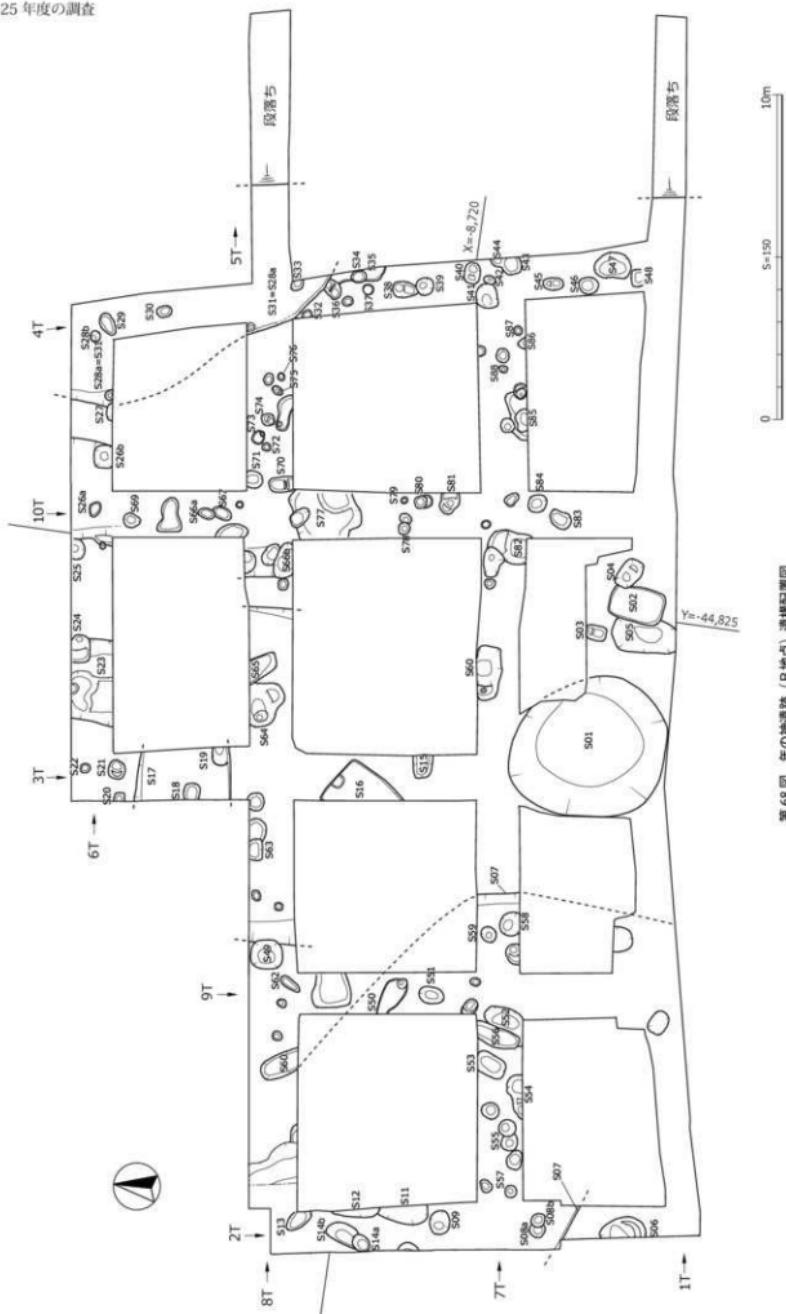
第66図 年の神遺跡（B地点）位置図 S=1/5,000



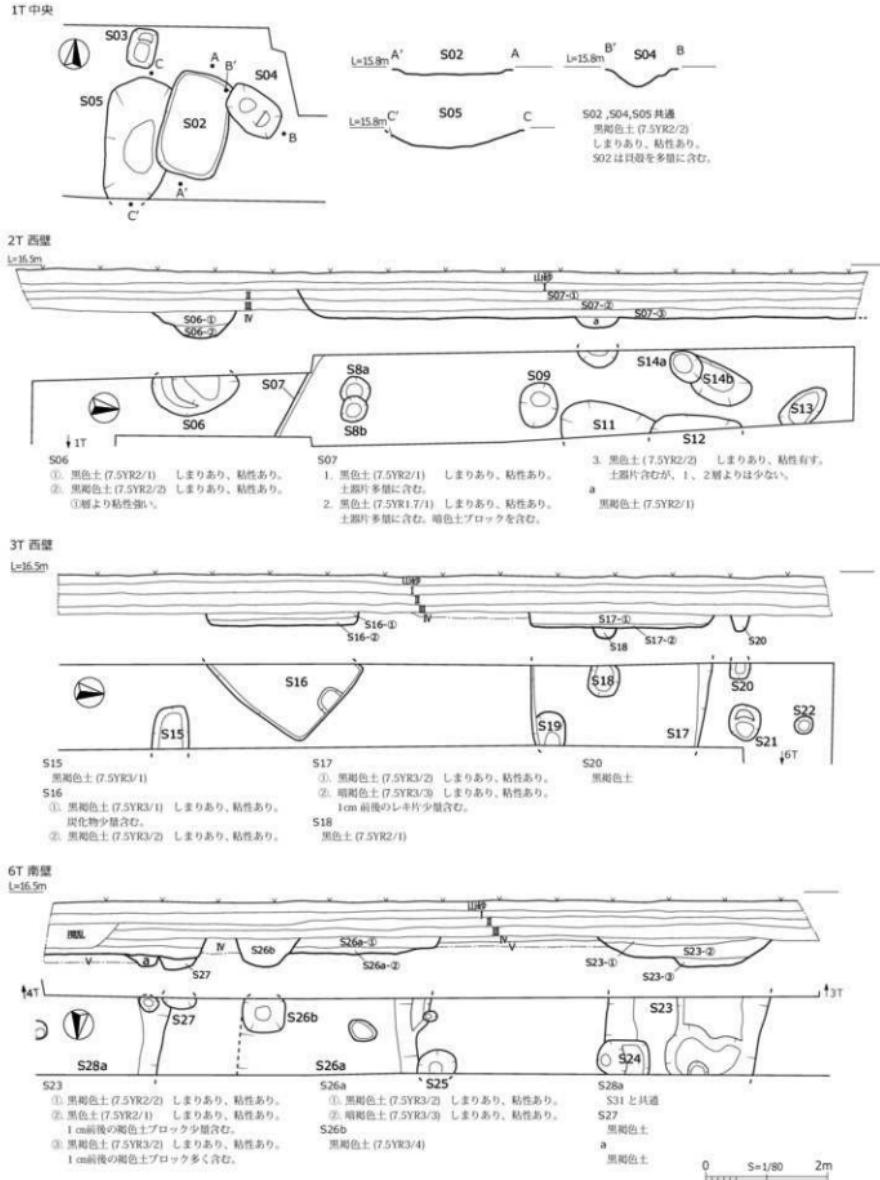
第67図 年の神遺跡（B地点）トレンチ配置図 S=1/1,000



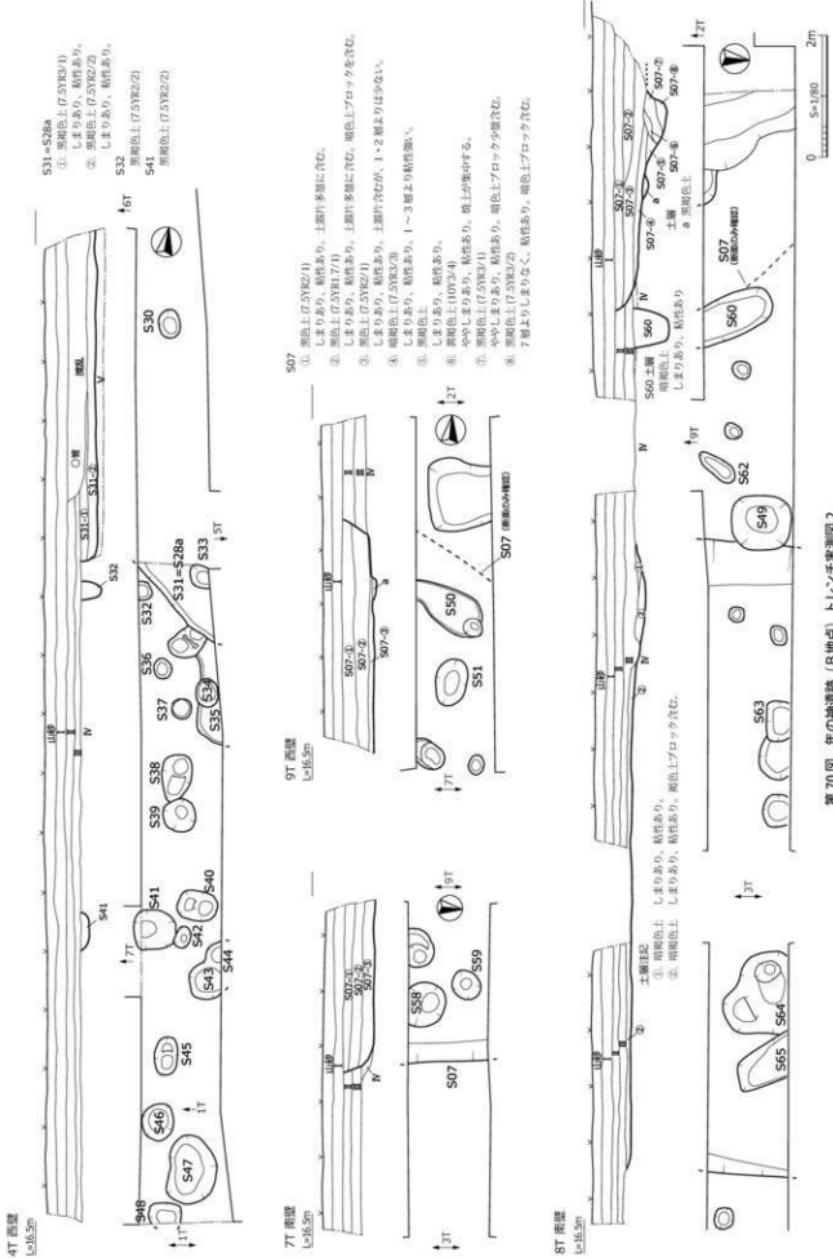
写真45 年の神遺跡調査地遠景



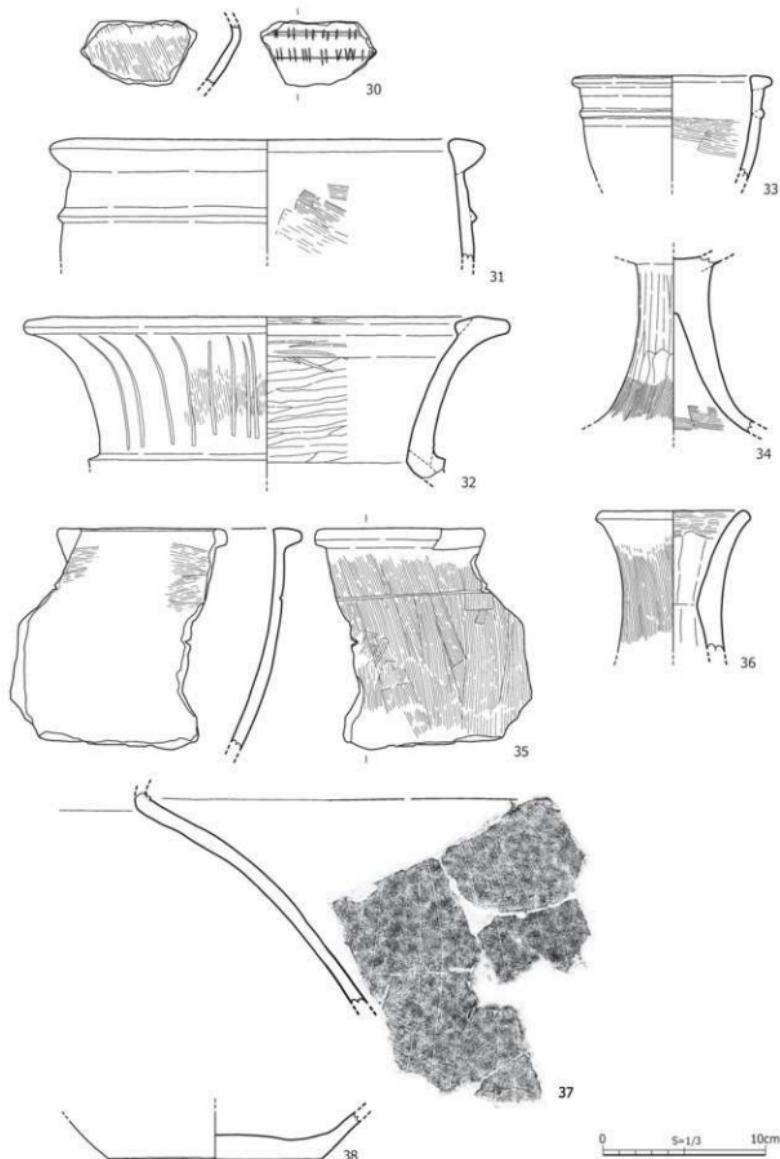
第68図 年の神道跡（B地點）遺構配置図



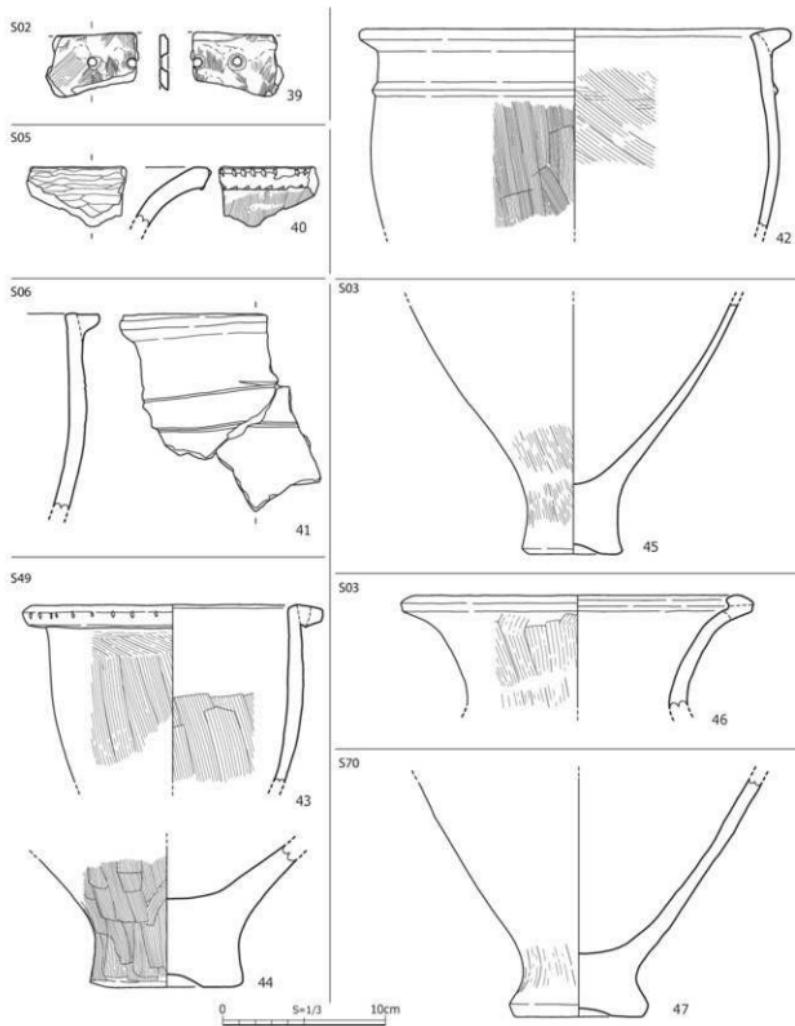
第69図 年の神遺跡（B地点）トレーナー実測図1



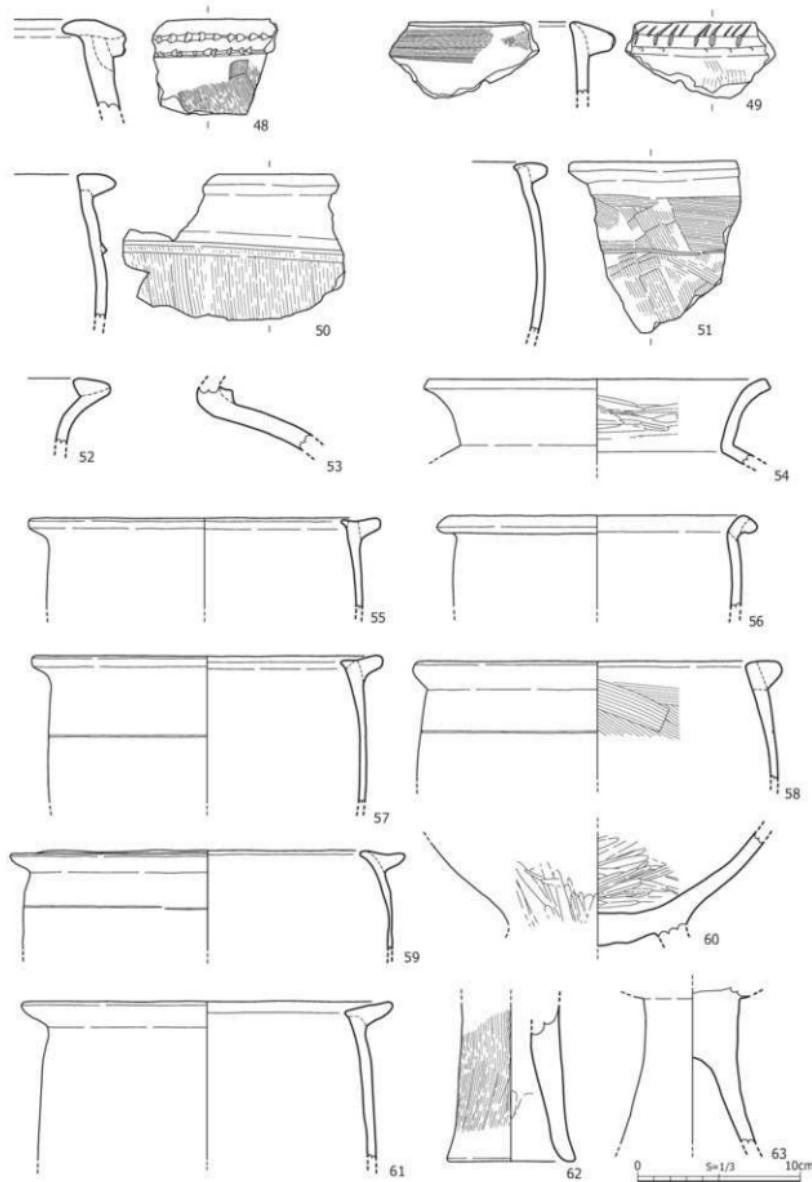
第70図 年の冲縄跡（B地点）トレント実測図2



第 71 図 年の神道跡 B 地点出土遺物実測図 1 (S01)



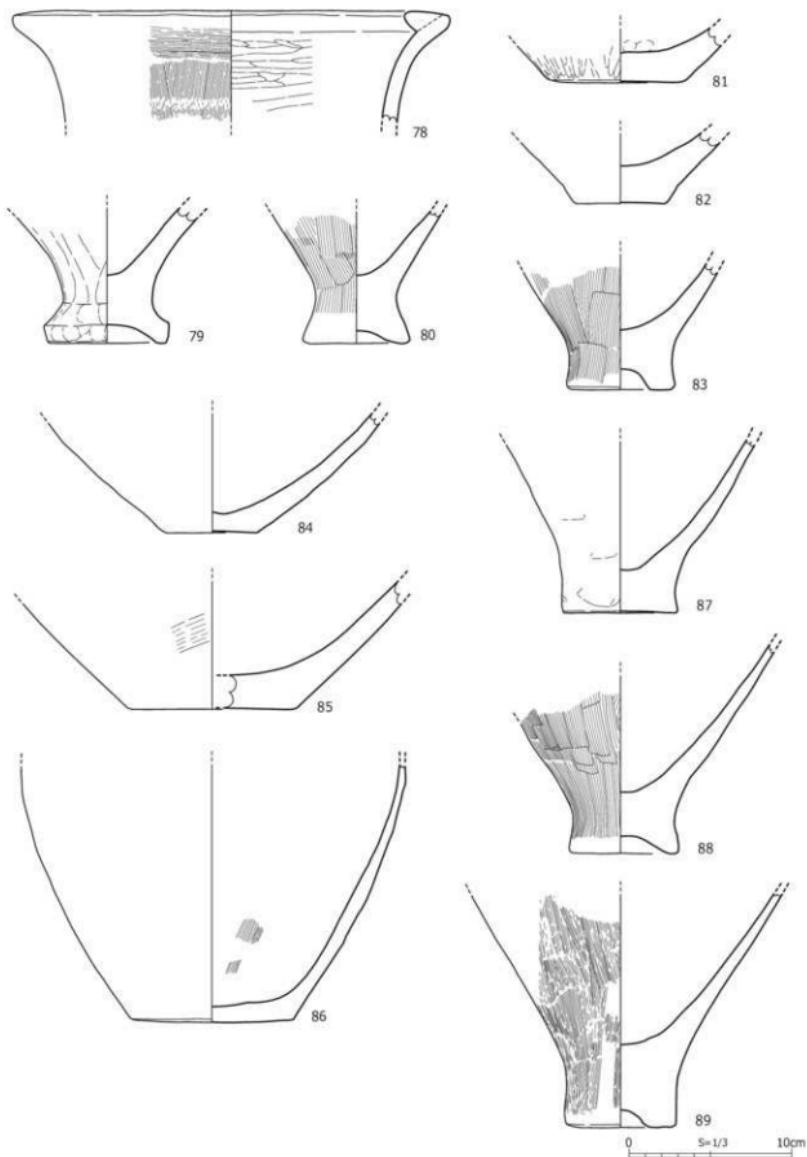
第 72 図 年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 2 (S02,503,505,506,549,570)



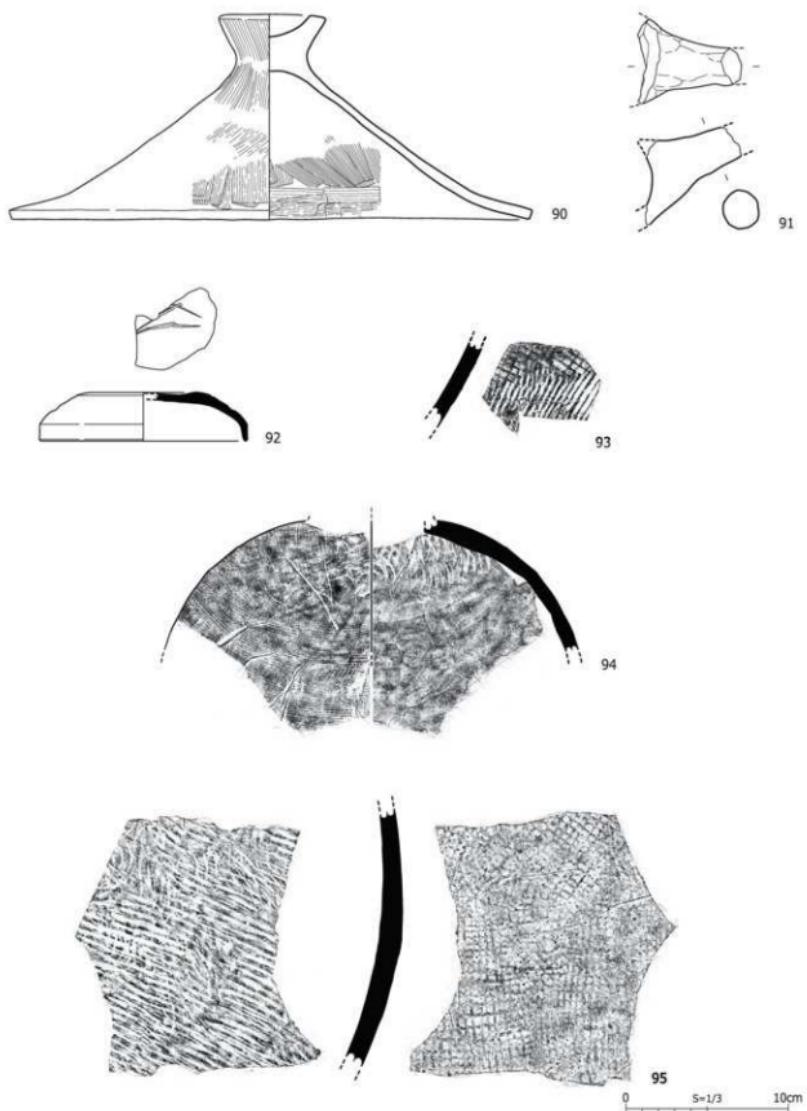
第73図 年の神遺跡B地点出土遺物実測図 3（包含層）



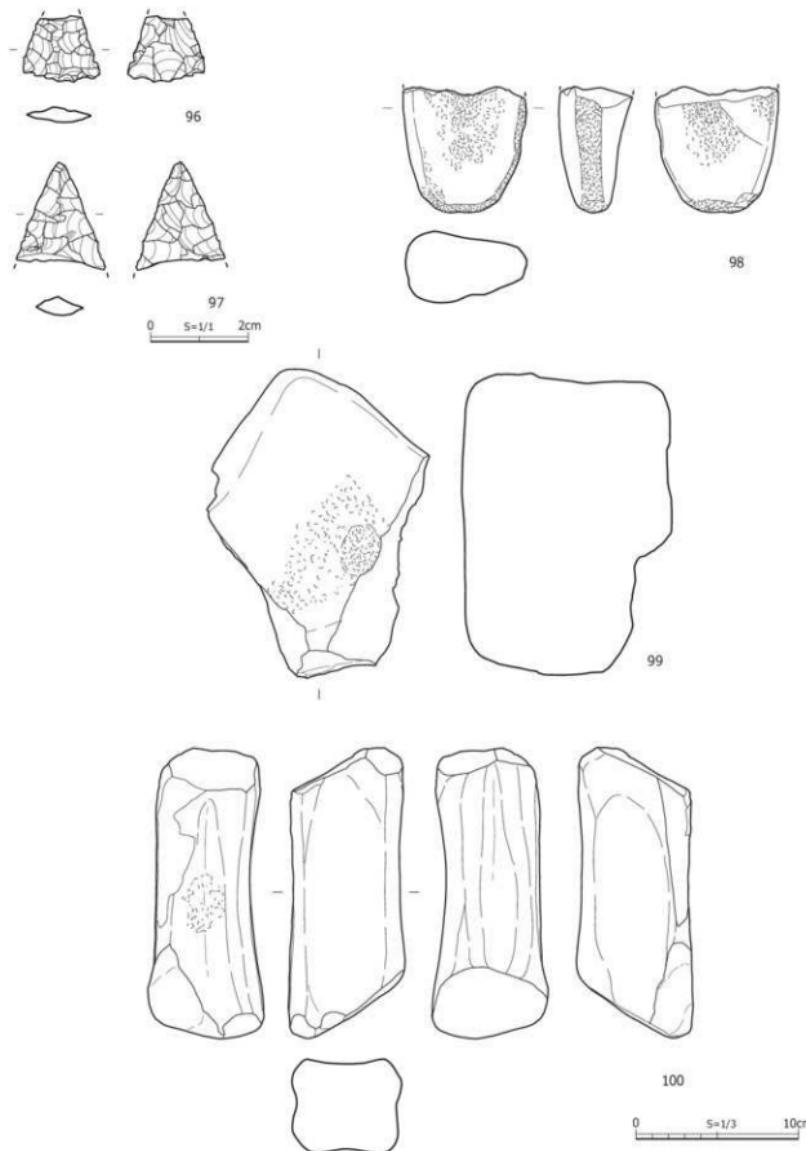
第 74 図 年の神道跡 B 地点出土遺物実測図 4 (包含層)



第 75 図 年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 5 (包含層)



第 76 図 年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 6 (包含層)



第 77 図 年の神遺跡 B 地点出土遺物実測図 7 (包含層)

写真 46 年の神遺跡B地点

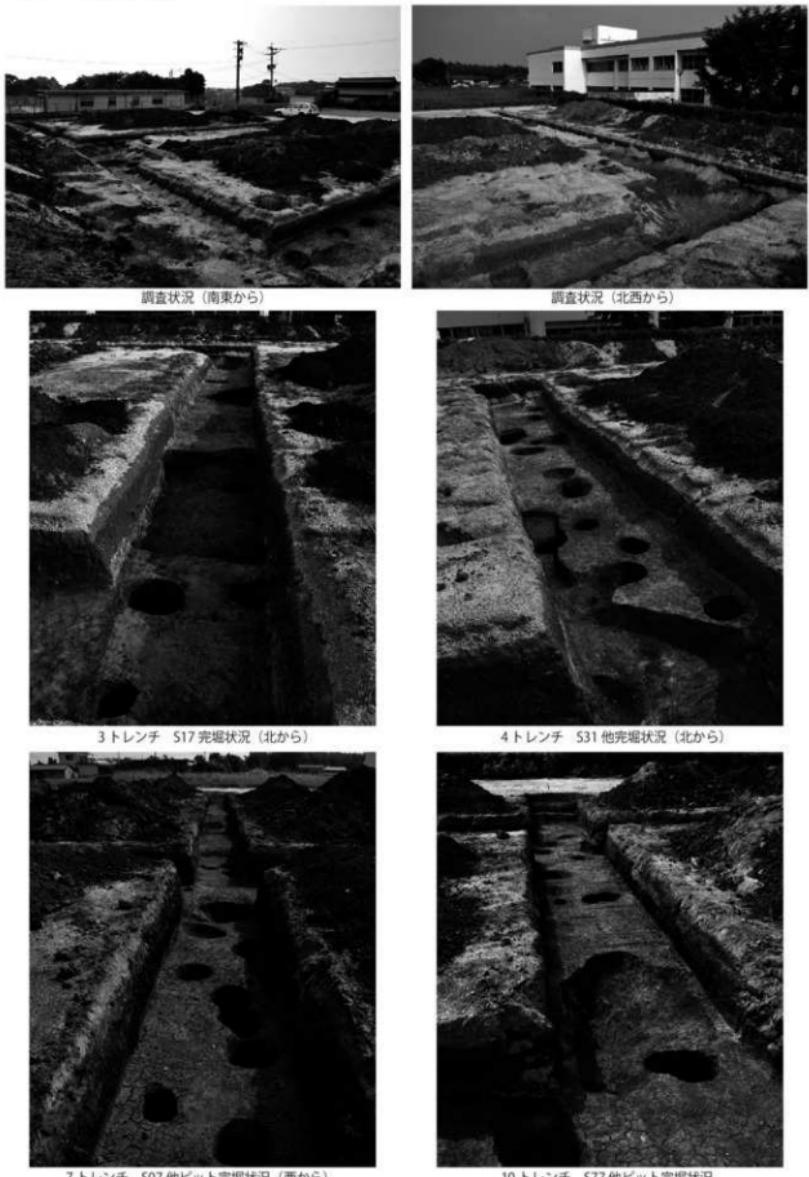


写真 47 年の神遺跡B地点



7 ブレンチ S82 他ピット完堀状況（北東から）



8 ブレンチ S70 遺物出土状況（西から）



年の神遺跡出土遺物（包含層）



年の神遺跡出土遺物（包含層）



年の神遺跡出土遺物（S06）



年の神遺跡出土砾石（包含層）

3 今泉遺跡

所在地：岱明町上字今ノ本 609、610

調査原因：送電線鉄塔

対象面積：204m²

調査期間：平成 25 年 8 月 27 日

担当者：末永 崇

調査地は、小岱山南側に披がる低丘陵上に位置する、標高約 22~23 m の地点である。丘陵全体が段状に造成され、水田や畑となっている。

周辺は、これまでに弥生土器や石包丁などが採集されている。平成 4 年頃には、造成中に箱式石棺 2 基分が確認されている。地元の人によると、周辺は「百塚」と呼ばれ、大規模な墳墓群があった可能性がある。遺跡地図では、近辺に「今泉古墳」が 1 基あるが、これも現在は消滅しており、安山岩の板碑が残されているだけである。

九州電力の送電線鉄塔移設に伴い、確認調査を実施した。調査対象範囲の現況は畑であり、北側の畑は 1.6 m ほど高く段差がついている状況であった。

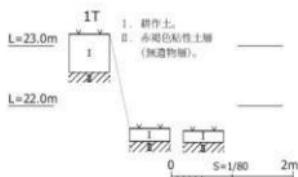
鉄塔の基礎で掘削される範囲を中心にトレンチを 3か所設定して、重機により掘削して調査した。

その結果、北側の上段にあたる畑では約 65cm、下段の畑では約 20cm の耕作土があり、その耕作土の直下は赤褐色粘性土層（無遺物層）と判断した。

遺構は検出されず、遺物は耕作土内から土器細片が少量出土した程度であった。

層位の状況から、敷地内は耕作地造成に伴い削平されているものと考えられる。

以上のような状況であることから、慎重工事となつた。



第 80 図 今泉遺跡トレントン柱状図



第 78 図 今泉遺跡調査位置図 S=1/5,000



第 79 図 今泉遺跡トレントン配置図 S=1/1,000



写真 48 今泉遺跡調査地遠景（東から）

4 横原遺跡

所在地：寺田字中塔 62-1

調査原因：専用住宅

対象面積：545.35m²

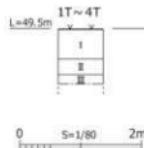
調査期間：平成 25 年 9 月 10 日

担当者：田中康雄

調査地は、熊本市から玉名市天水町に抜ける金峰山地北側の伊倉丘陵性台地ほぼ中央部に位置している。現在石材所の作業施設が所在しているが、以前は耕作地であったとのことである。国道 208 号線玉名バイパスの分岐点南側に隣接しており、近年当該地周辺では、同道の建設や開通に伴い、埋蔵文化財の本調査や試掘・確認調査が頻繁に実施されている。

工事内容は、専用住宅の建替えであるが、深さ 4.5m の地盤改良杭 48 本及び合併浄化槽が設置されることから確認調査を実施した。

調査では、合併浄化槽及び地盤改良杭設置部に 4 カ所のトレンチを設定した。各トレンチとも、旧建物建設・解体時の整地層（Ⅰ層）下に、旧耕作土と考えられる黒褐色土（Ⅱ層）、その下に地山層と考えられる褐色土（Ⅲ層）を確認した。Ⅱ層中には遺物の混入は認められず、Ⅲ層上面でも遺構は確認されなかった。3 トレンチ東端部では、Ⅲ層の下層上面で風倒木らしき痕跡を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。施工主からの聞き取りでは、20 数年前、南側隣接地で農業用の赤土が大量に採取されたらしいが、各トレンチの状況から、当該地もそれ以前に同様の削平を受けている可能性が高く、その際に埋蔵文化財は消失していると考えられる。



第 83 図 横原遺跡トレンチ柱状図



第 81 図 横原遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第 82 図 横原遺跡トレンチ配置図 S=1/1,000



写真 49 横原遺跡調査地遠景

5 池田遺跡群

所在地：立願寺 952 外

調査原因：福祉施設

対象面積：3,547m²

調査期間：平成 25 年 10 月 22 日～23 日

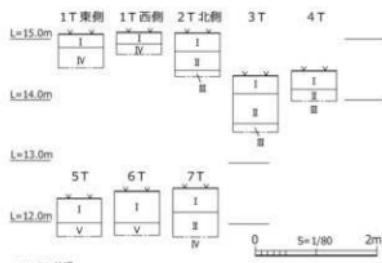
担当者：末永 崇

調査地は、繁根木川右岸の低丘陵上から裾部にかけての、標高 7～15 m ほどの地点である。かつては桑畑であり、現在は畑に造成されている。

調査対象地は高低差があるため 3 段に造成されており、上段、中段、下段に区分される。今回の調査では、上段に 1、2 トレンチ、中段に 3、4 トレンチ、下段に 5、6、7 トレンチを設定し、重機及び人力で掘り下げて埋蔵文化財の状況を確認した。

確認した層位は、I 層が現在の耕作土、II 層が造成に伴う埋土、III～V 層が暗褐色～明褐色を呈するローム層及び砂質土であり、全体で遺構は確認されなかった。遺物は、表採及び耕作土中から近世の陶磁器片、弥生時代の土器片をごく少量検出した。層位などの状況から、これまでの造成工事などで遺跡の大部分は削られていると判断される。

工事の内容は、福祉施設の建設工事である。確認調査の状況から、埋蔵文化財に影響はないとの判断される。よって、慎重工事となった。



- 1T～7T 共通
- 現在の耕作土
 - 暗褐色土 (7.SYR3/4) ややしまり、粘性なし。造成による埋土。
 - 埋土 (7.SYR4/4) しまり、粘性を有す。ローム層。無遺物層。
 - 明褐色土 (7.SYR5/8) しまり、粘性を有す。ローム層。無遺物層。
 - 明褐色土 (7.SYR5/6) しまり、粘性なし。砂質土。無遺物層。



6 布毛遺跡（玉名平野遺跡群 A 地点）

所在地：河崎 458-1

調査原因：調査依頼（不動産売買）

対象面積：1,674m²

調査期間：平成 25 年 7 月 27 日～28 日

担当者：末永 崇

調査地は、菊池川右岸の平野部に位置する、標高約 5m の地点である。北側に隣接する玉名バイパスでは、平成 6 年度から 12 年度にかけて柳町遺跡の発掘調査が行われ、古墳時代～古代を中心とした遺構・遺物が出土している。今回の調査地に近い地点では、平成 9 年度に調査が行われ、流路などが検出されている。

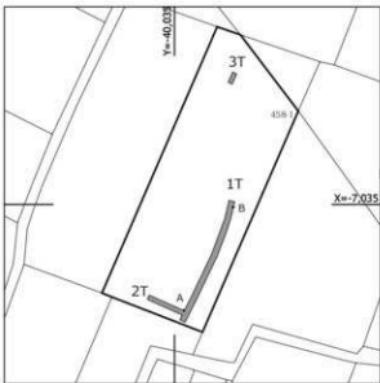
調査では、敷地内に 1～3 トレンチを設定し、重機及び人力で掘削して埋蔵文化財の状況を確認した。

層位は I～Ⅶ 層までを確認した。その結果、遺構は検出されず、IV 層から土器細片が数点出土した。層位の状況は、1～3 トレンチとも概ね同様であり、締まりなく強い粘性を有する堆積土を主体とする。

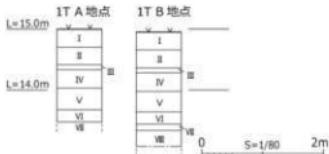
工事の内容は、水田を 1m ほど盛土して共同住宅を建設するものである。基礎掘削は盛土内に収まるが、径 40cm の柱状改良杭が 113 本設置される。確認調査の状況から、埋蔵文化財に対する影響はないと考えられることから、慎重工事となった。



第 87 図 布毛遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第 88 図 布毛遺跡トレンチ配置図 S=1/1,000



- 土壤注記**
- I 表土 規則耕土。
 - II 黄褐色土 (2Y6/4) しまりなく、粘性有す。
 - III 黄褐色土 (5Y5/3) 特にしまりなく、粘性有す。粒子が繊かい砂粒含む。シルト質。
 - IV 黄褐色土 (5Y4/2) しまりなく、粘性有す。酸化鉄含む。土質細粒ごく少脂含む。
 - V 黄褐色土 (2Y5/2) しまりなく、粘性有す。酸化鉄多く含む。
 - VI 黄褐色土 (2Y5/2) しまりなく、粘性有す。酸化鉄含む。
 - VII 黄褐色土 (5Y4/1) しまりなく、粘性有す。一般化マンガン含む。
 - VIII 黄褐色土 (5Y4/1) 略弱よりしまりなく、粘性有す。

第 89 図 布毛遺跡トレンチ柱状図



写真 51 布毛遺跡調査状況

7 六反田遺跡（玉名平野遺跡群 B 地点）

所在地：岩崎字六反田 82-1,132-1

調査原因：福祉施設

対象面積：2,492.36m²

調査期間：平成 26 年 1 月 20 日

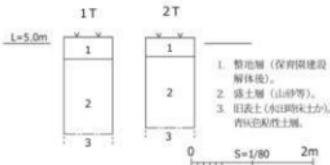
担当者：末永 崇

調査地は、繁根木川左岸の氾濫原、低湿地に位置する、標高約 5m の地点である。保育園の敷地内であり、昭和 50 年頃に盛土して造成されているということであった。

確認調査では、建物予定範囲の 2ヶ所にトレチを設定し、重機により掘削して埋蔵文化財の状況を確認した。

その結果、両トレチで盛土層を確認した。1 トレチでは現在の地表面から約 1.6m、2 トレチでは約 1.5m で旧表土とみられる青灰色の粘質土層が確認された。遺構・遺物は確認されなかった。

工事の内容は、保育園施設の新築工事である。確認調査の結果から、埋蔵文化財に対して影響はない判断されることから慎重工事となった。



第 92 図 六反田遺跡トレチ土層剖面図



第 90 図 六反田遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第 91 図 六反田遺跡トレチ配置図 S=1/1,000



写真 52 六反田遺跡調査地

8 高瀬船着場跡（第 2 次調査）

所在地：永徳寺地内

調査原因：河川護岸整備

対象面積：3,000m²

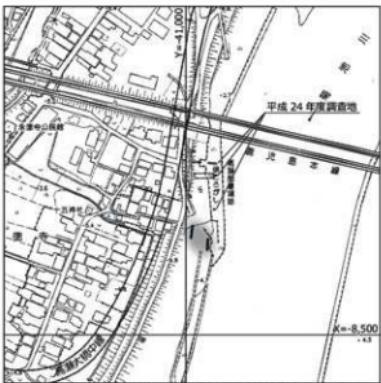
調査期間：平成 26 年 1 月 21 日～3 月 20 日

担当者：末永 崇

当該地は、菊池川右岸の川沿いに位置する、標高 3～7m ほどの地点である。近世以降に造営された高瀬御蔵・御茶屋に付随する船着場跡で、全体的に石垣で整備され 2 基の俵ころがしと 1 基の揚場が所在する。下流側の俵ころがし周辺が新波頭、上流側の俵ころがしと揚場周辺が旧頭渡と呼ばれている。

調査では、新頭渡側に 2ヶ所のトレンチを設定し、重機及び人力で掘削して状況を確認した。

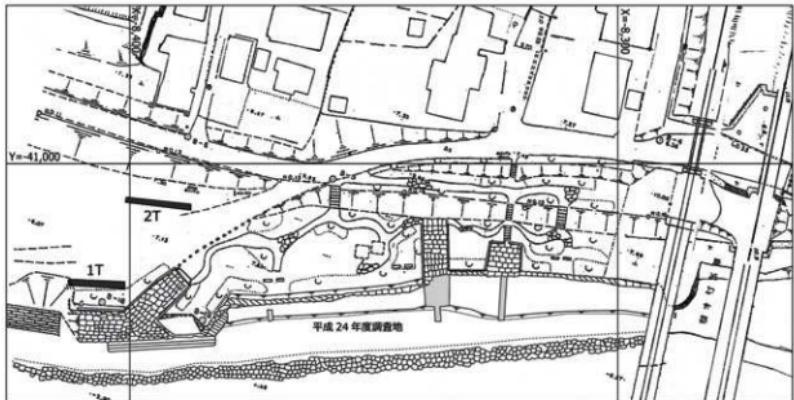
1 トレンチでは、I～IX 層まで確認した。I～VI 層までは客土、VII 層以下は暗褐色を呈する粘質土及び砂質土であった。2 トレンチでは、表土の下はすべて砂層であり、堤防工事時の造成と判断される。1 トレンチで凝灰岩が 2 個確認された。石垣等、遺構は確認されなかった。



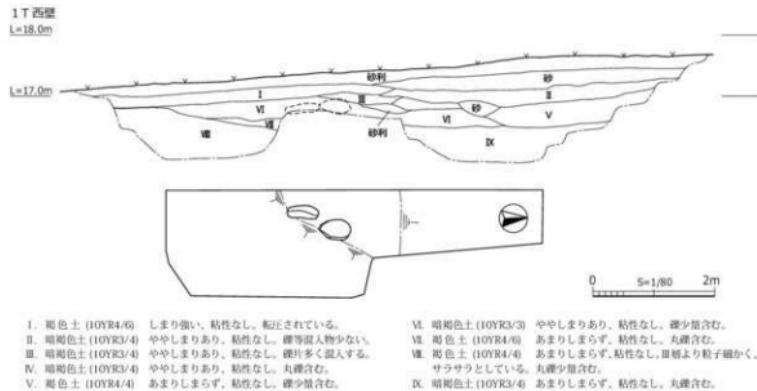
第 93 図 高瀬船着場跡平成 25 年度調査地位置図 S=1/5,000



写真 53 高瀬船着場跡調査地遠景



第 94 図 高瀬船着場跡平成 25 年度調査地トレンチ配置図 S=1/1,000



第 95 図 高瀬船着場跡 1 レンチ実測図



1 レンチ調査状況（南から）



2 レンチ調査状況（北から）

9 備中原遺跡

所在地：岱明町西照寺備中原 265-3 外 8 筆

調査原因：太陽光発電施設

対象面積：28,292m²

調査期間：平成 26 年 2 月 4 日～2 月 18 日

担当者：末永 崇

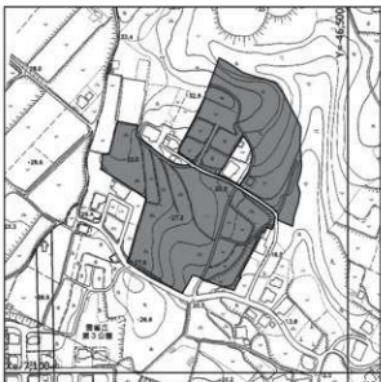
調査地は、小岱山南側に広がる低丘陵上に位置する、標高約 20～32m の地点である。南東側に下る傾斜地であり、敷地内は数十年前から畑や果樹園として階段状に造成されている。その後一部放棄されて雑木林となっていたが、近年は伐採後に整地されている状況であった。

当遺跡は、かつてナイフ型石器が採集されたことで知られているが、本格的な発掘調査は行われていないため詳細は不明である。

調査では、敷地内に 7ヶ所トレンチを設定し、重機及び人力で掘り下げて埋蔵文化財の状況を確認した。

その結果、全てのトレンチで無遺物層と判断される白色粘性土及び礫層が確認され、遺物等は検出されなかった。敷地内全体で、近現代の陶磁器片が少量表採されるが、それ以前の時代の土器片等は確認されなかった。また、中央の里道付近の 2 トレンチでは、ローム層の 2 次堆積層がみられた。本来は谷状の部分に上を削って埋められた状況と判断される。

工事の内容は、太陽光発電施設の設置工事である。確認調査の状況から、埋蔵文化財に対する影響はないとの判断され、慎重工事となった。



第 96 図 備中原遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第 97 図 備中原遺跡調査地位置図 S=1/5,000



写真 54 備中原遺跡調査状況

10 尾崎遺跡

所在地：岱明町野口字尾崎 1031-1 外 12 筆
岱明町野口字木船 263-1 外 4 筆

調査原因：学校施設

対象面積：3,709.09m²

調査期間：平成 26 年 2 月 12 日

担当者：末永 崇

調査地は、境川右岸の低丘陵上に位置する標高約 10 m の地点である。一帯は、縄文時代の尾崎貝塚があったとされるが、現在は、専修大学玉名高等学校の敷地内となっており、その痕跡は認められない。

調査では、校舎増築予定地の基礎部分に 2 か所トレンチを設定して、重機で掘下げて埋蔵文化財の状況を確認した。

1 トレンチは、現況面から約 70cm、2 トレンチが約 115cm まで掘削した。その結果、両トレンチともにアスファルト及び碎石層の下には、砂層と粘性土層が互層状に堆積する岱明層が確認された。岱明層はローム層よりも下位にあたるものと考えられ、遺構・遺物は検出されなかった。

調査地における、学校建設前の地形は、校舎側が丘陵部分、グラウンド側が谷部と考えられ、造成の時点で丘陵側は削平を受け、谷部分が盛土されたものとみられる。

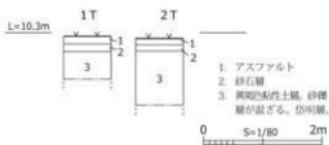
工事の内容は、校舎の増築工事であり、確認調査の結果から埋蔵文化財に対する影響はないものと判断されたことから慎重工事となった。



第 98 図 尾崎遺跡調査位置図 S=1/5,000



第 99 図 尾崎遺跡トレンチ配置図 S=1/1,000



第 100 図 尾崎遺跡トレンチ層柱状図



写真 55 尾崎遺跡調査地遠景

11 内添遺跡（玉名平野遺跡群 C 地点）

所在地：玉名字内添 1042-1,1042-5

調査原因：共同住宅

対象面積：557.60m²

調査期間：平成 26 年 2 月 20 日

担当者：末永 崇

調査地は、菊池川右岸の平野部に位置する標高約 5 m の地点である。

敷地内は、既存建物の解体後に整地されている状況であった。

調査では、建物予定地部分に 2 か所のトレントを設定して、重機及び人力で掘削して埋蔵文化財の状況を確認した。

層位は、I 層から III 層までを確認した。I 層が表土及び整地層で、II・III 層が褐色を呈する粒子の細かい砂質層であった。遺物は、III 層でローリングを受けた土器小片 1 点を検出したのみである。

玉名平野部で確認されているような低湿地帯に見られる粘性土層は確認されなかったことから、この周辺は以前から微高地状に陸地化していたものと考えられる。

工事の内容は、共同住宅の新築工事である。盛土が施されるため、埋蔵文化財に対する影響はないものと判断されたことから慎重工事となった。



第 101 図 内添遺跡調査地位置図 S=1/5,000



第 102 図 内添遺跡トレント配置図 S=1/1,000



第 103 図 内添遺跡トレント層柱状図



写真 56 内添遺跡調査状況（2 トレント）

第3表 平成24・25年度出土遺物観察表（土器類）

編號	標号	遺跡名	出土場所	層別	緯度	緯度	経度	経度	外觀		内觀		地土	土壤	標号	
									高さ(cm)	幅さ(cm)	高さ(cm)	幅さ(cm)				
1		塗瓦階段(A地点)	I区 S01 2番	土壠跡	15	12.1	—	4.75	ヘタガリ ナナメ	ヨコナメ ハラマキナ	ごく薄い白 色の土壠	5YR5/4 7.5YR4/1	薄い白灰色の 土壠	少	灰	外面一面黒色 内面少
2		塗瓦階段(A地点)	I区 S01 1番	井戸土壠	井	(1.4)5	—	(6.8)	ミヨコデ ハラマキ	ナナメ	ごく薄い白 色の土壠	5YR5/4 7.5YR4/1	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
3		塗瓦階段(A地点)	I区 S01 上部	土壠跡	井	12.2	—	9.8	ヨコナメ ナナメ	ヨコナメ ナナメ	ごく薄い白 色の土壠	5YR5/6 10YR4/3	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
4		塗瓦階段(A地点)	I区 S01 上部(洗掘部分)	井戸土壠	井	(1.1)7	—	(7.9)	ハクメイナナメ ヨコナメ	ナナメ	ごく薄い白 色の土壠	5YR7/4 10YR3/6	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
15	5	塗瓦階段(A地点)	I区 S01 下部	井戸土壠	井	4.7	—	4.6	輪底正圓 輪底	輪底正圓 輪底	輪底正圓 輪底	5YR7/6 5YR7/6	輪底正圓 輪底	少	灰	少
6		塗瓦階段(A地点)	I区 S01 (洗掘部分)	井戸土壠	井	(24.0)	—	(4.6)	ハクメイナナメ ヨコナメ	ナナメ	ごく薄い白 色の土壠	5YR7/4 10YR3/6	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
7		塗瓦階段(A地点)	I区 S01 1番	土壠跡	井	14.0	—	19.5	ナナメ ハラマキ	ナナメ	ハクメイナナメ ヨコナメ	5YR6/6 10YR6/6	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
8		塗瓦階段(A地点)	I区 S01 2番	土壠跡	井	10.25	—	24.25	ヨコナメ ナナメ	ナナメ	ごく薄い白 色の土壠	5YR6/4 10YR6/4	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
9		塗瓦階段(A地点)	I区 S01 上部	土壠跡	井	10.1	—	10.1	輪底正圓 輪底	輪底正圓 輪底	輪底正圓 輪底	5YR6/4 5YR6/4	輪底正圓 輪底	少	灰	少
18	13	塗瓦階段(洗掘点)	I区 A区 2番	井戸土壠	井	—	—	(3.8)	ハクメイナナメ ヨコナメ	ナナメ	ヨコナメ ナナメ	5YR6/1 10YR6/1	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
15		電車軌道	OT 507	井戸土壠	井	—	—	5.1	不明	ナナメ	ナナメ	5YR6/6 10YR6/6	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
16		電車軌道	OT 501 2番	井戸土壠	井	—	—	(5.5)	ナナメ	ナナメ	ナナメ	5YR6/6 10YR6/6	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
42	17	電車軌道	OT 501 2番	井戸土壠	井	—	—	(5.8)	ナナメ	ナナメ	ナナメ	5YR6/6 10YR6/6	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
18		電車軌道	OT 501 3番	井戸土壠	井	15.2	5.6	8.0	ナナメ	ナナメ	ヨコナメ ナナメ	5YR6/4 10YR6/4	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
61	21	保育園2号地	保育園2号地	井戸土壠	井	—	—	(5.2)	ナナメ	ナナメ	ナナメ	5YR6/6 10YR6/6	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
61	22	保育園5号地	保育園5号地	井戸土壠	井	—	—	(8.2)	ナナメ	ナナメ	ナナメ	5YR6/6 10YR6/6	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
23		伊勢の塗瓦	ST 5番	井戸土壠	井	—	—	(1.75)	輪底正圓 輪底	ナナメ	ヨコナメ ナナメ	5YR6/4 10YR6/2	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
24		伊勢の塗瓦	ST 4番	井戸土壠	井	—	—	(10.2)	横用輪底正圓 輪底	ナナメ	ヨコナメ ナナメ	5YR6/4 10YR6/4	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
25		伊勢の塗瓦	ST 3番	井戸土壠	井	(3.1)2	—	(11.3)	ナナメ	ナナメ	ヨコナメ ナナメ	5YR6/2 10YR6/2	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
66	26	伊勢の塗瓦	ST 2番	井戸土壠	井	—	—	(4.5)	ナナメ	ナナメ	ヨコナメ ナナメ	5YR6/2 10YR6/2	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
27		伊勢の塗瓦	ST 1番	井戸土壠	井	—	(12.7)	(5.0)	不明	ナナメ	ナナメ	5YR6/4 10YR6/4	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
28		伊勢の塗瓦	ST 1番	井戸土壠	井	—	(2.7)	凹輪ナナメ	ナナメ	ナナメ	ヨコナメ ナナメ	5YR6/1 2.5YR7/1	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
29		伊勢の塗瓦	ST 1番	井戸土壠	井	—	(3.1)	凹輪	凹輪	凹輪	ヨコナメ ナナメ	5YR6/1 10YR6/2	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少
72	30	伊勢の塗瓦	S01	井戸土壠	井	—	(4.0)	凹輪	凹輪	凹輪	ヨコナメ ナナメ	5YR6/4 10YR6/4	薄い白灰色の 土壠	少	灰	少

番号	標号	遺物名	出土場所	形	寸法	断面	測量 位置(cm)	外観	内観	地	土	備考
31		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(26.8)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR5/4 甕口 5YR6/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
32		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(30.0)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR5/2	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
33		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(12.4)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/3	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
34		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(11.0)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/3	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
72		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(13.7)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/3	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
35		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(8.7)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/3	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
36		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(9.6)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/3	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
37		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(13.0)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/4	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
38		年の神御跡(8地点)	501	供生土器	甕	(13.2)	(3.0)	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/3	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
40		年の神御跡(8地点)	505	供生土器	甕	(3.7)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/4	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
41		年の神御跡(8地点)	506	供生土器	甕	(12.0)	(28.6)(全)	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/4	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
42		年の神御跡(8地点)	506	供生土器	甕	(26.6)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/2	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
43		年の神御跡(8地点)	540(8地中)	供生土器	甕	(18.6)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/2	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
73		年の神御跡(8地点)	549	供生土器	甕	(8.8)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/4	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
44		年の神御跡(8地点)	503	供生土器	甕	(5.7)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
45		年の神御跡(8地点)	503	供生土器	甕	(6.2)	(15.4)	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
46		年の神御跡(8地点)	560	供生土器	甕	(21.8)	—	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
47		年の神御跡(8地点)	570	供生土器	甕	(8.6)	(14.7)	ナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
48		年の神御跡(8地点)	1-1	供生土器	甕	(5.7)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
49		年の神御跡(8地点)	1-1	供生土器	甕	(4.5)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
50		年の神御跡(8地点)	8T	供生土器	甕	(8.9)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
51		年の神御跡(8地点)	9T	供生土器	甕	(10.4)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
74		年の神御跡(8地点)	1T	供生土器	甕	(4.1)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/6	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
52		年の神御跡(8地点)	1T	供生土器	甕	(3.1)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR7/3	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
53		年の神御跡(8地点)	8T	供生土器	甕	(21.3)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR5/1	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
54		年の神御跡(8地点)	8T	供生土器	甕	(21.6)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/3	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良
55		年の神御跡(8地点)	1T	供生土器	甕	(3.6)	—	ヨコナメ ハクメナメナデ	〔八〕黄褐色 10YR6/4	細孔~ 孔や少く SUD	無石	良

番号	器名	通称名	出土場所	形	寸法	断面	断面 寸法(cm)	外觀			地土	備考
								口径	底径	高さ		
56	年の神鏡(8世紀)	17 1 缶	弥生土器	筒	(19.8)	ナガフ	ナガフ	[(内) 5.9VR/3	[(外) 5.9VR/2	幅が大きいを多く、筒形、 外径が長いを多く、筒形、 鉛石を多く	良	
57	年の神鏡(8世紀)	27 1 缶 (16.4)	弥生土器	筒	(21.8)	—	(8.1)	ハクメスナガフ	ナガフ	直筒型	ナガフ	8世紀
68	年の神鏡(8世紀)	17 1 缶	弥生土器	筒	(22.6)	—	(7.3)	ナデ	ハクメスナガフ	ナデ	1段大口縁、鉛石を多く らに近く	下段
59	年の神鏡(8世紀)	87 1 缶	弥生土器	筒	(24.2)	—	(6.3)	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	幅7.5VR/2	直筒型	
74	年の神鏡(8世紀)	87 1 缶	弥生土器	筒	(26.9)	—	(7.05)	ヘラガタナガフ	ナガフ	電気色 5.9VR/5.1 (外) ハラガタ	3段大口縁、直筒型	良
61	年の神鏡(8世紀)	67 1 缶	弥生土器	筒	(22.8)	—	(8.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5VR/2	直筒型	
62	年の神鏡(8世紀)	97 1 缶	弥生土器	筒	(25.6)	—	(7.9)	ヨコナデ	ナデ	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
63	年の神鏡(8世紀)	97 1 缶	弥生土器	筒	(26.0)	—	(8.7)	ナデ	ヨコナデ	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
64	年の神鏡(8世紀)	87 1 缶	弥生土器	筒	(22.0)	—	(8.0)	ヨコナデ	ヨコナデ	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
65	年の神鏡(8世紀)	87 1 缶	弥生土器	筒	(25.6)	—	(7.1)	ヨコナデ (窄底)	ヨコナデ (窄底)	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
66	年の神鏡(8世紀)	97 1 缶	弥生土器	筒	(26.0)	—	(8.3)	不明	ヨコナデ (窄底)	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
67	年の神鏡(8世紀)	67 1 缶	弥生土器	筒	(27.8)	—	(12.0)	ヨコナデ	ナデ	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
68	年の神鏡(8世紀)	67 1 缶	弥生土器	筒	(21.5)	—	(5.9)	(内) ヨコナデ (外) 不明	(内) ヨコナデ (外) 不明	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
69	年の神鏡(8世紀)	77 1 缶	弥生土器	筒	(27.8)	—	(5.2)	ヨコナデ	ヨコナデ	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
70	年の神鏡(8世紀)	37 1 缶	弥生土器	筒	(29.2)	—	(8.1)	ハクメスナガフ	ナデ	電気色 7.5VR/6	直筒型	良
75	年の神鏡(8世紀)	67 1 缶	弥生土器	筒	(26.5)	—	(8.9)	不明	ヨコナデ	電気色 7.5VR/3	2段大口の石縁、直筒型	良
72	年の神鏡(8世紀)	87 1 缶	弥生土器	筒	(25.6)	—	(5.6)	ハクメスナガフミヨカシ	ミヨカシ	電気色 7.5VR/6	2段大口の石縁、直筒型	良
73	年の神鏡(8世紀)	27 1 缶 (16.4)	弥生土器	筒	(26.6)	—	(6.6)	ナデ	ナデ	電気色 7.5VR/6	2段大口の石縁、直筒型	良
74	年の神鏡(8世紀)	27 1 缶 (16.4)	弥生土器	筒	(26.5)	—	(6.0)	ハクメスナガフ	ナデ	電気色 7.5VR/6	2段大口の石縁、直筒型	良
75	年の神鏡(8世紀)	17 土	弥生土器	筒	(26.5)	—	(7.1)	ヨコナデ	ヨコナデ	電気色 7.5VR/6	2段大口の石縁、直筒型	良
76	年の神鏡(8世紀)	97 1 缶	弥生土器	筒	(26.5)	—	(6.3)	ヨコナデ	ナデ	電気色 7.5VR/6	2段大口の石縁、直筒型	良
77	年の神鏡(8世紀)	67 1 缶	弥生土器	筒	(26.4)	—	(7.2)	ヨコナデ	(内) ヨコナデ (外) ヨコナデ	電気色 7.5VR/6	2段大口の石縁、直筒型	良
78	年の神鏡(8世紀)	17 土	弥生土器	筒	(27.0)	—	(6.9)	ハクメスナガフ	ミナリ	電気色 7.5VR/6	2段大口の石縁、直筒型	良
76	年の神鏡(8世紀)	47 1 缶	弥生土器	筒	(26.4)	—	(7.3)	ナデ	ハクメスナガフ (工芸品)	電気色 7.5VR/6	2段大口の石縁、直筒型	良
79	年の神鏡(8世紀)	17 1 缶	弥生土器	筒	(26.5)	—	(7.3)	ナデ	ハクメスナガフ	電気色 7.5VR/4	2段大口の石縁、直筒型	良

件名	標号	遺跡名	出土物品	層別	厚さ(cm)	口径	底面	外観			内観		地土	備考
								横幅	縦幅	高さ	横幅	縦幅		
76	80	井の沖縄(佐原)	TT	帶土層	焼	6.6 (8.2)	ハクメ ナデ	浅縁壺型 10YR8/3	灰白色 10YR8/2	1m×1mの石室、石室を手前	土	目		
	81	井の沖縄(佐原)	TT 1・1層	帶土層	焼	8.4 (3.4)	ハミガキ ナデ	浅縁壺型 10YR8/3	灰白色 10YR8/3	1m×1mの石室、外側石、青	土	目		
	82	井の沖縄(佐原)	TT	帶土層	焼	5.6 (4.3)	ナデナ ナデ	浅縁壺型 7.5YR8/2	灰白色 7.5YR8/2	1m×1mの石室、底面を打	土	目		
	83	井の沖縄(佐原)	TT 1・1層	帶土層	焼	6.7 (7.8)	ハクメ ナデ	浅縁壺型 7.5YR8/2	灰白色 7.5YR8/2	1m×1mの石室、底面を打	土	目		
	84	井の沖縄(佐原)	TT 1・1層	帶土層	焼	5.6 (7.4)	ナデ	浅縁壺型 10YR8/3	灰白色 10YR8/3	1m×1mの石室、底面を打	土	目		
	85	井の沖縄(佐原)	TT	帶土層	焼	10.4 (7.9)	ナデ	浅縁壺型 10YR8/2	灰白色 10YR8/2	1m×1mの石室、外側石、青	土	目		
	86	井の沖縄(佐原)	TT	帶土層	焼	10.0 (15.9)	平頭	浅縁壺型 10YR8/4	灰白色 10YR8/4	3m×3mの石室、青	土	目		
	87	井の沖縄(佐原)	TT	帶土層	焼	7.2 (10.7)	ハクメ ナデナ	浅縁壺型 10YR8/3	灰白色 10YR8/3	1m×1mの石室、底面を打	土	目		
	88	井の沖縄(佐原)	TT	帶土層	焼	6.7 (13.0)	ハクメ ナデ	浅縁壺型 5YR8/8	灰白色 5YR8/8	1.5m×1.5mの石室、底面を打	土	目		
	89	井の沖縄(佐原)	TT	帶土層	焼	6.8 (14.4)	ハクメ ナデ	浅縁壺型 2.5YR7/4	灰白色 10YR8/3	3m×3mの石室、底面を打	土	目		
	90	井の沖縄(佐原)	TT 1・1層	帶土層	焼	6.6 (32.2)	ハクメ ナデ	浅縁壺型 2.5YR7/4	灰白色 10YR8/4	3m×3mの石室、底面を打	土	目		
	91	井の沖縄(佐原)	TT	土埴輪	焼	5.6 (5.2)	窓(ナデ) 窓(ナデ)	窓(ナデ) 窓(ナデ) 窓(ナデ) 窓(ナデ)	窓(ナデ) 窓(ナデ) 窓(ナデ) 窓(ナデ)	3m×3mの石室を含む	土	目		
	92	井の沖縄(佐原)	TT	埴輪	焼	7.0 (12.8)	ナデ	浅縁壺型不規則なナデ	灰白色 2.5YR7/2	窓(ナデ) 窓(ナデ)	天井跡の跡にへら	目		
77	93	井の沖縄(佐原)	TT 1・1層	埴輪	焼	— (6.7)	平頭ナタ ナタ	平頭ナタ ナタ	灰白色 5YR7/1	0.5m×0.5mの石室を有する少	土	目		
	94	井の沖縄(佐原)	TT	埴輪	焼	— (8.1)	ナカタナ ナカタナ	ナカタナ ナカタナ	灰白色 5YR7/1	1m×1mの石室、白い柱子、や	土	目		
	95	井の沖縄(佐原)	TT	埴輪	焼	— (15.9)	ナカタナ	ナカタナ	灰白色 5YR8/4	1m×1mの石室を有する少	土	目		

編 號	標 名	產 地	出土 點	層 別	長 (cm)	寬 (cm)	高 (cm)	材 質	圖 號
73	39 年の漆器	在心の漆器	IT	S02	石打下	5.7	4.0	0.5	21.3
96	96 年の漆器	在心の漆器	ST1	面		1.3	1.6	0.3	7 黒漆石
97	97 年の漆器	在心の漆器	ST1	底		2.3	1.8	0.4	1.1 黒漆石
98	98 年の漆器	在心の漆器	土中	漆器	漆器	7.8	7.6	4.5	297.0 安政
99	99 年の漆器	在心の漆器	IT 1 番	石打下		19.1	13.7	12.9	4250.0 安政
100	100 年の漆器	在心の漆器	ST 1 番	底	17.9	7.2	7.1	1200.0 秋村	4 美を鏡石にして 利田

第1表 甲戌35年度出士調査報告書（石器類 金属器類）

編號	地點名	遺物名	出土層位	層面	長寬 (cm)	厚度 (cm)	重量 (g)	石 斧	圖 畜
10	新地場(A地-2)	1區 501 上層(耕作下)	燧石	3.5	8.4	3.5	79.0	有眼	新地場A地-2
15	11 新地場(A地-1)	1區 501 土上	玻璃器	3.0	1.3	0.5	2.09	-	新地場A地-1
12	新地場(A地-1)	1區 501 土上	玻璃器	5.2	2.9	0.6	11.31	-	新地場A地-1
26	14 西門牆	1T 相交土中	陶	1.5	1.2	0.4	0.71	圓底	西門牆
42	19 龜甲牆	13T 507 1層 牆面	小型 片刀	8.4	1.7	1.4	31.8	圓刃	龜甲牆
42	20 龜甲牆	13T 507 a層 牆面	扁刀	6.0	9.6	3.5	223.0	玉質扁刀	龜甲牆

報告書抄録

ふりがな	たましないいせきちょうさほうくしょ						
書名	玉名市内遺跡調査報告書Ⅷ						
副書名	平成24・25年度の調査						
卷次							
シリーズ名	玉名市文化財調査報告						
シリーズ番号	第33集						
編著者名	齋父雅史						
編集機関	玉名市教育委員会						
所在地	〒865-8501 熊本県玉名市岩崎163						
発行年月日	2017年3月17日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° °'	° °'	m ²	
年の神道路 A 地点	玉名市伊明町野口	43206	32° 55' 19"	130° 31' 21"			
年の神道路 A・B 地点	玉名市伊明町野口	43206	32° 55' 30"	130° 31' 59"			
築地館跡 A・B 地点	玉名市築地	43206	32° 56' 10"	130° 31' 57"			
築地館跡 C 地点	玉名市築地	43206	—	32° 56' 08"	130° 31' 58"		
丸山遺跡	玉名市寺田	43206	328	32° 55' 21"	130° 35' 08"	2011年4月	学校施設・
龜甲遺跡群	玉名市龟甲	43206	334	32° 55' 44"	130° 33' 16"	~	宅地造成・
林出遺跡	玉名市中	43206	208	32° 55' 50"	130° 32' 35"	2012年3月	店舗等
高瀬船着場跡（第1次）	玉名市永徳寺	43206	668	32° 55' 26"	130° 33' 42"		
高山遺跡	玉名市中	43206	487	32° 55' 44"	130° 32' 58"		
信玄五名城建設予定地 C 地点	玉名市伊明町野口	43206	—	32° 55' 42"	130° 32' 08"		
市内遺跡分布詳細検査	玉名市内各地	43206	—	—	—		
伊食宮の後道路	玉名市伊食北方	43206	32° 54' 31"	130° 34' 45"			
年の神道路 B 地点	玉名市伊明町野口	43206	432	32° 55' 17"	130° 31' 14"		
今泉遺跡	玉名市伊明町上	43206	733	32° 55' 51"	130° 30' 45"		
櫛原遺跡	玉名市寺田	43206	466	32° 55' 15"	130° 35' 11"		
油田遺跡群	玉名市立願寺	43206	247	32° 56' 12"	130° 33' 27"	2012年4月	学校施設・
井戸遺跡	玉名市河崎	43206	247	32° 56' 12"	130° 34' 18"	~	専用住宅・
六反田遺跡	玉名市岩崎	43206	—	32° 56' 01"	130° 33' 38"	2013年3月	福地移設・
高瀬船着場跡（第2次）	玉名市永徳寺	43206	251	32° 55' 24"	130° 33' 42"		店舗等
鍋中原道路	玉名市伊明町西脇寺	43206	328	32° 56' 17"	130° 29' 59"		
足跡	玉名市伊明町野口	43206	—	32° 55' 28"	130° 32' 15"		
内部遺跡	玉名市玉名	43206	668	32° 56' 32"	130° 34' 49"		
主な遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
年の神道路	包蔵地	弥生	土坑・ピット等	弥生中期壺・石臼丁・砥石	2間×2間		
築地館跡	城館跡	弥生・中世	住居跡・掘立柱建物跡等	弥生後期土器・鐵器	の9本縦柱建物跡		
龜甲遺跡群	包蔵地	弥生	住居跡・掘立柱建物跡等	弥生土器・柱状片刃石斧等	2間×3間の12本縦柱建物跡		
吉丸前道路	城館跡	中世	溝状遺構・柱穴等	石器			

玉名市文化財調査報告 第33集
玉名市内遺跡調査報告書IX
— 平成 24・25 年度の調査 —

平成 29 年 3 月 10 日印刷

平成 29 年 3 月 17 日発行

編集発行 玉名市教育委員会

〒 865-8501 熊本県玉名市岩崎 163

TEL 0968-75-1136 FAX 0968-75-1138

印 刷 株式会社 有明印刷

〒 865-0022 熊本県玉名市寺田 123-1

TEL 0968-73-2055

